市民ミュージアム

大野城心のふるさと館紀要

第 3 号

目　次

高句麗広開土王碑文拓本と改ざん説をめぐって
舟山　良一　1
玄海灘沿岸地域における直柄鍬の展開―大野城市森園遺跡出土資料をふまえて―
鶴来　航介　23
【資料紹介】出口遺跡出土の須恵器甕について―肥後国荒尾窯跡群産須恵器の紹介―
山元　瞭平　39
【ふるさとラボ通信】『ウメ』の伝来はいつ―目加田さくを氏の著作から―
舟山　良一　45
【報告】大韓民国国立公州大学校歴史博物館との市民サポーター交流事業
大野城心のふるさと館・大韓民国国立公州大学校歴史博物館
市民サポーター交流事業実行委員会　51

2023 年

大野城心のふるさと館
Onojo Cocoro-no-furusato-kan City Museum
OCCM

市民ミュージアム

大野城心のふるさと館紀要

第 3 号

2023 年

大野城心のふるさと館
Onojo Cocoro-no-furusato-kan City Museum
OCCM

目次

高句麗広開土王碑文拓本と改ざん説をめぐって
舟山　良一…… 1

玄海灘沿岸地域における直柄鍬の展開―大野城市森園遺跡出土資料をふまえて―
鶴来　航介（福岡市埋蔵文化財課）…… 23

【資料紹介】出口遺跡出土の須恵器甕について―肥後国荒尾窯跡群産須恵器の紹介―
山元　瞭平…… 39

【ふるさとラボ通信】『ウメ』の伝来はいつ―目加田さくを氏の著作から―
舟山　良一…… 45

【報告】大韓民国国立公州大学校歴史博物館との市民サポーター交流事業
大野城心のふるさと館・大韓民国国立公州大学校歴史博物館市民サポーター交流事業実行委員会
…… 51

高句麗広開土王碑文拓本と改ざん説をめぐって

舟山　良一

１．はじめに

大野城市を含む福岡平野一帯は古来大陸文化の窓口として重要な場所であった。市内では旧石器時代の朝鮮半島由来とされる剥片尖頭器をはじめ、中国新代の青銅製貨幣である貨布、後漢代の内行花文鏡片、魏鏡とする説が強い三角縁神獣鏡、朝鮮半島統一前後の新羅土器など、中国や朝鮮半島系の遺物が多く出土している。遺物のみならず、本市の東部には市名の由来となっている朝鮮式山城の特別史跡大野城跡がある。

このように、本市は中国大陸や朝鮮半島の文化と深い関わりがある。しかし、本市を含む北部九州のみならず、日本の対外関係の歴史を考える際の資料としては、先に上げた考古資料以外に『日本書紀』や『漢書』をはじめとする中国史書、朝鮮半島の歴史書である『三国史記』・『三国遺事』などがあげられるが、金石資料として極めて重要なものに高句麗広開土王碑がある。『日本書紀』には記されていない日本と高句麗の関係が明記されている。日本は当時倭と呼ばれたが、高句麗史上有名な広開土王の最大の敵としてその戦闘の様子が記されている。ところが、昭和47年（1972）に、広開土王碑に日本の軍部が石灰を塗布して碑文を改ざんしたとする、李進熙氏の衝撃的な論文が発表された。令和４年（2022年）は改ざん説発表後50年を迎えた。現在改ざん説は否定され、今それを唱える人はいないであろうが、あらためて改ざん説とそれを巡る論争を振り返ることは、日本古代史研究に意味のあることだと考える[註1]。

広開土王碑の研究史については、昭和49年（1974）までの状況について佐伯有清氏の『研究史広開土王碑』[註2]がある。しかし、それ以降については、李進熙氏や武田幸男氏その他多くの研究者が書いた論文によっておおよその流れが把握できるが、まとまった形の研究史はなかった。しかし、近年井上直樹氏が戦後日本の高句麗史研究動向と課題を述べる中で、碑文研究の歴史を取り上げている[註3]。改ざん説発表当時大学生であった筆者は日韓古代交流について研究していたので、非常に驚き、改ざんが事実なら広開土王碑文は古代史の史料として使用できなくなるのではないかと危惧した一人である。論争が鎮まった今日、改ざん説論争を振り返り、その後の碑文研究を整理することは意義あるものと考える。

２．研究史概観

高句麗広開土王碑は、いうまでもなく高句麗第19代の王である広開土王の業績を顕彰するため、息子の長寿王が広開土王の死の２年後の414年に建てた巨碑である。碑は高句麗第２の首都であった現在の中国吉林省の集安市にある。同碑文の研究については、日中韓で長い歴史があり、論文や刊行本の数は極めて多い。

同碑文の研究史上で画期と考えられた時が何回かある。碑文が将来された時、碑文の解読文が公開され、学者の考え方が示された時、水谷悌次郎氏の解読文が発表され広く知られるようになった時、

将来者と解読を行った機関や人物の解明が進んだ時、そして碑文が改ざんされていたとする説が出された時、中国人以外の外国人には開放されていなかった碑が日本人に解放された時、常時碑文の観察可能な中国人研究者の論文が公表され、国際シンポジュウム等で関係する各国の研究者が意見を交換できるようになった時などである。

（1）改ざん説以前の研究

同碑文が現地で注目されるようになったのは、明治13年（光緒６年・1880）頃のようで[註4]、日本に将来されたのは、明治16年（1883）である。将来者は当時の陸軍砲兵大尉酒匂景信である。解読は参謀本部で進められたが、将来された碑文拓本（当時は拓本とされたが、現在は墨水廓填本と言われるもの）は133枚の小紙に分かれていて順番通りに貼り合わせるには非常な困難があった[註5]。途中で確認のために酒匂が呼ばれているが、明治22年（1989）６月に発行された『会余録』第５集に掲載されたものには数か所の貼り間違いがあった。拓本そのものは、明治天皇に献上され、さらに当時の帝室博物館に移管され、現在は東京国立博物館で所蔵されている。順番の間違いがあったが、『会余録』には拓本（前述のとおり現在は墨水廓填本と言われるもの）に加えて横井忠直の「高句麗出土記」と関連文献を載せた「高句麗古碑考」そして釈文が添えられた。現在からみれば、発見状況などに間違いがあるが、公開されたことによって、明治24年（1891）に菅政友、明治26年（1893）には那珂通世、明治31年（1898）に三宅米吉が所論を発表した[註6]。碑文の読み方は基本的に『会余録』に沿った内容であった。貼り合わせ順番の間違いは、三宅米吉がその後に大きな紙で採られた拓本（小松宮拓本と言われる）を見ることによって訂正した（1898年）[註7]。三宅は順番を訂正するだけでなく、後述する水谷悌二郎氏が指摘するように、この拓本によって語句の修正も行っている。

これら３氏の論文によって、日本が４世紀末から５世紀はじめにかけて朝鮮半島に派兵した証拠として碑文の価値は非常に高いということが確定したとして良いであろう[註8]。

ただし、３氏の論文は『会余録』という参謀本部編纂課員・陸軍大学校教授の横井忠直の解説付き本[註9]によって書かれたもので、３氏は原碑は見ていない。しかし、広開土王碑は日朝関係史上注目される資料となったため、その後学者が現地を訪れている。最初に訪れたのは明治38年（1905）10月の鳥居龍蔵である。明治42年（1909）再訪し写真撮影を行った。また、大正２年（1913）10月には関野貞・今西龍・谷井済一・栗山俊一が碑のみならず、周辺にある将軍塚や太王陵の調査を行い、その成果は『朝鮮古蹟図譜』第１冊に収録された。さらに、大正７年（1918）に黒板勝美が訪れて、同行した沢俊一が写真撮影を行った[註10]。昭和に入り、昭和10年（1935）９月と翌年10月に浜田耕作と池内宏そして梅原末治らが調査を行っている。当時は中国との緊張関係から治安が悪く軍の庇護の下に調査が行われた。調査成果は『通溝』（1941）に掲載された[註11]。

学者が実際に碑文を見た報告で注目すべき点は、碑面が荒れていて良好な拓本をとるのは難しいことから、より見かけの良い拓本をとるため、拓本職人が碑に石灰を塗って碑面を平滑にしようとしていることを確認していることである。今西龍氏は「此碑文を史料として史を考証せんとするものは深き警戒を要す。」とまで警告を発しているのであるが、必ずしも後世の研究者が受け継いだとは言えない状況が続いた。

現地へは、学者のみならず、中野政一氏のような軍人も訪れていたことが、武田幸男氏によって紹介されている[註12]。

戦後の研究史で真っ先に挙げなければならないのは水谷悌二郎氏の研究である。水谷氏は明治26年（1893）生まれで専門の研究者ではないが、昭和の初め頃から広開土王碑文の研究を始めた。数種の拓本を購入し比較しながら解読を進めた。その成果が「好太王碑考」と題し公表されたのは昭和34年（1959）で、書道専門誌の『書品』百号誌上であった。実は研究そのものは戦後すぐにまとめられて

いたが、公表まで10年を要した。また、発表誌が歴史専門誌ではなかったため、しばらくは広くは知られなかった。水谷氏は数種の拓本を検討し、すべて同一のものがないことに不信を抱いて研究を進めたが、文字が違う原因が碑面に石灰（氏は漆喰とし、その状態を漆喰仮面と呼んだ）を塗ったこととした。さらに、拓本の編年に最初に取り組んだ人物でもあった。氏は積極的に拓本を求めたが、貴重な拓本も入手されている。昭和20年（1945）に入手したのは「水谷蔵原石整拓本」と呼ぶもので、武田幸男氏は石灰塗布前に北京の有名な工匠である李雲従が1889年に拓出した原石拓本とする[註13]。ただし、この拓本については、李進熙氏は逆に、石灰塗布後長年風雨によって石灰が剥がれた1930年代のものとした（後述）。水谷氏の論文は末松保和氏の勧めもあって、昭和52年（1977）９月『好太王碑考』という単行本として出版された[註14]。附録としてこの「水谷蔵原石整拓本」が付けられた。氏の業績は、複数の拓本を比較検討し、作製年代順に並べたこと、一字一字を詳細に観察して読み方に飛躍的な進歩を打ち出したこと、最初の碑文研究者が青江秀氏だったことを明らかにするなど、新たな発見や後世の研究に及ぼした影響は非常に大きい。後述する李進熙氏の、拓本を考古学的に編年する研究方法も水谷氏の影響を受けたと言える。末松保和氏は『好太王碑考』で「解説」を執筆し、「水谷悌二郎氏の『好太王碑考』は、碑文研究の流れを一変せしめた」と評している。また、別著で評伝を書いた武田幸男氏は「水谷氏はその生涯を不屈の探求心でおし通した」と評されている[註15]。最近、水谷氏の膨大な日記が、武田幸男氏の翻刻と注記とともに公表された。原石拓本を入手した昭和20年５月15日の記述には「宝物を獲」とある[註16]。

次に取り上げなければならないのは、1960年代に発表され、日本の古代史学界に衝撃を与えた北朝鮮学者の研究である。金錫享氏は、三韓以来三国時代まで朝鮮半島から日本列島に渡った人々がそれぞれ分国を作っていたとし、広開土王碑文については、日本側の通常の解釈とは違い、有名な「百残新羅旧是属民由来朝貢而倭以辛卯年来渡海破百残・・」部分の解釈は、倭は北九州にあった百済系の倭で、広開土王はその故国である百済を海を渡って破ったとした[註17]。ただ、当該部分の主語を倭から広開土王にする解釈は韓国で先に行われている。1955年に鄭寅普氏が唱えた説がそれである[註18]。

また、朴時亨氏は金錫享氏らとともに1963年に現地調査を行い、調査結果並びに碑文の解釈を加え、1966年に『広開土王陵碑』として出版した[註19]。朴時亨氏は、碑文の解釈に留まらず、関係する古文献を渉猟し、広開土王在位時代前後の国際情勢も考察している。前述の「倭以辛卯年来渡海破・・」部分は、倭が辛卯年に侵入して来たために、わが高句麗（広開土王）は海を渡っていき、それを撃破したと解釈して、金錫享氏と同様「渡海破」の主語は高句麗とした。

このように日本の通説とは大きく異なる研究であったが、注目度が高まったのは、金、朴氏の説に影響を受けて日本側で新たな研究が次々と発表された1970年代前半であった。この時期の研究では、碑文がどのような人物によってどのように将来され、どのように解読されたかが明らかにされ、その上で碑文自体が正しいのかという議論が行われた点に大きな意義がある。それは北東アジア全体の研究者をも巻き込んだ大論争に発展した。

まず、中塚明氏は、自身の研究の契機は金錫享氏の論文を読んだことだと明記して、碑文は参謀本部将校酒匂景明（後に佐伯有清氏の研究により景信と判明）が明治17年（1884）に将来し、その解読が参謀本部で進められたこと、そしてその後「倭以辛卯年来渡海破・・」部分だけが注目され、日本の統一が４世紀半ばには完了し、４世紀末には朝鮮半島まで攻め入ったという日本人の常識が出来上がり、それは戦後も続いたとし、朝鮮史研究の体質にまで詳細に論じた。今後は日本の近代史学史において、日朝関係史がどのように研究され、どういう問題点を含んでいるのか、あらゆる面にわたって根本的に再検討してみなければならないとした[註20]。

（２）李進熙氏の改ざん説

李進熙氏は碑文の解釈に留まらず、碑文そのものの真偽を疑った。すなわち、碑に石灰がかけられ、悪意を持って本来の文字と違う文字が彫り込まれたのではないかとする説を出した。将来者の酒匂景信が碑文内容の重要性を認識し、まず日本に都合の良いように石灰塗布により文字を改ざんした。次に日本の参謀本部で持ち帰られた拓本の解析が進められたが、改ざんの間違いに気づき、参謀本部が２回目の大規模な碑文改ざんを行った。しかし、さらに間違いが判明し、３回目の改ざんを行ったとするものである。氏がそのように推論した理由は、作成年代の判明する拓本を年代順に並べると、本来なら拓本は文字が風雨等によって徐々に不鮮明になるはずなのに、逆にある時期から鮮明になったり、前になかった文字が現れたりすることから、その理由は故意に人為的な加工が行われたからだということである。氏はその推論を出すにあたっては、幅広く文献探求を行い、拓本（現在では墨水廓填本とされるものも含めて）を考古学的手法で編年するなど、きわめて精緻な研究を行った。李氏がこの問題を取り上げた理由は、「解放後朝鮮では、かつての植民地主義的歴史観にもとづいた「朝鮮史」体系を正す問題をはじめとする各分野の研究において大きな成果をおさめた。とくに、初期朝日関係史については、日本の学界の通説とは全く異なるいくつかの重要な問題が提起された。「任那日本府」説の否定がその一つである。しかし、日本の学界では、朝鮮の研究者の問いかけにたいして、「史料解釈の是非」とか「朝鮮人研究者の民族主義的見地に立つもの」といって、容易に耳をかそうとはしなかった。」と述べていて、先の中塚明氏と同様に日本古代史学会の体質を問題にしたことがわかる[註21]。

李進熙氏の碑文改ざん説は、日本の古代史学界のみならず、中国や韓国の研究者にも衝撃を与えた。日本ではすぐに反対論が出された。整理した形で反論した研究者として古田武彦氏が上げられる[註22]。古田氏の主な批判点は①拓本の編年にあやまりがある。②史料読解に錯誤がある。③使用した写真や拓本・写本の解釈に問題がある。④日本に最初に将来された酒匂本に関する研究に問題があるなど多岐にわたる。古田氏は、李氏が酒匂景信が持ち込んだ墨水廓填本の中で酒匂景信がすりかえた文字として18箇所26文字、参謀本部が行った石灰塗布作戦で書き込まれた文字として５個所５文字、第３次加工として書き入れられた文字が２箇所２字の合計25個所33字であると指摘した。

李氏はすぐに反論を行っている[註23]。全面的な反論だが、特にすりかえた個所と文字について、酒匂が書き換えた個所は18箇所ではなく、６個所だけで、その他は酒匂の「誤鉤と言える。」と書いたのに、古田氏は誤解しているとした。古田氏以外にも李氏への反論のうち、李氏が指摘した改ざん個所が少ないという批判は比較的多くの研究者から出されているが、李氏は、「指摘した文字以外はすべて原碑文のはずだとは、僕はどこにも書いていない。碑面を調査すれば、もっと多くの問題が出てくることは確かですから、まず碑の調査の方が急を要する問題だと思う。」と述べていて、改ざんされた具体的な字数は上げていない[註24]。李氏自身の碑文の解釈文を発表されていないのもその理由からくることで、まず石碑の詳細な検討が必要だという主張は生涯変えなかった。

1960年代後半はパリを始め、世界的に学生を中心にして既成の権威に異議を唱えた時代で、日本でも大学紛争に伴うロックアウト等で昭和44年（1969）３月には東京大学と東京教育大学（現在は廃学になり筑波大学が創設されている）の入学試験が中止になり、70年代前半もその雰囲気が続いていた。そのような時代に李氏の改ざん説は当否はともかくとして学会や歴史を学ぶ学生に大きな影響を与えた。当時の大学での講義の様子を井上光貞氏はこう綴っている。「1973年度の学部の講義「六世紀史の研究」では前半の原稿（著者註：小学館『日本の歴史』第３巻『飛鳥の朝廷』の原稿）を講じたものだったが、金氏（著者註：金錫享氏）や李氏（著者註：李進熙氏）の説に共鳴する学生の少なくないであろう教室で全く緊張した講義をつづけたものであった。」[註25]。また、毎日新聞は昭和48年

（1973）２月20日（火）の朝刊の社説で「広開土王陵碑の国際調査を」と題した問題提起を行っている。

李氏の問題提起は日本の古代史学界に大きな衝撃を与えたのは間違いないが、大勢は李氏の精緻な研究を評価しながらも、改ざんそのものを認めた研究者は基本的にはいなかったとして良いであろう。しかし、碑文の解釈、特に「倭」の解釈については統一政権としての「大和政権」とみなす研究者と、北九州地域を含め日本の一部とする研究者に分かれた。当時の論争を知る資料は多種あるが、先述したとおり、論争のみならず、広開土王碑の研究史全体を論じた佐伯有清氏の『研究史広開土王碑』（1974年８月刊）がある。この中でも他の論考でも佐伯氏自身も李氏説には疑問を呈している[註26]。また、昭和49年（1974）５月に朝鮮史研究会主催で、李進熙氏も出席し、武田幸男氏司会で行われた座談会を記録した『古代朝鮮と日本』[註27]は、当事者の発言そのものが収録されていて興味深い。同書には旗田巍氏が前年に発表された論文に補足した「広開土王陵碑文の諸問題」も掲載されているが、学史や当時の日本の学界状況だけでなく、韓国の学界状況が紹介され、さらに碑文改ざん問題に対する研究体質の問題が提起されている。すなわち、李氏は単に碑文改ざんの問題提起を行ったのではなく、古代の朝鮮侵略を肯定した日本近代史学の体質を問題にしたのであるから、それに応えるべきだとする。やや時間をおいて村山光一氏が1975年段階での広開土王碑に関する論争の現状と課題についてまとめた「古代日朝関係史研究の現状」[註28]を発表したが、当時の状況をわかりやすくまとめられている。

論争は当然ながら、実際の広開土王碑を調査して行ったものではなく、あくまでも拓本等を通して行われたものであったが、1980年代には実際に碑の精緻な観察を実施した中国の研究者の研究成果が報告されるとともに、日本の研究者が熱望した現地訪問が実現し、論争は大きな画期を迎えた。

（３）中国側の研究

広開土王碑は中国吉林省集安市にあるが、同省文物考古学研究所の王健群所長を中心にした研究グループが「1981年の４月から10月にかけて石碑そのものとそれに関連するさまざまな問題について、できるかぎりの綿密な調査を行った。」（王健群著『好太王碑の研究』まえがき）。研究は多岐にわたるが、石灰塗布並びに碑の改ざんに関わる成果として以下のような点があげられる。

碑文の石摺りを行っていた人物は、関野貞が伝えた初鵬度という名前ではなく、初天富であり、その息子は初均徳という名前であったこと、そして彼らの親族や碑の近くに住む人達からの聞き取りを行い、初天富らは生石灰を大川という所（当時石灰を焼く窯があった）から買ってきて水に溶かして使っていたこと、石灰を塗って字がわからなくなった場合に備えて手本とする「手抄本」を作っていたこと、初均徳は1937年で拓碑を止めて翌年に集安から転居したことを明らかにした。また、その「手抄本」を親族から入手できた。それは筆で障子紙に書かれたもので、大きさは縦63cm、横27cmで碑の４面分の４枚あった。結論的には、「我々の調査研究の結果、はっきりいえることは、好太王碑の表面に石灰を塗ったり、文字に手を加えたり、文字を補填したりしたのは、石摺りを業としていた中国人で、具体的にいうならば初天富親子に他ならないのである。」として、日本軍部による改ざん説を否定した。また、王健群氏らはそれまで明確でないとされていた文字を相当数明らかにされ、新たな解釈を試みた。また、倭については北部九州中心の海賊集団とした。

王健群氏がこの成果を発表したのは「好太王碑的発現和捶拓」『社会科学戦線』1983年第四期通巻24号であるが、日本で広く知られたのは1983年11月30日読売新聞に「「好太王碑」解明努力を」という王論文の紹介記事からである。その後の経緯を時系列として並べれば、まず翌1984年１月10日の読売新聞に王健群氏のインタビュー記事が掲載され、さらに７月28日には朝日新聞により「好太王碑に改ざんなし」として一面トップで概要が報道された。８月には中国で王健群著『好太王碑研究』が出

版され[註29]、同年12月にその日本語版『好太王碑の研究』が出版された[註30]。同じ12月には、前述の1983年発表の「好太王碑的発現和捶拓」が翻訳され『季刊邪馬台国』1984年冬号（22号）に掲載された[註31]。そして、翌1985年１月11・12日に東京の読売ホールで中国側から王健群・賈士金・方起東の３氏、日本側から三上次男・西嶋定生・佐伯有清・上田正昭・李進熙・武田幸男の６氏が出席して公開シンポジウム「４・５世紀の東アジアと日本－好太王碑を中心に」が開催された。その記録は昭和60年（1985）12月に東方書店から出版されている[註32]。さらに、公開シンポジウムに参加した３名の中国人研究者が日本の読者のために書き下ろした論文を読売新聞社が訳出して『好太王碑と高句麗遺跡』として３年後の昭和63年（1988）６月に出版されている[註33]。

王健群氏の、碑に改ざんなしとする説に対して李進熙氏は次のように反論した[註34]。まず碑の発見年について、光緒元年（1875）としているが同６年（1880）の誤りである。水谷悌二郎氏が所蔵した拓本を石灰を塗る前の拓本とするが、その根拠は示していない。碑に石灰を塗った時期を1902年頃に始まり1907年頃完成したとしているが、それは間違いで1900年かその前年に碑全体に石灰が塗られた。石灰塗布は拓本を採りやすくするためではなく、酒匂将来本の補強であり、もちろん日本側（著者註：参謀本部）の意思が反映されている。

王健群氏は拓本の編年を行っているが、氏の編年に対しては、後述する徐建新氏が批判している[註35]。また新たに明らかになったとする碑文文字の釈読にも、たとえば第１面３行41字目（以後Ⅰ－3－41のように表記）の字は本来「履」であるが、石灰拓本の多くがそうであるように「黄」とするなど、検討する必要がある。

（４）改ざん後の碑文を実見した研究

好太王碑は新中国設立（1949年）以後北朝鮮の一部研究者を除いて外国人に門戸は開放されていなかったが、昭和59年（1984）７月にそれが解かれる。最初に訪問したのは寺田隆信東北大学文学部教授を団長にした「仙台市日中友好協会吉林省訪問団」であり、昭和59年（1984）７月11日～13日の３日間集安に滞在して広開土王碑を観察することができた。団員には関晃、井上秀雄東北大学教授らに加えて上田正昭京都大学教授など10名の研究者が参加し、その概要は活字化された[註36]。また、井上秀雄氏のように、個人の報告もなされている[註37]。

その後は堰を切ったように多くの日本人研究者が現地を訪問した。碑文の改ざん説を発表した李進熙氏も昭和60年（1985）７月に、同年１月に行われた公開シンポジウム参加者らとともに現地を訪れ、問題の個所を観察している。そして参加者は長春で熱い議論を戦わせた[註38]。

現地訪問の目的は当然ながら、碑に石灰が塗布されているのか、されているならばどの程度なのか、さらに、「以辛卯年来渡海破・・・」をはじめとする問題個所を明らかにすることであった。現地報告は新聞や雑誌等で行われたが、それらを読んで感じることは碑面に残る石灰残存状況の見方に、かなり残っているとする人と、それほどではないとする人がいることである。李進熙氏は、碑面には石灰が広範囲に残っているので、碑面にたいする科学的調査が不可欠と説いた[註39]。井上秀雄氏も前報告書でかなり残っていると述べている。一方、昭和59年（1984）11月に現地を訪れた江上波夫氏は、全体としてはきれいに取られていて、昔の状況とおなじだろうと語っている[註40]。地元研究者の王健群氏も江上波夫氏の見解を支持している[註41]。また、昭和60年（1985）当時九州大学助教授だった西谷正氏は高句麗中期の文化をトータルに見ようとする目的で訪れた集安で広開土王碑も観察されて、同年の９月18日付け朝日新聞に報告文を書かれている。そこには、「ところどころ石こうが塗られた痕跡は確かに認められ、（中略）石こうを塗布した上から「基」の字（著者註：Ⅰ－１－10字）を彫りこんでいることが知られた。こうした石こうの塗布が改ざん説を生みだすきっかけになったのではないかと思った。」とある[註42]。

（５）徐建新氏の研究

碑文の研究は、1960年代の北朝鮮研究者の観察と解釈、1970年代の研究史の見直しと李進熙氏の改ざん説の提唱、1980年代の王健群氏らの研究と、10年ごとに研究が注目を集めてきたが、1990年代には中国の徐建新氏の研究成果が注目される。徐氏は平成６年（1994）６月に明治大学の招きで来日し講演を行った。講演受講者だけではなく、多くの人が氏の主張を知ることができるよう活字化されたのは12月の『史学雑誌』であるが、内容は、北京で新たな原石拓本が発見され、それは今まで見つかっていた名工李雲従が摺ったとされている拓本とは系統の違うもので、かつそれより早い時期の拓本の可能性があるとするものである。さらに酒匂景信が日本に持ち帰り、現在は墨水廓填本と言われているものの原本の可能性もあるという資料である。徐建新氏はこの資料の発見とともに、今まで読めなかったいくつかの文字の読みも提示した[註43]。李進熙氏は徐建新氏が示した数種類の拓本の写真を見せてもらったが、それらは水谷拓本同様、年代が下がる特徴を備えていたとして新説を認めなかった[註44]。一方鈴木靖民氏は徐氏が示した拓本が原石拓本であることを認め、かつ徐氏が解釈した新しい読み方を評価し、碑文研究は新たな段階を迎えたとした[註45]。

徐建新氏は研究を深めて、2006年１月に『好太王碑拓本の研究』を刊行した。原石拓本は中国に７種類、日本に２種類（水谷悌二郎旧蔵拓本・金子鴨亭所蔵拓本）、台湾に２種類、韓国に２種類あることを明らかにされた。中国の３種類と台湾の１種類が李雲従拓本ではなく、それより古い拓本（談広慶採拓か）とした。また、従来最も古い石灰拓本と言われていた内藤拓本より古い文運堂本を発見した。これは原石拓本と石灰拓本をつなぐ重要な環の要となる拓本と評価した。さらに拓本の編年試案を提出した。１(期)として、部分的原石拓本と初期廓填本（墨水廓填本）の並行期(1880年～)、２(期）として完全な原石拓本の制作時期（1887～1889年)、３(期）として石灰拓本の制作時期（1890－1894の間～)、４(期）として碑石が保護される時期の拓本（1963年～）である[註46]。

石灰拓本については、武田幸男氏が提唱した「着墨パターン法」（後述）と、絶対年代及び相対年代の研究成果に加えて、より詳細な編年である「碑字字形比較法」を提案した。本来拓本の文字は同じ場所なら同じ文字であるはずだが、拓本によっては全く異なる文字の場合がある。多くの拓本の字形を比較することによって、それらの新旧を見出すことができるとする。

徐氏は拓本を編年することによって、水谷拓本は李進熙氏の言うように1930年代の石灰が剥落した後の拓本ではなく、原石拓本であると主張する。日本書学院所蔵の拓本が1930年代の石灰拓本で、石灰剥落時の様相を反映しているが、水谷拓本はそれとは違い、他の原石拓本に近いとする。これは、武田幸男氏や浜田耕策氏が以前より指摘していたことの追認になる[註47]。

李進熙氏は平成24年（2012）に亡くなられたが、最後まで水谷拓本が原石拓本であることを認めなかった。

３．論争により確認されること

高句麗広開土王碑文について主に李進熙氏の改ざん説を中心に研究史を概観したが、論争によって確認されることをまとめたい。

第１に碑の再発見年についてである。これについては異説がある。李進熙氏は葉昌熾の『語石』の記述が信頼できるとし、光緒６年（明治13・1880）に伐採・開墾中の農民が見つけ、その報告を受けた懐仁県知事昌樾が翌年（1881）夏ごろに部下の関月山を派遣して確認した。関はいくつかの文字を拓本に採り同好の士に送ったことから石碑の存在が知られるようになったとする[註48]。武田幸男氏は、おおむね李進熙氏の説を肯定しているが、発見の契機は昌樾が太王陵から出土する「願太王陵安如山

固如岳」の有銘塼を目当てに関月山を派遣し、関が広開土王碑を発見したとする[註49]。しかし、王健群氏は劉承幹氏の『海東金石苑補遺』や金毓黻氏の『遼東文献徴略』などが光緒初年（1875）に碑が発見されたと記していることなどを挙げ、発見は光緒元年（1875）で、葉昌熾の『語石』の光緒６年説はその理由が述べられていないし、光緒元年の書き間違いではないかとする[註50]。筆者は、李進熙氏や武田幸男氏の考証から光緒６年（1880）説が妥当と考える。

次に碑に塗られたものについてである。多くの論者は石灰と表記するが、水谷悌二郎氏は「漆喰仮面」と表現する[註51]。梅原末治氏も漆喰と表現したことがある[註52]。

漆喰は石灰に水を加えて消石灰とし、それにスサや海藻のノリなどを混ぜて作り、塗布後は大気中の二酸化炭素を吸収して徐々に硬化していく。王健群氏の聞き取りによれば、碑の近くに住んでいた辛文厚の証言として、石灰は生石灰で、大川という所に石灰を焼く窯があり、買ってきて水に溶かしてから塗っていたこと、また、よく石碑に石灰を塗っていたとの証言を得ている。もちろん証言の検証が必要であるが、消石灰として使用していたことと何回も塗っていたことは地元研究者の研究成果として信頼して良いと考える。以上から、消石灰だけでは降雨等で流されてしまうので、何かを混ぜた可能性があるが、我々がイメージする漆喰ではなく、石灰を塗ったとする表記が適当なのではと考える。

なお、この証言の際に、墨は鍋の底についた煤と墨と膠を混ぜ合わせたものだったと、拓本採りに使った墨についての証言も得ている[註53]。

また、碑に石灰を塗付していた人物名について、関野貞氏は初鵬度と記しているが、王健群氏の調査により、初天富・初均徳という名の親子であったことが判明した[註54]。

次は石灰の塗布状況についてである。碑に石灰を塗ったという表現から、まるでデコレーションケーキを作るときのように、スポンジ生地に万遍なくクリームを塗るような状況をイメージしがちであるが、石灰を全面に塗れば、その上に本来の文字と字体も大きさも位置も同一にして間違いなく文字を刻むことは不可能である[註55]。1918年黒板勝美調査時の写真[註56]に見るように基本的には文字の周囲に石灰を塗り、文字がはっきりしない場合は文字部分にも塗ったのである。その場合はその石灰の上に文字を刻むから字体も変わったり、別文字になったりすることもあった。そうして採拓された拓本が石灰拓本である。碑には縦に界線を刻み、界線の間に文字を刻んでいるため、石灰を塗布すると、まず界線が消える。石灰拓本には界線が摺りだされない。石灰が剥落してくると少しづつ見えてくることになる。李進熙氏が『広開土王陵碑の研究』に示された写真を見ると、1913年と1918年の石灰塗布状況が違っている。初親子は年や季節によって石灰の塗り方を変えていた可能性もある。厳しい冬の寒さや雨等の自然環境によって石灰の剥落状況も変わったであろうから、それに応じたのであろう。またより良い拓本を採るため石灰の塗り方も工夫したであろう。王健群氏の調査により、親子は石灰のため文字がわからなくなった時に備えて手本となる碑文の写し（碑文の抄本）を用意していたことが判明して公表されている[註57]。初天富親子が石灰を塗って拓本を売っていた時期は、これも王健群氏らの調査によって、1902年前後から1937年前後までとされた[註58]。

そもそも碑に石灰を塗って拓本を採っていたことは現地を訪れた日本人も確認している。少し長くなるが以下に極力原文のまま再録する。

関野貞氏は「碑側の茅屋に初鵬度という者居住し、碑を拓するを以て業をなす、その言う所を聞くに彼今六十六歳にして、三十年前よりここにあり、当時知縣の命により拓本を作らんとせしに、石面に長華（苔）あり、火を以て之を焚きしに石の隅角欠損せり、石面粗に過ぎ拓本の文字分明を欠くを以て十年許前より文字の周囲の間地に石灰を塗りたり、爾後毎年石灰を以て所々補修をなすと、就て詳細に調査するに文字の間地は石灰を以て塗りしのみならず、往々字画を補い、又全く新たに石灰の

上に文字を刻せる者もあり、而もこれ等の補足は大抵原字を誤らざるが如し、されども絶対の信は措き難し（生口一千人を生白一千人とせしが如し）。」と記している[註59]。

また、今西龍氏は「現今此碑の管理人と称すべき初鵬度と称する66歳（大正２年当時）の老人、其周辺に足場を常設して一人の工人を雇いて絶えず拓本を作成しれり。（中略）此碑30年前までは石上に長花（苔）茂生し文字の依存するや否やも不明なりしを以て彼知県の命を奉じて長花を焼去し文字を出せしが其際碑の一部毀損せり、以後此碑側にありて拓本の作成に従事すと。（中略）此碑欠落せし部分少なからず、（中略）原碑面のまゝ拓本を作りては不鮮明甚だしく字形も明瞭ならざるもの多数なるが故に、碑面の深く欠落せる第一面の一部の如きは泥土を以て之を填充し、なお四面ともに全面に石灰を塗り字形のみを現はし、字形の面の小凸凹を填めて之を平にし、唯拓本を鮮明にすることをのみ努めたり。されば文字中全く工人の手に成るものあり。一部分の修補せるもの至りては甚だ多し。拓本作成者は鮮明に文字を現出せば彼には充分なるが故に一切他を顧みざるを以て第三面第一行の如きは之を拓せす、修補の際原字の字画にも多くの注意を拂ひしとは思われざるに因りて此碑文を史料として史を考証せんとするものは深き警戒を要す。原碑面に何等の工を施さず、或は拓本に墨を以て後より加工せざりし純良なる拓本は、予は之を文学士堀竹雄氏の所蔵に見しことあり。」と記している[註60]。

李進熙氏はこの石灰塗布を日本の参謀本部が行ったとした。最初は酒匂景信が行い、その間違いに気づいた参謀本部が訂正のために行い、さらに間違いに気づいて訂正したと考えた。合計３回行ったことになる。そして、氏が提起した改ざん説の拠り所となったのは、拓本の編年であった。酒匂景信が将来した雙鉤本（現在は墨水廓填本と言われる）を最も古くし、小松宮拓本を石灰塗布前の拓本、内藤拓本以下を石灰塗布後の拓本、東洋文庫拓本、京大拓本、水谷拓本を石灰剥落が進行した段階の拓本とし、中でも水谷拓本を1930年代に作製された最も新しいものと考えた。この拓本編年が李進熙氏の天王山ともいうべきものであった。この編年について、当初認める研究者もいた。たとえば、佐伯有清氏は李氏の所論に対し検討を加えているが、拓本の分類や編年については「ほぼくるいはなかった」[註61]と述べられている。また、村山光一氏は前述のとおり1975年段階での広開土王碑に関する論争の現状と課題についてわかりやすくまとめているが、その中で水谷拓本について李進熙氏が編年上最も新しくしていることを認めて、「最も新しく拓出され、多くの長所をもっている水谷拓本であるが・・・」と述べられている[註62]。ただし、両氏とも改ざん説には反対した。

また、改ざん説に猛反対するが、水谷拓本は1930年代の拓本としたのが梅原末治氏である。氏は昭和10年（1935）に浜田耕作氏と池内宏氏とともに集安一帯の調査を行い、同年９月に碑文の第1面の一部を自ら拓出している。氏は水谷拓本は満州国成立（1932年）後に同国在住の日本の好事家が多くの日子を費やして作製した日本流の薄手の紙を用いてしたものとしている[註63]。

しかし、武田幸男氏は、水谷拓本は石灰塗布前のいわゆる原石拓本であると考え、昭和63年（1988）にその考えを発表した[註64]。理由は当該拓本に石灰痕がみあたらないこと、紙墨が古色を帯びていること、1930年代の石灰拓本と考えられる拓本とは墨付けが異なること、石灰拓本とは用紙法が違うこと、水谷拓本は1889年に名工李雲従が拓出したものと思われることを上げた。また、李進熙氏がⅠ－10－27字の「城」とⅡ－10－28字の「満」は氏の編年上初めの頃の拓本にはなく、後になって見えるので、これら両字が見える水谷拓本は石灰拓本の一種であるとしたことに対して、1935年撮影の写真には「城」の字が全画しっかり見える（「城」字の左上部は石灰上に刻まれている）のに、水谷拓本は「城」字の右下部が漠然と残るだけで、左上部は碑石の裂け目により欠けていることから石灰塗布以前の拓本であるとした。

笠井倭人氏は、水谷拓本が1930年代のものとする根拠にしている1935年の写真に見られる傷と水谷

拓本のそれとが一致するとする説に対して、傷がいつできたか具体的に指摘するように批判した。また、Ⅰ－10－27字の「城」とⅡ－10－28字の「満」の字が石灰拓本に後で現れたとすることを批判し、武田幸男氏同様、裂け目のため完全ではないが、元からあった字だと批判した[註65]。

浜田耕策氏も京都府立福知山高校所蔵の広開土王碑拓本を紹介するとともに、分析を行い、武田幸男や笠井倭人氏と同じ結論を導き出している。すなわち当該拓本は一見すると水谷拓本と相似する拓本であるかの印象を与えるが、詳しい観察を行うと、水谷拓本が石灰塗布以前の原石拓本であるのに対し、福知山高校所蔵拓本は石灰が剥落した後のもので拓出時期が全く違うものであると結論づけた。具体的には、前述両氏と同様に、Ⅰ－10－27字の「城」とⅡ－10－28字の「満」の字は、水谷拓本では「城」字の右下部のみ見え、左上部は石碑の裂け目で欠損しているが、1913年撮影の写真ではその裂け目に石灰を塗って「城」字を完成させているとする。同氏はその論文で写真と拓本を比較できるように配置し、丁寧に説明していてわかりやすい[註66]。

さらに白崎昭一郎氏も、水谷拓本と金子氏拓本・台湾の中央研究院蔵の拓本など原石拓本と言われるものと、石灰剥落期の拓本とされる書学院拓本を比較検討すると、10項目の相違点が見いだされ、前者が原石拓本であることに疑問の余地はないとされた[註67]。

これらの説に対し、特に「城」字に関して、李進熙氏は、「水谷拓本に（Ⅰ－10－27字の：著者註）「城」の上半部が拓出されていないのは、裂面の底に字画がないから拓出されなかったのではなくて、裂面の部分は拓出しなかったからである。」と反論する[註68]。

水谷拓本の編年上の位置付けについての論争は、上記に見たとおり李進熙氏の石灰が剥落してきた1930年代の拓本とする論には無理があり、武田幸男氏や笠井倭人氏・浜田耕策氏・白崎昭一郎氏の説の方が納得できる。水谷拓本はやはり石灰塗布前に採られたいわゆる原石拓本である。採拓者の署名がある訳ではないが、広開土王碑拓本採拓の歴史と拓本の精美さからみれば、武田幸男氏が言われるように、名工李雲従の採った拓本であろう。

李進熙氏は水谷拓本は1930年代の拓本であるとして最後まで自説を取り下げなかったが、改めて水谷拓本の件以外にも氏の改ざん説に無理があったいくつかの点について見てみたい。

「改ざん説の難点」

改ざん説発表後の初期の段階で、古田武彦氏は、李進熙氏が改ざん個所だと指摘した部分を見ると、必ずしも日本にとって都合の悪い部分とは関係ない部分があって、本来なら改ざんしたほうが良いと思われる倭にとって都合の悪い部分がそのままであると批判した。たとえばⅡ－８－35字からの「官軍方至倭賊」、Ⅲ－３－13字からの「倭不軌侵入帯方界」、第Ⅲ－４－13字からの「倭寇潰敗斬殺無数」（倭寇は潰敗し斬殺せらるるもの無数）などの個所である[註69]。李進熙氏は、古田氏への直接の反論ではないが、別の場所での同じような質問に対して「（改ざん個所の指摘箇所）はあくまで日本で手に入る拓本によっても、それだけいえますよということです。ですから、碑をもっと精査すれば、もっとでてきますよ。」と発言している[註70]。つまり、碑の再調査をすべきという問題提起という形で反論している。しかし、李氏は1985年以降18回も現地を訪れて碑を実見しているにもかかわらず[註71]、これらの個所についての改ざんの有無についての発言はない。

また、笠井倭人氏は、石灰塗布が酒匂景信が将来したいわゆる酒匂本の間違いを修正するために行ったとする点について、石灰塗布後早い時期の拓本とされる内藤拓本と小松宮が所蔵していた拓本そして酒匂本を比較検討した結果、李進熙氏があまり説明しない部分に、内藤拓本のほうが酒匂本よりかえって意味の通じない部分が生じていることを指摘し、碑文修正が意図のある修正ではないことを述べた[註72]。

同様に、白崎昭一郎氏も酒匂景信が第１回目に行った石灰塗布で誤った点を参謀本部がそれを修正

するために第２回目・３回目の石灰塗布を行ったなら、その後の拓本とされる内藤拓本や楊守敬拓本・シャバンヌ拓本等は修正後の同一の内容になっていなければならないが、当該拓本を精査すると、文字の不一致個所が多く見られて、石灰塗布によって意識的に修正したとは考えられないとした[註73]。

以上、広開土王碑拓本研究史を概観してきたが、石灰塗布について、参謀本部による故意の改ざんとする根拠は見いだせない。石灰塗布は碑の近くに住む初天富親子が拓本を採って売ることを生業とするなかで行われたとする以外にその理由を見つけ出すことは不可能である。すなわち、石灰塗布の目的は、碑の石材が本来的に持つ凹凸を極力消して文字の鮮明な拓本を採って客に売ることであり、その際に元々不鮮明な文字については塗布した石灰の面に本来の文字とは違う文字を彫りこむ場合があった、しかしそれは故意にではないと判断して間違いないであろう。

また、つきつめて考えると、碑に石灰を塗って拓本で碑文を改ざんしたとしても、石灰は自然に落ちるし、あるいは人為的に落とせばいつか必ず露見するはずである。碑そのものに手を加えない限り改ざんは不可能である。

しかし、李氏が改ざん説を提起した昭和47年（1972）当時集安は外国人に開放されておらず、日本人研究者の現地訪問がかなったのは昭和59年（1984）である。李氏が碑文は日本軍部が改ざんしたという結論に至った際にすぐに現地を訪れて碑を精査できていたら、改ざん説を提起しただろうかと思う。

以上、広開土王碑についての研究史を振り返ってきたが、李進熙氏の言う参謀本部の石灰塗布による改ざんは、やはりなかったと結論できる。

この項の最後として、碑の基本情報は王健軍氏と武田幸男氏らの研究によって次のとおりと考える。角礫凝灰岩で造られた不規則な方形柱状の石碑で、第１面が南東に向けて立てられている。高さは6.39m、下部の幅は第１面が1.48m、第２面が1.35m、第３面が2.0m、第４面が1.46mである。台座は花崗岩の巨石（3.35×2.7m）を使用している。碑文の字数については、完全に剥落している部分もあるが、1775字と考える[註74]。

４．その他の広開土王碑文研究

以上、広開土王碑文改ざん説をめぐる論争の論点と経過を述べてきたが、改ざん説にかかわりながらも、取り上げなかった研究やその他の研究について概観する。

まず、武田幸男氏は拓本の分類を行い、Ａ型：水谷拓本等の原石拓本、Ｂ型：酒匂本の墨水廓填本、Ｃ型：石灰拓本、Ｄ型：模刻本、Ｅ型：雙鈎本、Ｆ型：模写本に分けた。重要なものはＡ型、Ｂ型、Ｃ型で、最も多いのはＣ型である。さらに各地に所蔵されているＣ型拓本の多くを実見し、一つ一つ精緻な観察を行い、碑石の６箇所の割れ部分がどのように拓本に現れるかによってＣ１型からＣ４型まで分け、目安となる年代を与えた（着墨パターン法）。この編年方法を用いて、広開土王碑文拓本研究に多大な貢献と影響を与えた。武田氏は同碑拓本の研究に留まらず、広く高句麗史さらに東アジア史の研究者として多くの論文を発表されている[註75]。ただ、武田氏の編年案については、白崎昭一郎氏が大局的には認めながら、編年された拓本の中には矛盾のある場合もあり、一字一字の変遷を追求していく必要性を指摘している[註76]。

「辛卯年条について」

次に、碑文で最も注目されてきたＩ－９－６字目から始まる「倭以辛卯年来渡海破百残・・・」については、韓国や北朝鮮の研究者から、「来」と「渡」が続くのはおかしい、倭は一旦来たのに「渡」では、また戻ってしまうことになるから、「渡海破百残・・」の主語は高句麗か広開土王とすべきだ

との考えが出されたことを先に述べたが、このことについては日本人研究者によって二つの考えが出された。一つは西嶋定生氏が提唱し、王健群氏が同意している説で、「以・・来」を「このかた」と読むとするものである。これだと「倭は辛卯年よりこのかた」と読み、意味は「辛卯の年からひきつづき海を渡って百残・・・」となる[註77]。

もう一つの説は前置き文説である。浜田耕策氏は、広開土王の征討・救援作戦は「王躬率」と「教遣」の場合があり、前者が王自ら兵を率いて出陣する場合であり、後者は自分は出陣せずに作戦を指揮していることを表しているとした。そして後者は元号年＋干支名に続いて教遣・・・と書かれ、前者は元号年＋干支名に続いて、王が出陣する理由を示し、次に王躬率・・・と書かれる、ところが永楽六年条は干支に続いてすぐ王躬率と続き、王出陣の理由がない。実は問題の「辛卯年」条がその理由部分であり、そのため当該文は「前置き文」と呼ぶべき文であって、倭の侵入を広開土王即位直前のこととして要約し、勲積を誇示しようとする碑作成者の修辞・修文が作用していることを確認すべきとされた。

さらに氏は当該前置き文は永楽六年条だけでなく、永楽八年と永楽十四年条にもかかる「大前置き文」であるとした[註78]。この説は浜田氏も述べているごとく、氏一人の発想ではない。佐伯有清氏の指摘では、末松保和氏は『任那興亡史』に「百残・新羅旧是属民・・・以為臣民」はそれ自体独立して史実を記載したものではなくて、次に引く丙申年（396年、高句麗の永楽六年）の記事の前置きである。」（同書 p71）とする[註79]。武田幸男氏は、さらに、先人の辛卯年条「前書き」説として池内宏『日本上代史の一研究』を上げている[註80]。また、前沢和之氏は、辛卯年条をその後の広開土王の勲積を明示し、後世に伝えるべき顕彰碑の導入部として設けられた挿入文なので、史実を語る史料としては不安定であるとして、「挿入文」とする[註81]。武田幸男氏はこれら諸氏の説をまとめるとともに、永楽八年条は粛慎相手であり、大前置き文に含めることはできず、大前置き文が適用されるのは永楽五年条、九年条、十年条、十四年条、十七年条の５年分であるとして、浜田耕策氏の大前置き文説に修正を求めた[註82]。ただし、山尾幸久氏は武田氏がⅢ－７－34の文字と次の文字を「粛慎」と読んだこと自体を問題にした。浜田耕策氏が読む通り、「粛」ではなく「帛」ではないかとする。津田左右吉氏は「帛」と読み、濊族の居住地（江原道方面）だとした。山尾氏は、浜田氏の読み方はそれを踏襲したのだとした[註83]。山尾氏の指摘が正しければ、浜田氏の大前置き文説が肯定されることになる。この問題は歴史教科書問題に端を発した日韓歴史共同研究の中でも協議され、浜田耕策氏の大前置き文説に対して、韓国側研究者金泰植氏は、武田幸男氏の指摘と同様に、永楽六年条は当てはまるが、永楽八年条は粛慎を攻撃したのであって「大前置文」の対象に当てはまらない、したがって、大前置き文とはならないとした[註84]。ただし、当該部分が「前置き文」で事実をストレートに表した部分ではないなら、碑文の構造が極めて難解となり、碑文読者に意図を伝えるのは不可能に近いという鈴木英夫氏の批判もある[註85]。

その他

その他、採拓年代が明らかな拓本は拓本の編年上きわめて重要である。その点で、九州大学所蔵の拓本に付いている新聞紙片から採拓年代を昭和２年（1927）頃に求め、拓本自体ではなく外的な特徴によって編年の可能性を指摘した長正統氏の研究がある[註86]。

碑の性格については、当然ながら広開土王の事績を息子である長寿王が顕彰するために建てたとするのが通説と言って良い。碑そのものにも第Ⅰ面の６行目に「於是立碑銘記勲積以示後世」と記されている。しかし、第4面の最後に守墓人の転売を禁止した令に反した者への罰則を記した条文がある。李成市氏は広開土王の顕彰というよりも、守墓人への法則を石刻した文書であるとした[註87]。

5．その後の広開土王碑研究

李進熙氏の広開土王碑文改ざん説は否定されたが、その後の碑文の扱いについて概観する。出版物では、2010年以降の出版物で広開土王碑の扱いをいくつか見てみたい。

まず、原石拓本として極めて重要な価値を持つと認定される水谷拓本は、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館の所蔵品となった。そして平成22年（2010）と平成26年（2014）に同館の特別展で、広開土王碑をイメージさせる原寸大の方柱状に復元される形で公開された[註88]。

平成28年（2016）発行の『大学の日本史』「Ⅰ部原始からヤマト政権へ　３章倭王権の成立」の中で倉本一宏氏は「かつては日本陸軍の参謀本部が、日本の半島侵略を正当化するために碑の拓本を改竄したという考えも存在したが、現在では否定されている。だいたい、倭は高句麗とたたかって惨敗を喫しているのであるから、これを宣伝に使ってもあまり効果はないというものだろう。」と述べられている[註89]。平成29年（2017）に出版された『世界歴史体系朝鮮史１（先史～朝鮮王朝）』では、本文の「高句麗の発展」を吉井秀夫氏が、「補説４　広開土王碑の立碑目的と集安高句麗碑の発見」を李成市氏が執筆されているが、改ざん問題には触れていない[註90]。さらに、平成30年（2018）に出版された『倭の五王』で河内春人氏は「日本軍の参謀本部が石碑に石灰を塗り、日本に都合の良い内容に碑文を改竄したという説（李進熙）が提示され、碑文の信頼性そのものが疑われた。ただし、現在では石碑への石灰の塗布は、刻まれた字を読み取りやすくするための拓本職人によるものであることが明らかになり、」と書かれている[註91]。

以上のように、総じて広開土王碑改ざん問題は過去の事柄とされているが、拓本の研究は継続されている。2012年７月７日に、お茶の水女子大学の歴史資料館所蔵の広開土王碑拓本（石灰拓本）が再発見されたことを契機にシンポジュウムが行われ、その成果が平成25年（2013）に刊行された[註92]。参加者は同大学教授古瀬奈津子氏をはじめ、武田幸男氏、徐建新氏、早乙女雅博氏、奥田環氏、三上喜孝氏、橋本繁氏、江川式部氏である。成果として、お茶の水女子大学拓本の年代判定について、武田幸男氏の「着墨パターン法」、徐建新氏の「碑字字形比較法」、早乙女雅博氏の「小拓紙比較法」[註93]の３種類の分析手法すべてが1920年代後半と判定されたことである。今後の石灰拓本の年代判定に寄与することになる。平成31年（2019）には明治大学図書館所蔵の広開土王碑拓本（石灰拓本）が識者の論考とともに出版された[註94]。論考を寄せた研究者は吉村武彦氏をはじめ、矢越葉子氏、徐建新氏、朱岩石氏、黄正建氏、河野正訓氏である。所蔵している２種類の拓本の写真を極力大版で載せ、細部まで観察しやすくしている。また、論考では、中国研究者を含めて碑文拓本だけではなく、広開土王碑関連の遺跡・遺構の紹介や陵戸の研究を載せて、碑文内容の理解が深まるようにされている。

6．まとめと今後の課題

以上、李進熙氏が提起した改ざん説を巡る論争を中心に広開土王碑文研究史を振り返った。現在改ざんがなかったとする結論に異論のある日本人研究者はいないだろう。しかし、李進熙氏の問題提起は多くの研究者の注目を集め、広開土王碑文の研究が広くまた深く行われる契機になったことも間違いはないであろう。李氏は反論されると、時にはかなり激しい言葉で再反論を繰り返したが、各種史料を広く深く読みこなし、拓本では極めて詳細な観察を行い、小石粒の剥落も見落とさず、最初立てた拓本編年が正しく、参謀本部が碑文を改ざんしたと、亡くなる（平成24年（2012））まで主張した。既に見たとおり、氏の拓本編年は誤っていて碑文に日本軍部による意図的な改ざんはなかったが、李

氏の研究と問題提起は広開土王碑研究に多大な貢献をした点で学史に記録されるべきものと考える。

一方、李氏の改ざん説には基本的に日本人研究者は反対し、多くの研究者が論陣を張ったことは述べたとおりだが、中でも武田幸男氏は、広開土王碑は石灰の塗布の後にも、第２次世界大戦後に亀裂をセメントで埋めたり、保護のためとはいえ、合成樹脂が塗られたりして、現在の碑の状況から元の碑字を確かめるのが容易ではないことから、碑文研究は原石拓本で行われるべきだとして、『広開土王碑原石拓本集成』（1988）[註95]を出版され、碑文研究の基本的な研究方針を示された。また、石灰拓本は最も長期にわたり、最も数多く多様な形で製作され、広く流布した拓本であるが、開始時期やどのように始められたかについては明らかではないとして、各地に残る石灰拓本の詳細な観察を行い、「着墨パターン法」という編年方法による採択年次の解明などの研究を続けられた[註96]。さらに、氏は、通常なら偽作として退けそうな模刻本も研究対象とされた。すなわち、模刻本には、碑面Ⅰ－９－12からの「渡海破百残」部分を「尸皇破酉残」と刻むＤ１型と、通例どおり「渡海破百残」と刻むＤ２型があると分類され[註97]、滋賀県にある観峰館所蔵模刻本の観察で、さらに研究を深められ、模刻本は広開土王碑へ一層高まる評価のもとで、天候に制約されず、採拓が容易なものとして作製され、製作時期は1920年前後から約10年間とされた[註98]。氏は広開土王碑文そのものの研究に留まらず、広開土王代の高句麗の領域支配や国際関係、高句麗王権の問題等広く高句麗の歴史研究を推し進められた[註99]。氏の釈文は現在最も信頼されていると言って良い[註100]。当初の李氏への反論から続いた広開土王碑研究が、最も大きな成果をもたらした研究者として学史に記録されるべきと考える。氏は令和３年（2021）８月に逝去され、前掲の「水谷悌二郎日記抄録」の序文が絶筆になった。編集した稲田奈津子氏と三上喜孝氏は水谷氏の膨大な日記に驚くとともに、武田氏の「文字通り心血を注いだ翻刻と、水谷氏の研究を追体験するような数々の注記に圧倒された」と記す[註101]。

しかし、まだ解決できていない課題も多くある。拓本についても、酒匂本のような墨水廓填本が制作された具体的な様相は、武田幸男氏によって推定されているが、氏自身が言われるように確定していないとして良いのではないだろうか。石灰拓本が作られ始めた時期も既述のように異説がある。李進熙氏は1902年を下限とし、武田幸男氏は1890年代初頭とする。石灰拓本としては初期の頃のものとされる楊守敬が所有した拓本の入手について「高句麗広開土好太王談徳碑跋」[註102]に「中日の役」の時に得たとあることについて、「中日の役」を李進熙氏は1900年の義和団事件による出兵とするのに対し、武田幸男氏は1894年の日清戦争とし解釈が分かれる。山尾幸久氏は李進熙氏説が良いのではとする[註103]。

碑文の文字の解読にしても、既述のⅢ－７－34・35の文字を「粛慎」ではなく「帛慎」ではないかとする説以外にも多くの異説がある。現在日本で最も信頼されている武田幸男氏の釈文であるが、現地で十分に観察したとする王健群氏の釈文とは100字以上の違いがみられる[註104]。王健群氏の釈文ではⅠ－３－41字を「黄」とするなど従えない部分も多々あるが、違いが多すぎる。やはり検討する価値があるのではないかと思う。

また、碑文の内容についての大きな課題は、碑文に記された倭の実体である。中国の研究者は北九州地域の一部の日本人であろうと考える研究者が多いようだ。日本側は列島の大部分をまとめた王権（大和王権）の意志のもとに派遣された軍隊とする研究者が多いように思うが、そうではないとする研究者もいる。広開土王を動かすほどであれば、攻め入った倭兵は少数ではないはずである。派遣された倭の実体はどのようなものか、７世紀白村江に派遣された倭兵は国造軍を中心としたものと言われているが、４世紀末から５世紀初めの倭軍はどのような体制のもとで派遣されたものか、さらに倭兵を送りこんだ船の規模や造船技術の検討は考古学的な検討が必要になる。資料が少なく困難な課題であるが、取り組まなければならない課題である。

さらに、広開土王陵墓の比定について、中国では太王陵が広開土王陵だとするが[註105]、日本では関野貞氏が将軍塚説を唱えて以来太王陵説と将軍塚説がある。筆者は桃崎祐輔氏が太王陵出土の８弁の蓮華蕾文瓦は５世紀に入ってから高句麗で新たに創出した瓦で、千秋塚→太王陵→将軍塚の順で築かれたとする説[註106]が妥当であり、太王陵が広開土王陵と考えるが、現在も決着していない[註107]。

集安では集安高句麗碑が発見され[註108]、また、既述のように徐建新氏らによって広開土王碑の新たな拓本が発見されるなど資料の蓄積が進んでいる。前記した課題も解決されていくと考える。

（謝辞）

小論を書くに当たっては、九州大学名誉教授西谷正先生、同じく濱田耕策先生、さらに元東京国立博物館考古課長松浦宥一郎氏に細部にわたって懇切なご指導を受けました。心より感謝いたします。

〈註〉

註1. 碑の名称は好太王碑や広開土王碑と言われるが、武田幸男氏は高句麗歴代の諸王は某「好太王」の美称を持っていたようなので、『三国史記』の高句麗本紀の呼称に従って「広開土王」と略記した（『広開土王碑原石拓本集成』1988序言）と述べている。小論もこれに従った。ただし、関晃氏は『三国史記』は遥か後世の編纂物であり、土境という語を途中で切って広開土王と呼ぶのは省略のしかたとしていかにも不自然の感を免れない（「好太王碑」『好太王碑』1985）として好太王碑と呼んだように両説がある。

註2. 佐伯有清『研究史広開土王碑』吉川弘文館1974年。

註3. 井上直樹「戦後日本の高句麗史研究の動向と課題」『高句麗史の史的展開過程と東アジア』塙書房2021。初出一覧によると、初出はハングル表記で「1945年以後日本での高句麗史研究動向」『先史と古代』韓国古代学会』2008年6号。

註4. 碑文の発見年には異説があるが、ここでは李進熙氏や武田幸男氏の説を採った。

註5. 一辺50cm ほどの大きさの紙に１行４字×４行分計16字が１枚に採られたものが多く、その他碑文に合わせて４字だけ採られたものなどさまざまであった。

註6. 菅政友「高麗好太王碑銘考」『史学会雑誌』第22～25号1891年。那珂通世「高句麗古碑考」『史学雑誌』第47～49号、1893年。ただし第47号と48号は同じ文章。三宅米吉「高麗古碑考」『考古学会雑誌』第２編第１～３号1898年。

※３氏とも『会余録』を参考に記述しているが、碑文の文字については独自の解釈を加えている場合がある。

註7. 三宅米吉「高麗古碑考追加」『考古学会雑誌』第２編第５号1898年。三宅氏は小松宮所蔵の拓本を見て訂正したが、その拓本は「摺りたるままにて石面の凹凸甚だしく為に字形鮮明ならざるもの多くすこぶる読み難き所ありて」としている。石灰が塗布される前の原石拓本であった。小松宮拓本は日清戦争（1894年）の際に摺られて小松宮に寄贈されたものとされるが、当拓本の所在は不明とのことである。

註8. 一般に碑文が公開されたのは、『会余録』とされているが、水谷悌二郎の研究によって、青江秀が先に意見を発表していることが明らかにされている。青江秀「東夫余永楽大王碑銘考」『高句麗第十九代広開土王墓碑之解』1884年。

註9. 佐伯有清「横井忠直と『高麗古碑本之来由』の出現」『日本歴史』335号1976年後に佐伯有清『広開土王碑と参謀本部』（吉川弘文館、1976年）に再録。

註10. 鳥居瀧蔵「南満洲調査報告」1910年。後に『鳥居龍蔵全集』（第10巻、朝日新聞社、1976年）

に再録。関野貞「満洲集安県及び平壌附近に於ける高句麗時代の遺跡（一）（二）『考古学雑誌』第五巻第３号・４号1914年。今西龍「広開土境好太王陵碑に就て」『訂正増補大日本時代史（古代）』附録1915年。関野貞・今西龍『朝鮮古蹟図譜』第１冊1915年。黒板勝美（日本歴史地理学会での碑面現地調査報告）『歴史と地理』第32巻５号1918年。

註11. 池内宏「広開土王碑発見の由来と碑石の現状」『史学雑誌』第49編１号1938年。日満文化協会『通溝』上巻、「第三節　広開土王碑」1938年。

註12. 武田幸男「中野政一『鴨緑江』解説－或る軍人の見た大正二年の朝鮮西北境－」『朝鮮学報』第131号1989年。

註13. 武田幸男『広開土王碑原石拓本集成』東京大学出版会1989年。

註14. 水谷悌二郎『好太王碑考』開明書院1977年。

註15. 武田幸男『広開土王碑との対話』白帝社2007年。

註16. 武田幸男・稲田奈津子・三上喜隆「水谷悌二郎日記抄録－広開土王碑研究を中心に－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第234集2022年。

註17. 日本語訳は金錫享『古代朝日関係史―大和政権と倭―』勁草書房1969年。氏は1963年１月に「三韓三国の日本列島内分国」を『歴史科学』に発表し、本書の元になった『初期朝日関係研究』を1966年に出版されている。

註18. 鄭寅普「広開土境平安好太王陵碑文釈略」『白楽濬博士還甲記念国学論叢』1955年。

註19. 日本語全訳の朴時亨『広開土王陵碑』そしえて1985年。

註20. 中塚明「近代史学史における朝鮮問題」『思想』561号1971年。

註21. 李進熙『広開土王陵碑の研究』（吉川弘文館1972年）の「はしがき」による。その他李進熙「広開土王陵碑文の謎－初期朝日関係史上の問題点」『思想』第575号1972年。李進熙「広開土王陵碑研究史上の問題点－1910年代までの中国における研究をめぐって」（『考古学雑誌』第58巻第１号1972年等）にも同様な事柄が記されている。

註22. 古田武彦「好太王碑文「改削」説の批判－李進熙氏「広開土王陵碑の研究」について」『史学雑誌』第82巻８号1973年。「高句麗好太王碑文の新事実」『史学雑誌』第81巻12号1972年。

註23. 李進熙「広開土王陵碑研究をめぐる諸問題－古田武彦氏の所論によせて」『史学雑誌』第83巻７号1974年。

註24. 座談会「広開土王陵碑と古代東アジア」朝鮮史研究会編『古代朝鮮と日本』龍溪書舎、1974年。座談会のメンバーは佐伯有清・鈴木靖民・武田幸男・旗田巍・原島礼二・李進熙の各氏。

註25. 井上光貞「朝鮮古代史家の挑戦」『諸君！』1981年６月号。後に著作集第11巻に再録。

※この井上光貞氏の言葉は、李成市氏が「表象としての広開土王碑文」（『思想』842号、岩波書店1994年。後に『闘争の場としての古代史』岩波書店2018年に再録）の中でもほぼ同様部分が引用されている。

註26. 佐伯有清『研究史広開土王碑』吉川弘文館、1974年。他に佐伯有清「高句麗広開土王碑をめぐる諸問題－李進熙氏の所論によせて－」『歴史学研究』401号1973年。後に『広開土王碑と参謀本部』吉川弘文館1976年に再録。

註27. 朝鮮史研究会編『古代朝鮮と日本』龍溪書舎1974年。

註28. 村山光一「古代日朝関係史研究の現状と課題」『歴史評論』№302 1975年。

註29. 王健群『好太王碑研究』吉林人民出版社1984年。この著作について、王氏は『好太王碑と高句麗遺跡－四、五世紀の東アジアと日本』（読売新聞社、1988年）のp47に、校正時入院していて校正原稿を見ることができず、出版されてからはじめて何か所か疎漏のところを発見した、と記

している。『好太王碑研究』に図４－36から４－39まで4頁にわたって碑文各面の釈文を掲載しているが、第１面７行５字目「歳」は細かな部分であるが誤植である。また、第２面７行目38字目は「矜」となっているが本来は「称」のようで、これら２文字は『シンポジウム好太王碑－四、五世紀の東アジアと日本』（東方書店、1985年）と『好太王碑と高句麗遺跡－四、五世紀の東アジアと日本』（読売新聞社、1988年）に添付されている釈文では訂正されている。

註30. 前掲註29『好太王碑の研究』。ｐ160～163に掲載されている「筆者の判読した碑文」には註28で記した２字以外に第１面１行16字目「餘」に誤植がある。これも『シンポジウム好太王碑－四、五世紀の東アジアと日本』（東方書店、1985年）と『好太王碑と高句麗遺跡－四、五世紀の東アジアと日本』（読売新聞社1988年）に添付されている釈文では訂正されている。

註31. 王健軍（辻川幸子訳）「好太王碑の発見と採択」・「好太王碑六年丙申（396年）・八年戊戌（398年）条の考釈」『季刊邪馬台国』1984年冬号（22号）梓書院1984年。これらは前掲註29『好太王碑の研究』に収録されている。

註32. 『シンポジウム好太王碑－四、五世紀の東アジアと日本』東方書店1985年。

註33. 『好太王碑と高句麗遺跡－四、五世紀の東アジアと日本』読売新聞社1988年。

註34. 李進熙氏は朝日新聞1984年８月30日に反論を寄せたが、まとまった形でみられるのは「王健群氏の「好太王碑の研究」を読んで」（『東アジアの古代文化』43号、1985年）と「碑の発見と拓本作成の年次」（『好太王碑研究とその後』青丘文化社、2003年）である。

註35. 徐建新『好太王碑拓本の研究』東京堂出版2006年。

註36. 寺田隆信・井上秀雄編『好太王碑探訪記』日本放送出版協会1985年。寺田隆信編著『好太王碑－50年ぶりに見た高句麗の遺跡』ぎょうせい1985年。参加者は本文に列記した以外に新野直吉、中村完、須藤隆、今泉隆雄、古畑徹、辛澄恵の各氏である。

註37. 井上秀雄「広開土王碑の現地に立つ」『季刊邪馬台国』1984年冬号（22号）梓書院1984年、同「広開土王碑を現地に見る」毎日新聞、1984年９月８日夕刊。

註38. 読売新聞1985年７月22日夕刊「熱い議論10時間　好太王碑・長春討論会」。

註39. 李進熙「好太王碑を現地に訪ねて」『季刊三千里』44号1985年。

註40. 江上波夫「好太王碑文をみて」『東アジアの古代文化』43号1985年。

註41. 前掲33王健群「好太王碑研究に関するいくつかの問題　好太王碑の現状」『好太王碑と高句麗遺跡－四、五世紀の東アジアと日本』。

註42. 西谷正「好太王碑の周辺踏査行　遺跡群の総合研究を」朝日新聞1985年９月18日夕刊。

註43. 徐建新「北京に現存する好太王碑原石拓本の調査と研究」『史学雑誌』第103篇第12号1994年。

註44. 李進熙「望まれる碑面の科学的調査」朝日新聞平成６年（1994）７月22日夕刊。

註45. 鈴木靖民「拓本の年代特定進む」読売新聞平成６年（1994）７月13日夕刊。

註46. 徐建新『好太王碑拓本の研究』東京堂出版、2006年。徐建新氏は１期とはせず１・２・３・４とされている。

註47. 武田幸男「広開土王碑の拓本を求めて」『朝鮮学報』第126輯1988年。浜田耕策「故足立幸一氏寄贈の京都府立福知山高校所蔵の好太王碑の拓本について」『学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』第24号1990年。

註48. 前掲註22の『広開土王陵碑の研究』。

註49. 武田幸男『広開土王碑との対話』白帝社2007年。『広開土王碑墨本の研究』。吉川弘文館2009年。

註50. 前掲註29の『好太王碑の研究』。

註51. 水谷悌二郎『好太王碑考』開明書院1977年。

註52. 梅原末治「楽浪と通溝」『考古学六十年』平凡社1973年。
註53. 前掲註29『好太王碑の研究』。
註54. 前掲註29『好太王碑の研究』。
註55. 朝鮮史研究会編『古代朝鮮と日本』（龍渓書舎1974年）に掲載されている座談会で佐伯有清氏が「今西竜さんの言っていることを調べてみますと・・・文字の間に石灰を塗って、それから、ぜんぜんかけてしまったところに泥を塗りこめたり、あるいは石灰を塗って、新たに字を書きこんだということをいっているんですが、その点李さんは、碑の全面に石灰を塗って、すべて字を新しく書きこんでいったとお考えなのですか。」と問いかけたことに対して、李進熙氏は「今西さんは「尚全面に石灰を塗り、字形のみを現はし」と書いていますが、内藤（虎次郎）の写真をみれば、全面に石灰を塗ってあることは否定できないでしょう。」と述べている。
註56. 前掲註21『広開土王陵碑の研究』。
註57. 前掲註29『好太王碑の研究』40・41頁。武田幸男氏はこの抄本に詳細な検討を加えている。文字を訂正したり、あるいは位置がずれている文字があって、この抄本と同じ拓本はないこと、このことから部分的な修正用に使用したもので、1905～1910年前後に抄出された可能性が高いとする。武田幸男「広開土王碑「碑文抄本」の研究」『国際書学研究』2000年、前掲注15「初天富一家と「碑文抄本」－王碑のそばの守護神たち－」『広開土王碑との対話』。また、李進熙氏も検討を行い、手本は石灰塗布に用いられたものとする。李進熙「碑の発見と拓本作成の年次」『好太王碑研究とその後』青丘文化社、2003年。
註58. 前掲註29『好太王碑の研究』53頁。
註59. 関野貞「満洲輯安縣及び平壌附近に於ける高句麗時代の遺跡」『考古学雑誌』第５巻第４号1914年。
註60. 今西龍「広開土境好太王陵碑に就て」『訂正増補大日本時代史（古代）』附録1915年。後に『朝鮮古史の研究』1970年に再録。
註61. 佐伯有清「高句麗広開土王碑をめぐる諸問題－李進熙氏の所論によせて－」『歴史学研究』401号1973年。
註62. 村山光一「古代日朝関係史研究の現状と課題」『歴史評論』№302 1975年。
註63. 梅原末治「高句麗広開土王陵碑に関する既往の調査と李進熙氏の同碑の新説について」『史学雑誌』第83編７号1974年。
註64. 前掲47「広開土王碑の拓本を求めて」『朝鮮学報』第126輯。同前掲註13『広開土王碑原石拓本集成』。
註65. 笠井倭人「広開土王碑水谷拓本の一考察」（『日本歴史』第497号1989年）後に『古代の日朝関係と日本書紀』吉川弘文館2000年に再録。
註66. 浜田耕策「故足立幸一氏寄贈の京都府立福知山高校所蔵の広開土王碑について」『学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』第24号1990年。
註67. 白崎昭一郎「広開土王碑の問題点」『藤澤一夫先生古希記念論集古文化論叢』1983年。同「広開土王碑拓本の編年」『福井考古学会会誌』８号1990年。両論文とも『広開土王碑文の研究』（吉川弘文館、1993年）に再録。
註68. 李進熙「広開土王碑をめぐる論争」『青丘学術論集』第２集1992年。Ｐ114。後に『好太王碑研究とその後』（青丘文化社、2003年）に修正して再録。本文に掲げた部分は主に「第二部四章 原石拓本論の再登場」に収録。
註69. 古田武彦『失われた九州王朝』朝日新聞出版社1973年。

註70. 朝鮮史研究会編『古代朝鮮と日本』（龍渓書舎、1974年）に掲載されている座談会での発言。氏は前掲註21の『広開土王陵碑の研究』で「本書では・・・広開土王碑文に、重大な疑いがあることをはっきりさせることに焦点を置き、全碑文についての筆者の考えは敢えて述べなかった。それは、こんにちの段階で広開土王陵碑の原文を推定するのは、冒険に等しく、従来の誤りに屋上屋をかさねる結果になりかねない、と考えたからである。」（P210）と述べている。

註71. 李進熙「４ 好太王碑、中国の批判と碑面調査」『渡来文化のうねり』青丘文化社、2006年P264。

註72. 前掲註65「広開土王碑水谷拓本の一考察」。

註73. 前掲註66『広開土王碑文の研究』。

註74. 前掲註29『好太王碑の研究』。武田幸男『広開土王碑墨本の研究』吉川弘文館2009年。また、吉林省文物考古研究所・集安市博物館編『集安高句麗王陵－1990～2003年集安高句麗王陵調査報告』文物出版社2004も碑の法量や字数は同様である。

註75. 前掲註13の『広開土王碑原石拓本集成』。同前掲註74の『広開土王碑墨本の研究』同『高句麗史と東アジア』岩波書店1989年。武田幸男氏が各地の拓本類の観察結果を記した論文名は註96に掲載した。

註76. 白崎昭一郎「広開土王碑拓本の編年」『福井考古学会雑誌』８号1990年。のちに白崎昭一『広開土王碑文の研究』（吉川弘文館1993年）に再録。

註77. 西嶋定生「広開土王碑文辛卯年條の読法について」『図説日本の歴史第３巻月報』、1974年。後に読み方の論拠等を大幅に加筆して「好太王碑の読み方について」と題して『三上次男博士喜寿記念論文集』（平凡社1985年）並びに『倭国の出現』（東京大学出版会1999年）に再録。さらに「広開土王碑文辛卯年条の読み方について」と改題して『西嶋定生東アジア史論集第四巻東アジア世界と日本』（岩波書店2002年）に収録。

註78. 浜田耕策「高句麗広開土王陵碑文の虚像と実像」『日本歴史』第304号1973年。同「高句麗広開土王陵碑文の研究－碑文の構造と筆法を中心にして－」『朝鮮史研究会論文集』（11輯1974年）ともに『朝鮮古代史料研究』（吉川弘文館2013年）に再録。

註79. 佐伯有清「高句麗広開土王碑墨本の再検討」『続日本古代史論集上巻』ｐ31、吉川弘文館1972年。

註80. 池内宏『日本上代史の一研究』中央公論美術出版、1970年。ｐ72。

註81. 前沢和之「広開土王陵碑文をめぐる二・三の問題」『続日本紀研究』159号1972年。

註82. 武田幸男「広開土王碑おぼえがき（上）碑文解釈の鍵－「大前置文」説を提唱する」『UP』184号1988年。武田幸男「第七章　辛卯年条の再吟味」「第九章　長寿王の東アジア認識」前掲註74『高句麗史と東アジア』。

註83. 山尾幸久「書評　武田幸男著『広開土王碑原石拓本集成』」『朝鮮学報』第130輯1989年。

註84. 浜田耕策「４世紀の日韓関係」『日韓歴史共同研究報告書第１分科篇』日韓歴史共同研究委員会2005年。同書には浜田耕策氏の原石拓本による広開土王碑文釈文が掲載されている。金泰植「４世紀の韓日関係史－広開土王陵碑文の倭軍問題を中心に」同上報告書。

註85. 鈴木英夫「倭と朝鮮と加耶」『日本古代交流史入門』勉誠出版2017。

註86. 長正統「九州大学所蔵好太王碑拓本の外的研究」『朝鮮学報』99・100輯合併号1981年。

註87. 李成市「表象としての広開土王碑文」『思想』842号1994年。「石刻文書としての広開土王碑文」『東アジア出土資料と情報伝達』汲古書院、2011年。両者ともに『闘争の場としての古代史』（岩波書店2018年）に再録。

註88. 三上喜孝「執念がもたらした宝物～高句麗広開土王碑水谷悌二郎氏旧蔵原石拓本～」『歴博』

202、一般財団法人歴史民俗博物館振興会1917年。

註89. 佐藤信編『大学の日本史１古代』山川出版社2016年 P40。

註90. 李成市・宮嶋博史・糟谷憲一『世界歴史体系朝鮮史１　先史～朝鮮王朝』山川出版社2017年。

註91. 河内春人『倭の五王』中公新書2018年 P27。

註92. 古瀬奈津子『広開土王碑拓本の新研究』同成社2013年。

註93. 早乙女雅博「小拓紙から見た広開土王碑拓本の分類と年代」古瀬奈津子編『広開土王碑拓本の新研究』同成社2013年。広開土王碑は巨大な石碑であることから、拓本は紙を貼り合わせて採拓されている。その使用される紙の大きさが違うことから、新旧を考える方法。

註94. 明治大学広開土王碑拓本刊行委員会編『高句麗広開土王碑拓本』八木書店2019年。

註95. 主旨は前掲註47「広開土王碑の拓本を求めて」『朝鮮学報』126輯（前掲註48『広開土王碑墨本の研究』に再録）。

註96. 武田幸男氏の拓本の観察結果についての論文は以下のとおりである。「高句麗広開土王碑と目黒区所蔵拓本」『高句麗広開土王碑拓本写真集』東京都目黒区守屋教育会館郷土資料室1990年。後に『展望日本歴史４大和王権』（東京堂出版2000年）に再録。「天理図書館蔵「高句麗広開土王陵碑」拓本について」『朝鮮学報』174輯2000年。「広開土王碑「山形大学本（大Ⅲ面）」調査報告」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第13号2012年。「広開土王碑「長崎西高校本」の研究」『年報朝鮮学』第17号2014年。「広開土王碑「宮崎県総合博物館本」の研究」『宮崎県地域史研究』第29号2014年。「学習院大学所蔵「広開土王碑拓本」の研究」『東洋文化研究』第16号2014年。「広開土王碑「多胡碑記念館本」の調査報告」『汲古』65号2014年。「広開土王碑「田山花袋本」の研究」『田山花袋記念文学館研究紀要』第28号2015年。「広開土王碑模刻本「観峰館本」の研究」『観峰館開館二〇周年記念論文集』2015年。

註97. 前掲註49『広開土王墨本の研究』。

註98. 武田幸男「広開土王碑模刻本「観峰館本」の研究」『観峰館開館二〇周年記念論文集』、2015年。

註99. 前掲註75『高句麗史と東アジア』。

註100. 森浩一監修東潮・田中俊明編『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社1995年ｐ119。

註101. 前掲註16「水谷悌二郎日記抄録」。

註102. 楊守敬「高句麗広開土好太王談徳碑跋」は李進熙『広開土王陵碑の研究』に資料編の５として収録されている。

註103. 前掲註83「書評 武田幸男著『広開土王碑原石拓本集成』」『朝鮮学報』第130輯。

註104. 前掲註15『広開土王碑との対話』添付の武田幸男氏釈文と王健群他『好太王碑と高句麗遺跡』（読売新聞社、1988年）添付の王健群氏釈文によっている。ただし、新旧字体や出版社の字体により数え方が違うかもしれない。筆者は114字を数えた。王健群氏の場合は今まで不明として□として表現されていた部分を多く読んでいるのが特徴である。

註105. 前掲74『集安高句麗王陵－1990～2003年集安高句麗王陵調査報告』。同書では太王陵が広開土王陵であるとし、千秋塚→太王陵→将軍塚の順に築かれたとする。

註106. 桃崎祐輔「高句麗太王陵出土瓦・馬具からみた好太王陵説の評価」海交史研究会考古学論集刊行会編『海と考古学』六一書房2005年。

註107. 濱田耕策「高句麗の王都・国内城の王陵と文字資料」『季刊邪馬台国』第141号、2021年。太王陵を広開土王陵と考える著者が、テーマに関する最新情報の紹介を行いながら、王陵比定には考古学の成果だけではなく、文献資料から考察することも必要だとし、その道筋を示している。

註108. 集安市博物館編『集安高句麗碑』吉林大学出版社2013年。早稲田大学総合研究機構「第九回

総合研究機構研究成果報告会「広開土王碑研究130年－集安高句麗碑発見と古代東アジア」『プロジェクト研究』第９号早稲田大学総合研究機構2014年。西谷正「集安高句麗碑」『朝鮮考古学研究』海鳥社2022。

追記

１．本論では基本的に一部を除いて中国語や韓国語の外国語文献は取り上げていない。また、2014年10月に中国集安市で行われた「紀念好太王碑建碑1600周年国際学術会議」（中国社会科学院中国辺疆史地研究中心・韓国東北アジア歴史財団）にかかる諸論考も同様である。

２．碑文の読み下し文は武田幸男『広開土王碑との対話』（白帝社、2007年）によった。

３．拓本研究は拓本そのものの詳細な観察が必要であるが、巨大で誰でも自由に観察できるものではない。その点で縮小されていても出版されている拓本は貴重である。以下の文献に複数収録されている。もちろん拓本の詳細を論ずるには、貼り合わせや着墨の状況等実物の精密な観察が必要ではあるが。

・註20李進熙『広開土王陵碑の研究』（1972）には酒匂本、内藤虎次郎旧蔵拓本、シャバンヌ拓本、朝鮮総督府拓本の４種収録。

・註28『シンポジュウム好太王碑』（1985）には酒匂本、水谷悌二郎原石拓整本、九州大学蔵本、東京大学東洋文化研究所蔵本、朝鮮総督府蔵本、シャバンヌ拓本、内藤虎次郎旧蔵本、周雲台拓本の８種収録。

・註35寺田隆信・井上秀雄編『好太王碑探訪記』（1985）資料編には水谷拓本、上田正昭氏所蔵拓本、天理大学所蔵旧拓本、韓国ソウル大学所蔵拓本の４種収録（ただし拓本の配列にあやまりがあることが指摘されている。具体的には②上田正昭氏所蔵拓本の第３面と③天理大学所蔵拓本の第３面、並びに④韓国ソウル大学所蔵拓本の第１面と③天理大学所蔵拓本の第１面の拓本が入れ替わっている。）。

・註12武田幸男『広開土王碑原石拓本集成』（1988）には傅斯年氏旧蔵（乙）本、水谷悌二郎氏旧蔵本、傅斯年氏旧蔵（甲）本、金子鷗亭氏蔵本、酒匂景信氏将来本の５種収録。

・東京国立博物館『高句麗広開土王碑拓本』（1996）には酒匂本、水谷本、東京大学文学部考古学列品室蔵本、内藤確介本（目黒区守屋教育会館郷土資料室）の４種が収録されており、拓本の印刷が明瞭である。概説は早乙女雅博氏執筆。

４．拓本の釈文も多くの研究者が出されているが、原石拓本釈文と明言して出されたものとして、武田幸男氏の『広開土王碑墨本の研究』（吉川弘文館、2009年）、濱田耕策氏の『日韓歴史共同研究報告書－第１分科篇－』日韓歴史共同研究委員会2005年（註80）をあげたい。ほぼ似ているが、本文で述べたとおり、Ⅲ－７－34の文字を武田幸男氏は「粛慎」の「粛」とするが、浜田耕策氏は「帛」ではないかとする。

脱稿後、濱田耕策先生から河野雄一「「高句麗好太王墓碑」－発見時期と光緒二年本の再考－」『古典研究会編 汲古』第84号 汲古書院 2023.12のコピーをいただいた。著者である河野雄一氏の母方の実家に、「高句麗好太王墓碑」という文書があって、その跋文に「光緒二年搨本補入」という文言があることから、武田幸男氏や李進熙氏が碑の発見年を清の光緒６年（1880）としていることに再検討を促す内容となっている。広開土王碑については、未発見の史料があることを再確認するとともに、濱田耕策先生に改めて感謝いたします。

玄界灘沿岸地域における直柄鍬の展開
―大野城市森園遺跡出土資料をふまえて―

鶴来　航介（福岡市埋蔵文化財課）

はじめに

大野城市森園遺跡では2021（令和３）年におこなわれた第11次調査で弥生時代の木製品が出土し、昨年度報告書が刊行された。大野城市ではこれまで木製品の出土例が少なく、今回の資料は当該地域・時期の木材利用および木器生産を考えるうえで大変貴重である。そのなかでも鍬は形態的に注目すべき事例であり、系譜上の位置づけが課題として残された。北部九州地域の木製農具がみせる特殊性には古くから関心が寄せられてきたものの、その体系的研究は2000年前後を最後に停滞しており、まずは農具の分類体系および地域相と展開を整理せねばならない。そこで本論では、玄界灘沿岸地域で出土する直柄鍬の基礎的分析をおこない、諸形式の展開を整理したうえで、森園遺跡出土資料の意義について論じたい。

１．北部九州地域の直柄鍬

（１）形式分類

当該地域の農具研究は山口譲治が主導し、分類や変遷を議論してきた（山口1988・1991・2000）。山口の分類は外縁形態を形式（器種）の枠組みとして、隆起や縦断面の形態をもって細分するものだが、類例の増加や周辺地域における研究の進展をふまえて見直しが避けられない。

北部九州地域の直柄鍬には、複数の部材を組み合わせる特徴的な着柄技術がみられる。「九州型」と呼び習わされてきたが朝鮮半島にも類例があり、また九州内部の展開を語るにあたってこの呼称は適当でないことから「複合式」と呼び替える。また柄の径差を利用して固定する汎列島的な着柄法を「平組式」として対置する。一般に平組式では柄孔が円形、複合式では方形を呈することで知られ、「円形柄孔鍬」「方形柄孔鍬」（山田2003）と区別されることもあるが、後述するように方形柄孔の平組式もあり必ずしも一致しない。

各種農具の形式分類は図１に示す通りである。直柄形態を上位属性としたことで平鍬と又鍬をそれぞれ２方式に区分し、また諸手鍬を器幅で細分した点が山口分類からの大きな改変点である。広形と細形の区別は刃部形態や隆起を作り出す方向でも判別できる。各形式の分類基準については後述する。

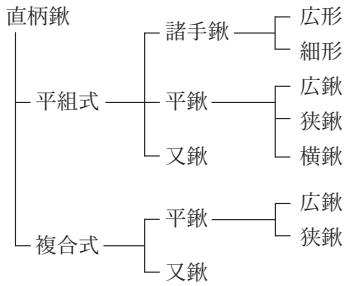


図１　形式分類

（２）着柄技術の基礎的理解

平組式の柄は頭部側が太く、柄尻から挿入すると柄孔径と一致する箇所で固定される。着柄を安定化するために柄孔部分は厚く隆起するのが一般的である。福岡平野では福岡市原遺跡や同比恵遺跡群において、柄頭を一回り太く削り出した柄が前期までみられる（図３－１・２）。単材を原則とするが、安定しない場合には頭端から楔を打ち込んで強化する例がある。簡便でかつ比較的強度が高いも

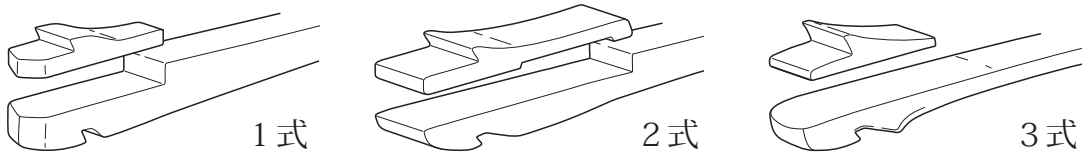


図２　複合式柄の分類

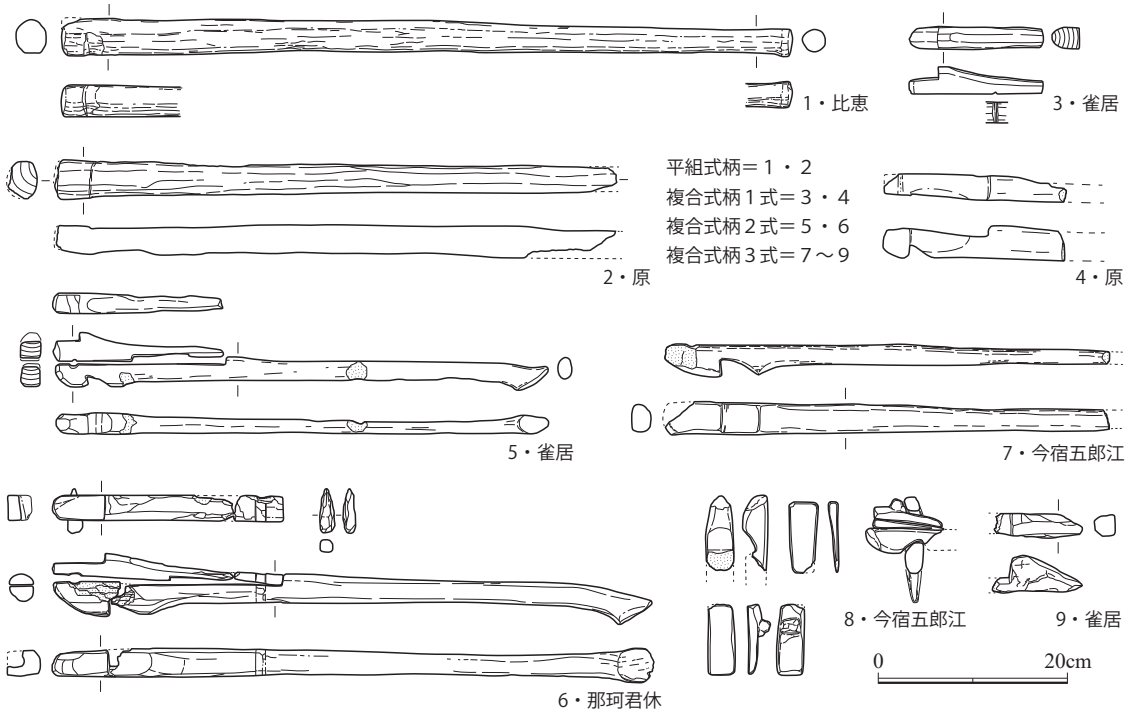


図３　鍬柄

のの、衝撃で緩んだり鍬身が回転するなど安定性に欠ける面もある。

複合式の柄は脊材（下部材）、衿材（上部材）、間挿具の３部材で構成される。前二者を組んだ状態で鍬身に挿入し、間挿具で上下に押し広げることで固定する。脊材と衿材はそれぞれ抉部をもち、間挿具には頭端から板状栓を陥入する割留と、側方から錐状栓を挿入する側留の２種がある。後者の場合は脊材・衿材に形成される筋状圧痕から判別できることが多い。

複合式柄は部材の構造から３つに細分できる（図２）。１式は衿材下面が平坦で脊材に対応する抉りをもつ（図３－３・４）。衿材は20cm 前後と比較的短小であるが例外もみられる。福岡市原遺跡などに類例がある。２式は衿材下面に抉部をもち脊材に対応する抉りをもつ。泥除の着装を前提とする[1]。福岡市那珂君休遺跡の泥除着柄例が代表的である。３式は衿材下面が平坦で脊材に抉りをもたない（図３－７～９）。福岡市今宿五郎江遺跡例は、衿材は短小でストッパーが後面側に取り付く。図３－８は横鍬の事例ながら使用状態を保つ好例である[2]。

２．直柄鍬の経時的変化

（１）諸手鍬の展開

本論では平組式広鍬の位置づけが焦点となるが、その成立過程は前期に盛用される諸手鍬の展開と連動する部分がある。諸手鍬は唐古・鍵遺跡第１次調査において細形諸手鍬が認識され、西日本のほ

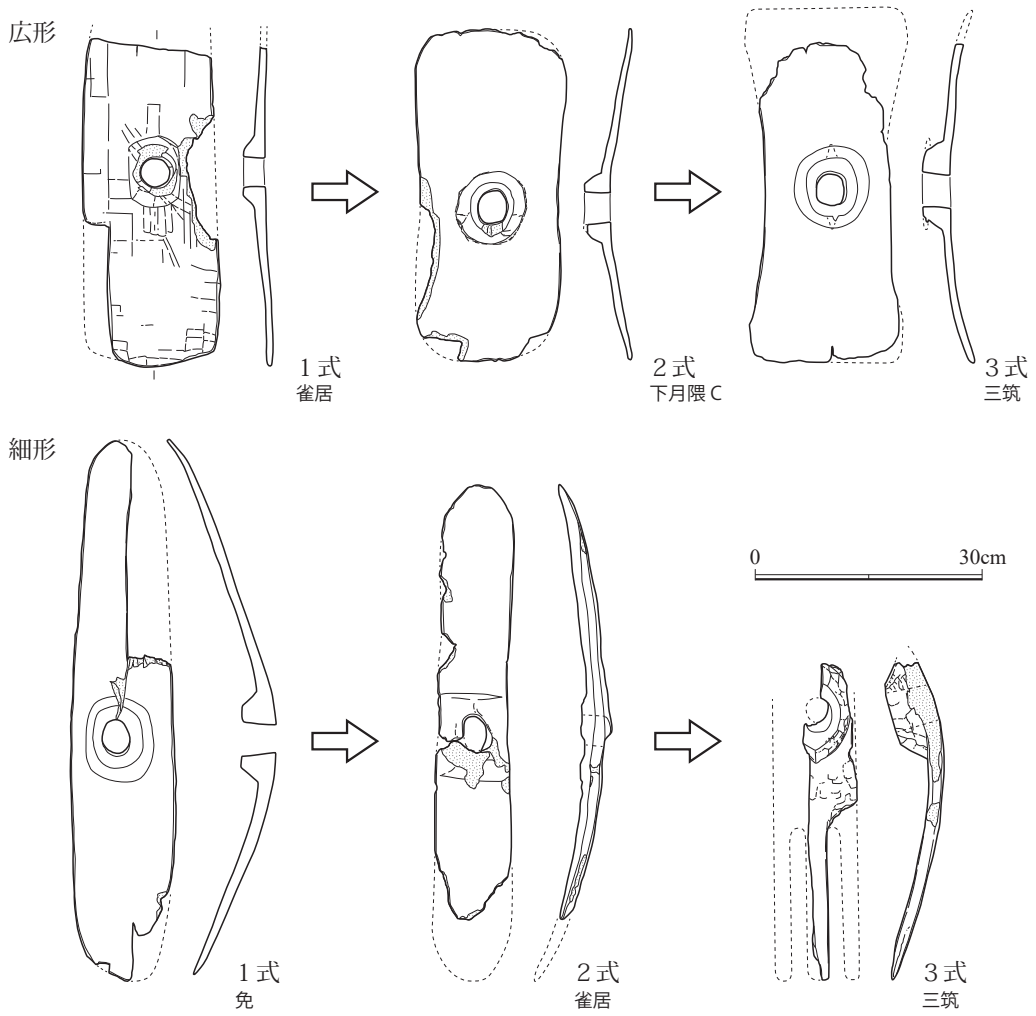


図４　諸手鍬の展開

ぼ全域に分布する。一方で、広形諸手鍬は1970年代に福岡市板付遺跡や長崎県平戸市里田原遺跡で初めて出土した。分布の中心は玄界灘沿岸地域にあり、西限を長崎県西岸、東限を西部瀬戸内地域とする[3]。

２種の諸手鍬は近年まで区別されてこなかったが、黒須亜希子が広鍬の成立を論じるにあたって分類上の区分を試みている（黒須2015）。黒須は「撥形諸手鍬」（本論の広形諸手鍬）と広鍬の系譜関係を時期と分布から検討し、直接的な先後関係を否定しているが、細形諸手鍬の展開や２種間の関係には論が及んでいない。

筆者は以前に、２種の諸手鍬と広鍬を北部九州地域の基本的なセット関係とみる見解を示した（山口・鶴来2022）。復元品の使用実験では、それぞれの操作性や掘削性能に差異がみとめられ、形式上の区分が有効と考えられる。考古学的な手続きによる客観的な検証は今後の課題となるが、諸形式の共伴事例もいくつかあり妥当性は高い。

こうした理解をもとに分類と展開を検討すると、図４のような経時的変化が想定できる。紙幅の都合により詳細は別稿を期したいが、外縁形態・縦断面形態・隆起形態・樹種の変化を伴いながら大きく３段階の型式変化が看取される。共伴遺物を参照すると、１式は早期、２式は前期前半、３式は前期後半～中期前半を主要な製作期間とする。細形諸手鍬は前期までに製作を終えるとみられるが、広形諸手鍬は中期前半まで命脈をつなぐ。

なかでも隆起形態の変化は、平組式広鍬の展開を考えるうえで大いに参考になる。成立段階の隆起は円形だが、２式では上下に棘状突起を削り出し、隆起じたいも上下方向に長大化する例が散見する。この突起が紐掛けなどの実用的な機能をもつのか、装飾的効果にすぎないのか現時点では評価しかねるものの、軽易な荷重には耐えるような重厚な突起を有する例もあり、何らかの部材を緊縛固定した可能性も否定できない。

３式ではいわゆる舟形隆起が一般化する。２式の突出部がルジメント化した形態として遷移的に捉えることもできるが、弥生時代前期には西日本一帯で採用される形態であり、他地域の影響も考慮せねばならない。少なくとも前期前半には西部瀬戸内地域において平組式の類例があり、瀬戸内以東のほうが上限は遡るとみられる。

（２）平組式広鍬の属性

つぎに北部九州地域における平組式広鍬の分類をおこなう。筆者が以前に近畿地方の広鍬編年を提示した際には、豊富な資料に恵まれて型式学的手順に沿った立論が可能であったが、当地域においては数量的に同程度の精度を確保し得ない。そこで上述の諸手鍬を参考にしながら相互に独立する各属性の展開を想定し、出土資料における相関関係を分析したうえで型式設定をおこなう。なお分析にあたっては、柄孔の穿孔や刃付けなどの細部加工を残した本整形段階の未成品もあつかう。

外縁形態　広鍬の外縁形態は、背の高い長方形志向（Ⅰ類）、方形志向（Ⅱ類）、頭部の小さい三角形志向（Ⅲ類）に大別される。これらのうちⅠ類およびⅡ類は側縁に対する加工をもって図５のように細分の余地がある。側縁が直線的な事例には未成品をふくむ場合も想定されるが、個別に判断する。各類型の器高を計測すると、Ⅰ類はおおむね30cm 以上の長規格であるのに対して、Ⅱ・Ⅲ類は30cm 未満の短規格が主体となる。鍬身の短小化は汎列島的な傾向であり、また頭部幅を縮減することで重心を落とし操作性の向上を図る趨勢も同様にみとめられる（鶴来2018）。したがって、外縁形態はⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類の順序で成立したと予想される。

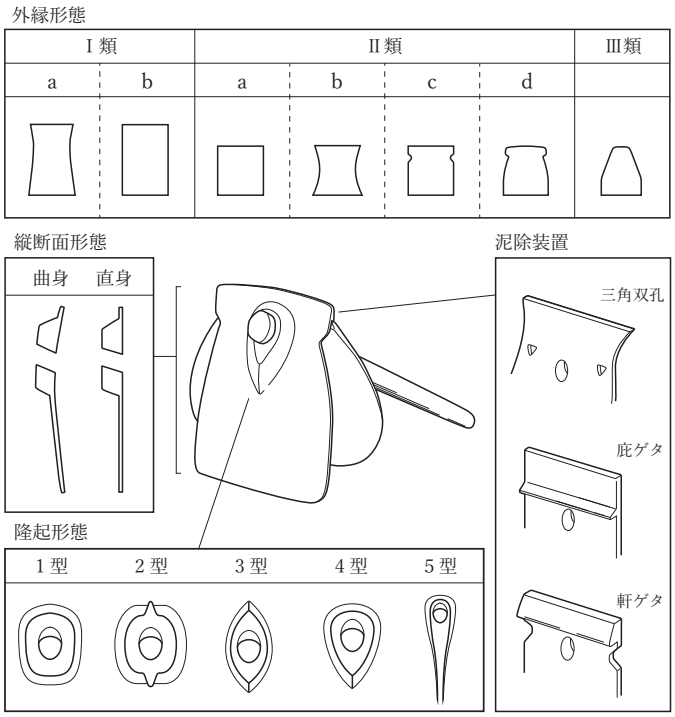


図５　平組式広鍬の形態分類

隆起形態　北部九州地域の広鍬隆起は、近畿地方でいうところの凸型（隆起が鍬身後面から明瞭に屈折して立ち上がる）しか確認できない。未成品では弓型に相当するなだらかな隆起もみられるが、成形から本整形を経て凸型に整えるものと考えられる。隆起は柄との接触面積を確保して着柄を安定化する機能をもち、その形態は意匠性が強い。平組式の鍬全体に共通する属性であるため、ある種の様式とみることができ、諸手鍬との共時性を検討する手掛かりとなる。

北部九州地域の隆起形態は図５のように区分できる。１型から３型は諸手鍬と共通する形態で、１型→２型→３型の順に生成したものと想定している。４型と５型の関係は、近畿地方では後者が型式学的に先行するが、当地にあっては前者のほうが上３類型に近いため、３型→４型→５型の成立順序が見通せる。

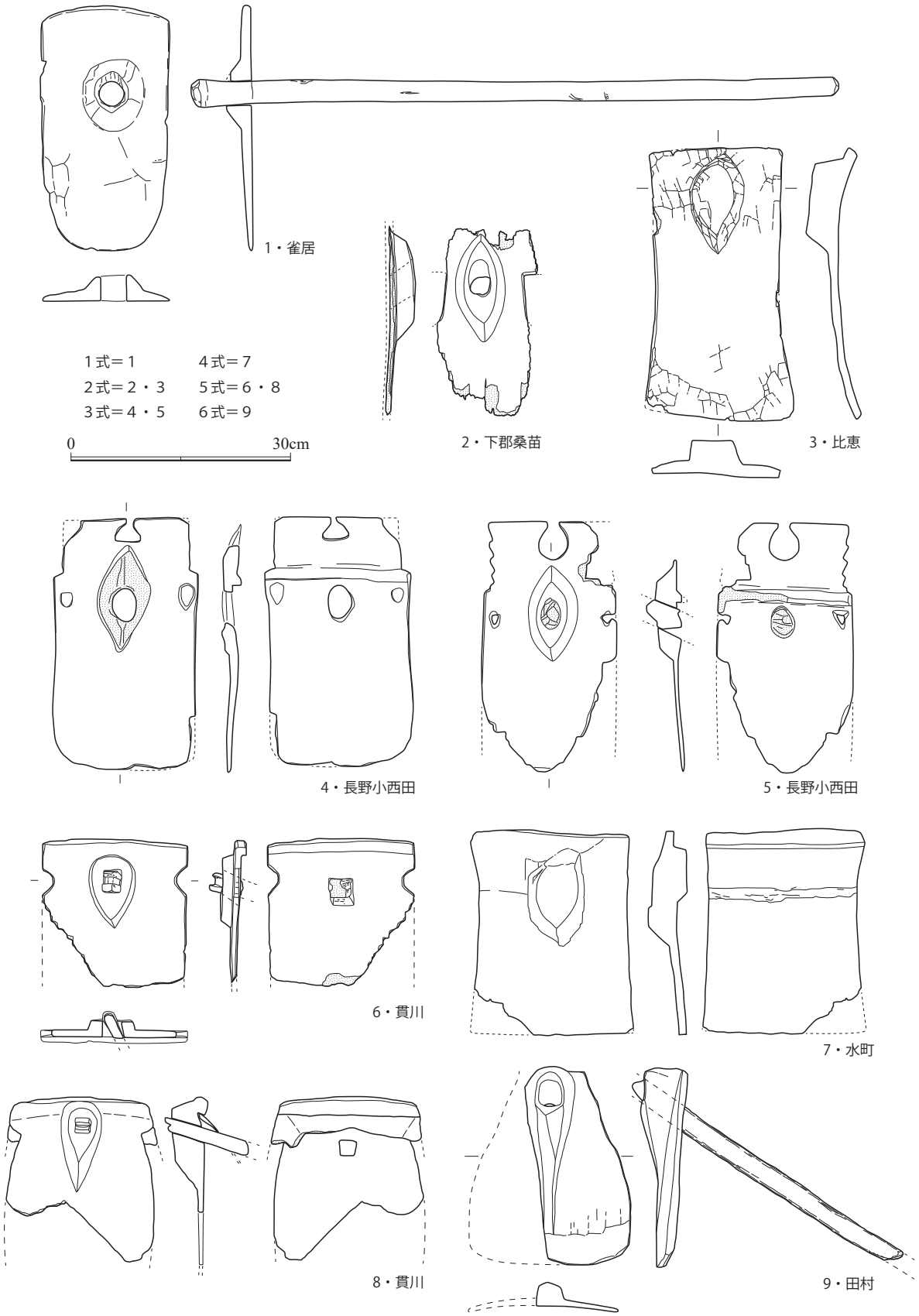

1・雀居
1式＝1
2式＝2・3
3式＝4・5
4式＝7
5式＝6・8
6式＝9
0
30cm
2・下郡桑苗
3・比恵
4・長野小西田
5・長野小西田
6・貫川
7・水町
8・貫川
9・田村

図6　平組式広鍬

縦断面形態　鍬身中央を通る垂直断面には直身と曲身の二者がある。全国的には曲身が古く、次第に直身へ転向していく傾向にあるが、上述の広形諸手鍬は１式段階で直身かつ身と柄が直交であり、２式以降に曲身へ変化する。広鍬にも広形諸手鍬１式と同様の形態があり、こうした着柄方式の直身を先行型とするならば、直身（先行型）→曲身→直身の変遷が予想される。

樹種　北部九州地域では最古段階の農具にクヌギ節を用いることが知られる（山口1991）。広形諸手鍬も１式に限ってクヌギ節であり、２式以降はアカガシ亜属へ移行する。広鍬についても同様の変遷をたどることが想定される。

泥除装置　北部九州地域でみられる泥除装置は図５の３種である。いずれも弥生時代に広くみられる形態で、近畿地方では三角双孔→庇ゲタ→軒ゲタの順で変遷するが地域差も大きい。庇ゲタは山陰地方で成立したもので、前期から中期にかけて周辺地域に波及することが知られる。なお泥除装置は付帯的な装置であり欠落する個体も多い。

（３）型式と変遷

以上をふまえて広鍬の型式を設定する。隆起形態を主要な属性としつつ、外縁形態と縦断面形態を条件に加えて下記６型式とする。

１式　外縁Ⅰ類、１型隆起、直身（先行型）
２式　外縁Ⅰ類、２・３型隆起、曲身
３式　外縁Ⅰ類、３型隆起、直身
４式　外縁Ⅱ類、３型隆起、直身
５式　外縁Ⅱ類、４型隆起、直身
６式　外縁Ⅲ類、５型隆起、直身

３つの属性は１式から６式にかけて予想された順序に配列しており、相互の組列が矛盾なく正の相関を示す。したがって諸型式がこの順で成立した蓋然性は高い。樹種傾向についても、１式のみクヌギ節を用いるほかはすべてアカガシ亜属であり、１式を最古相とする変遷観と整合している。

外縁形態を軸にみると、３式ではⅡａ類、４式ではⅡｂ類が多く、５式の主体をなすⅡｃ類まで側縁の連続的な変化を読み取れる。一方で１式のⅠａ類、２式のⅠｂ類からの流れをふまえると３式との間に断絶を感じるが、これは後述する山陰地方の影響を受けたものである。もっとも、すべての細分類型が単一の組列をなすとは限らず、集団や地域によって派生的に展開する可能性を否定するものではない。この点も後段でふれたい。

泥除装置では３式の長野小西田遺跡例で三角双孔と庇ゲタを併用する。本例は外縁形態でも山陰系の特徴を示しており、受容期の様相を呈する。庇ゲタは４式でも未成品でみとめられ、５式では軒ゲタが確認される。類例が少なく属性分析において有意とまで言えないが、少なくとも全国的な形態変化には矛盾しない。

さて、型式学的分析は共伴遺物や層位的な検証とセットでおこなうのが前提であるが、今回取り上げた資料群では残念ながら良好な出土状況に恵まれない。そのため各型式の上限や先後関係を正しく検討することはかなわないが、いくつかの資料を定点として確認したい。まず、１式では雀居遺跡例が突帯文単純期の溝で広形諸手鍬１式などと共伴しており、農耕最初期の成立が確実視される。２式では行橋市下稗田遺跡の土坑から出土した未成品３点が前期中頃、比恵遺跡群の土坑から出土した未成品が前期末の土器をともなう。４・５式では、長野小西田遺跡の中期前半の集積土坑に収められた外縁Ⅱ類の未成品が確実な上限とみられる。６式として確実な資料は福岡市田村遺跡例であるが、自然流路から出土するため時期の信頼性は低い。共伴土器は中期後半から後期初頭が主体とされる。

以上のように、組列の検証には課題を残すものの、現時点で共伴遺物の年代観に矛盾はなく、想定

された先後関係と整合的と言える。

（４）複合式平鍬の分類

つぎに複合式平鍬の分類をおこなう。複合式は北部九州地域の象徴的な木製農具でありながら、意外にもそれ自体の形態的・構造的展開が語られたことはほとんどない。本題ではないため詳述は避けるが、広鍬の様態と関連する点もあるので最低限の分類と変遷を示したい。

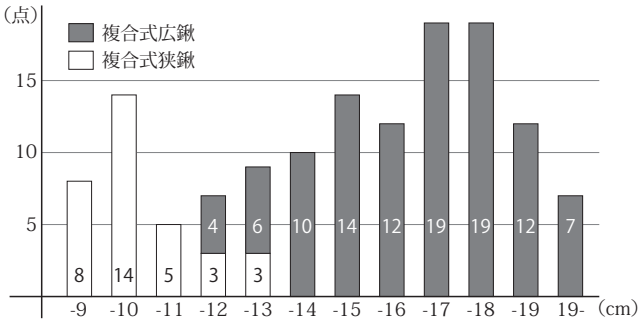


図７　複合式平鍬の身幅分布図

平組式と同様に複合式にも刃幅の大小がある。どちらも頭部は柄孔にあわせて最小限の大きさに調整されているが、刃幅の広いものは左右に開いて肩部を形成し、刃幅の狭い個体は頭部から刃部まで直線的ないしはわずかに開く。福岡市内出土の複合式平鍬について、個体別の刃幅を度数分布図に示した（図７）。刃幅のピークは９～10cm と16～18cm にあり、外縁形態による区別がおおむね刃幅の大小に対応している。したがって、上述の分類法は妥当と考えられることから、前者を複合式広鍬、後者を複合式狭鍬とする。

複合式平鍬は機能性を追求した実用的な道具であるがゆえに、洗練されたデザインが形態的なアプローチを困難にしている。山口分類においても複合式平鍬は実質的にＧ型の１類型に集約されている。一方で「糸島型」（山口2015）と呼称される特徴的な形態が指摘されており、必ずしも等質的なわけでもない。とくに複合式広鍬については後面の各部位に特徴が表れることから、以下のように類型を設定する。

Ａ類　鍬身全体が平坦な板状を呈する。

Ｂ類　柄孔周辺が浅く隆起し、刃部後面が平坦である。

Ｃ類　柄孔周辺が平坦で、刃部後面に腰段をともなう。

Ｄ類　柄孔周辺が隆起し、刃部後面に腰段をともなう。

複合式広鍬の大部分はＡ類にあたり、北部九州地域に広く分布する。Ｂ類は御笠川流域のごく限られた領域にみられるもので、製作期間もごく短いようである。Ｃ・Ｄ類はそれぞれ山口分類の糸島ｂ型とａ型におおむね対応する。いずれも糸島半島を中心に盛用され、Ｄ類はＢ類と同様に短期間に製作・使用される。

Ａ類は存続期間が長いために外縁形態の経時的変化をともなう。あえて細分するなら以下の通りになる。

Ａ１類　器高の半分程度の高さになで肩を形成し、刃先に向けて幅を減じる。

Ａ２類　器高の上半部で強く外反し、刃先に向けて垂直にのびる。

Ａ３類　器高の下半部になで肩を形成する。

Ａ４類　頭部から刃部に向けてゆるやかに開く。

共伴土器を参照すると、各類型の時期はＡ１類が中期末まで、Ａ２類が後期初頭から後期前半、Ａ３類が後期後半、Ａ４類が終末期以降とみられる。全体的な傾向としては最大幅の位置が漸進的に低くなり、肩部の形成が不明瞭になる傾向が看取できる。また器高が長大化していく傾向もあるようだが、個体差や使い減りも織り込む必要があり、類型判断の基準とはなりづらい。なおＢ～Ｄ類については次章で詳述する。

（５）泥除の着装方式

平組式および複合式の平鍬には泥除を伴う場合がある。那珂君休遺跡で初めて着装状態の泥除が発見され、構造や機能に対する考察が進んだことで同方式のイメージが強いが、北部九州地域では他に

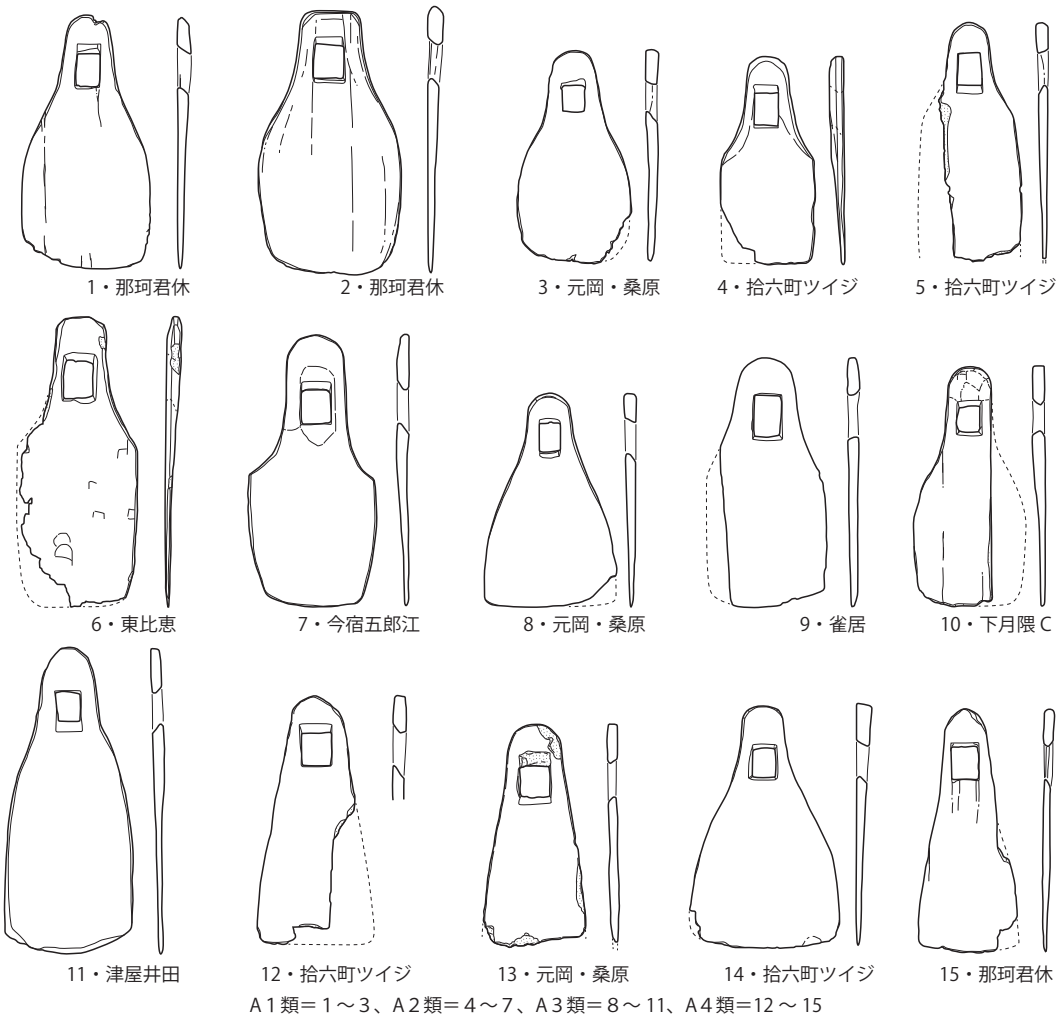


図８　複合式広鍬Ａ類

も様々な着装方式がみとめられる。泥除を着装するには鍬身および柄と密着させる必要があり、三者の位置関係は厳密に決まる。したがって二者の位置が決まればそこに合致する残りの部材の形態も自ずと確定することになり、対応する形態を絞り込むことができる。

着装方式は咬合式、懸吊式、環紐式、重接式の４つに大別される（鶴来2020a）。北部九州地域で採用されるのは重接式を除く３方式だが、環紐式は主に横鍬にみられるものである。咬合式と懸吊式は泥除の上裾と柄の位置関係で区別され、柄に上裾が接触していれば咬合式、遊離するならば懸吊式になる。以前に近畿地方で検討した分類をふまえ、下記のように細分する。

咬合Ａ式　図６－２は柄孔の両脇に逆三角形の穿孔（三角双孔）を備える[4]。双孔の上端は前面側の柄孔上端よりもわずかに高く、その間隙に弦を挿し入れてその上面を紐緊縛により押さえる構造で咬合Ａ式と呼ぶ。上裾後面に柄を添える形態の泥除が対応する。

咬合Ｂ式　三角双孔に代わって庇ゲタを泥除装置として用いる（図６－４・５）。紐の代わりにゲタで弦を押さえる方式で、対応する泥除の形態は咬合Ａ式と共通する。

咬合Ｃ式　北部九州地域の象徴的な着装方式で、複合２式の衿材の切欠きに上裾を収めて脊材で挟み込んでいる[5]。咬合Ａ・Ｂ式よりも前後方向の制動に優れる。

懸吊Ａ式　図６－６は、柄孔とゲタの間隙が35mm と広く、弦を直接挟むことができない。弦の厚

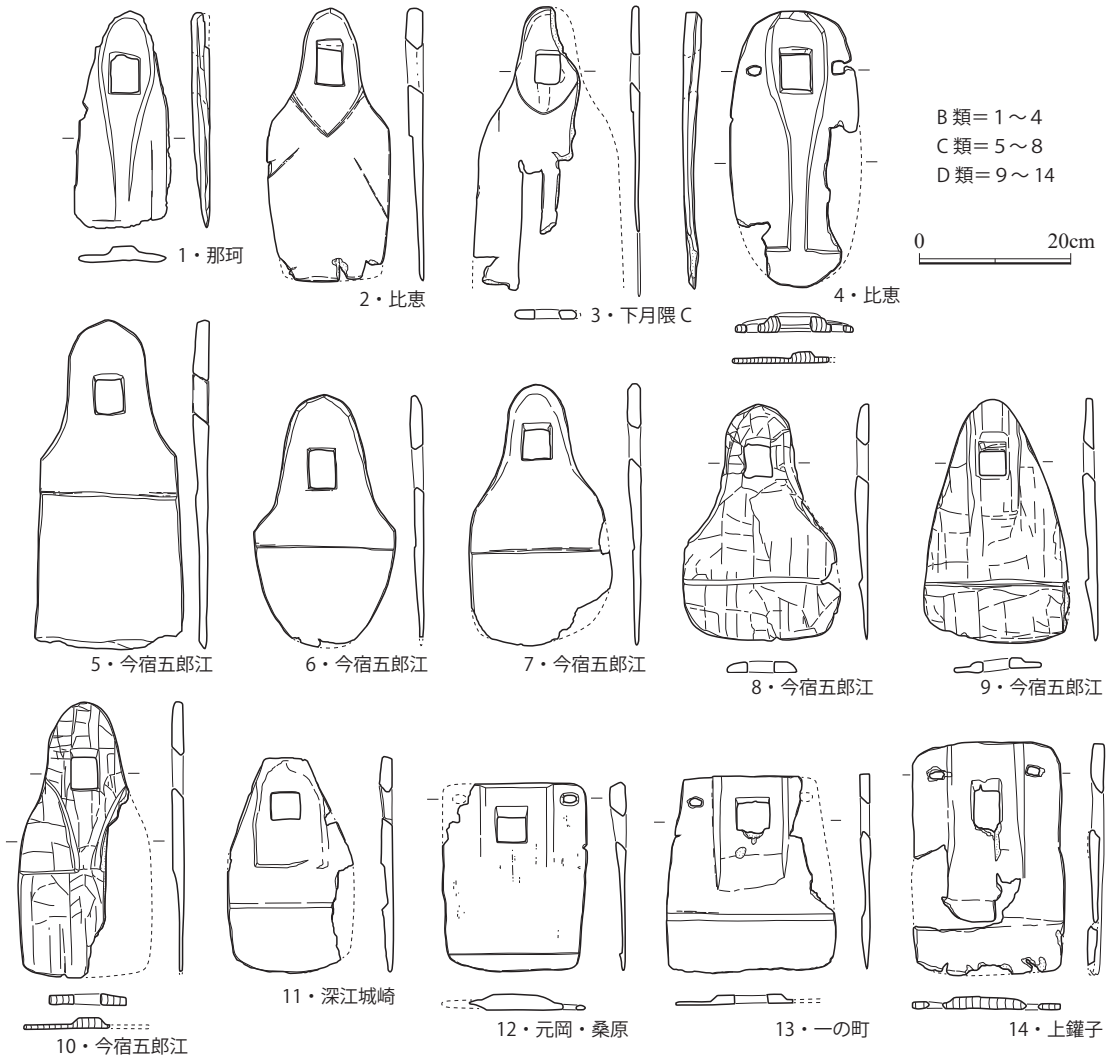


図９　複合式広鍬Ｂ～Ｄ類

み以上に間隙を空けてゲタを設ける構造は懸吊Ａ式にあたり、下裾の重みで上裾が跳ね上がるのをゲタで受け止めて固定する。対応する泥除も柄孔が上裾後面と直線的に接続せず、弦を浮かせる形態となっている。

近畿地方では咬合Ａ式→Ｂ式→懸吊Ａ式の順に変化する。これは平組式にのみ適用されるもので、複合式を主体とする北部九州地域において、咬合Ｃ式は実質的に別系統の技術と言える。とはいえ、紐緊縛を用いず部材どうしの咬合を利用する発想は同Ｂ式に共通するものであり、何らかの影響関係も推測される。

３．直柄鍬展開の地域相

（１）諸形式の展開

つぎに北部九州地域における平鍬の展開について検討する。木器文化の境界線は遠賀川に設定するのが通有である。いち早く農耕に着手した玄界灘沿岸地域や唐津平野と比べて、受容がやや遅れた遠賀川以東では地域色の強い農具生産が展開したとされる（佐藤2008）。後者には瀬戸内地域以東の影響もみとめられるものの、複雑な地域間関係を紐解く具体的な検討はいまだ課題となっている。

本章では福岡平野を中心に直柄鍬の展開を整理して形式間の形態的・技術的影響等を検討するが、分析にあたって周辺地域の影響は無視できない。とくに本題となる平組式広鍬は福岡平野周辺では出土数が少なく、遠賀川以東地域の平組式や糸島半島周辺の複合式、そして福岡平野における複合式の遷移をあわせて考える必要がある。そこで本章では、遠賀川以東地域と玄界灘沿岸地域の展開について述べたうえで、複合式広鍬の様相を中心に鍬生産の一側面を考える。

大局的にみると、玄界灘沿岸地域では中期前半まで平組式、中期後半以降は複合式を主体とするのに対して、遠賀川以東地域では複合式の導入を後期まで待ち、古墳時代まで平組式の使用を継続する。遠賀川以東地域を東西両地域の中間的様相とみることもできるが、後述するように独自性もみとめられ、とくに福岡平野との間には相互的な影響関係がうかがえる。また福岡平野と糸島平野でも組成や形態が明確に異なり、地理的な距離と形態上の近似性は必ずしも相関しない。鍬の場合は土壌環境や作業内容に左右される面も大きいものの（田﨑1998）、用途を超えた技術的・文化的差異を反映する要素も含んでいると考えられる。

（２）遠賀川以東地域

まずは響灘沿岸から周防灘沿岸までの様相を整理する。確認できる最も古い資料は、行橋市下稗田遺跡の１号土坑例（前期後半）で、平組式広鍬２式の未成品とみられる。連結未成品にみられる割付は各個体が相互に向き合う双向式であり、この時期以後に西日本で一般化する方式をとる。

前期末には北九州市水町遺跡で平組式広鍬２式と同４式の未成品が出土する。後者にみられる庇ゲタの初現は前期初頭の山陰地方にあり、前期末には近畿地方へ波及する一方で瀬戸内地域は軒ゲタの採用まで咬合Ａ式を維持している（鶴来2020a）。また外縁Ⅱ類や後面頭部の屈折は前期段階では山陰地方に限られることから、こうした形態的情報は日本海沿岸地域を伝って受容したと考えられる。なお長野小西田遺跡で出土する３式では三角双孔と庇ゲタを併用することから、最初に導入されたのはこの時期だろう。

中期後半には北九州市内で平組式広鍬５式の出土事例が多い。外縁Ⅱａ類に４型隆起、軒ゲタという組合せは山陰地方に特徴的な形質であり、前期末以来の連動性をうかがわせるが、ゲタを陽刻で削り出す技法などに相違点もみられる。類似する形態は瀬戸内地域にもみとめられ、広域でこうした形態が採用されたようだ。長野角屋敷遺跡には軒ゲタの下部に小円孔を穿つ例がある。泥除の上裾後面の直下にあたる位置で緊縛固定に関わるものとみられ、同じく山陰地方から瀬戸内地域に類例が多い。中期中頃には関門海峡を挟んだ山口市宮ヶ久保遺跡に類例もみられることから、同時期までに九州地方まで波及していた可能性もあろう。

後期ではみやこ町国作八反田遺跡で多量の木製品が流路から出土している。ここで出土する鍬はすべて複合式であり、とくに又鍬が卓越する。中期以前の複合式の分布が遠賀川以西にとどまったことを考えると、急速に器種の置換が進んだ感がある。とはいえ前者が完全に消滅するわけではなく、北九州市勝円遺跡などに同時期の出土例がある。平組式と複合式の機能は重複しながらも、用途を整理して棲み分けたとみられる。

終末期には貫川遺跡や金山遺跡で平組式広鍬５式や複合式広鍬Ａ３・Ａ４類が出土している。平組式の柄孔が方形化するのは着柄の安定化を意図したものだろう。ゲタと柄孔の間隙が広がることから懸吊Ａ式を採用し、側縁の抉りを利用して補助的に緊縛する可能性もある。後期以降の山陰地方に類似する形態がみられるものの、隆起形態が異なるため技術情報のみ受容したものと考えられる。

古墳時代前期以降では、平組式広鍬は未成品が１点確認されるのみであり、農具組成は実質的に複合式に置き換わる。遠賀川以東における平組式広鍬の製作は中期までを盛期として、後期から古墳時代移行期まで規模を縮小しながら継続し、おおむね古墳時代前期までに終焉を迎えたことになる。弥

生時代を通して日本海・瀬戸内海沿岸地域や玄界灘沿岸地域の影響を受けながらも、独特な技術体系を確立してきた点で特徴的である。

（3）玄界灘沿岸地域

最古段階の資料として福岡市雀居遺跡で突帯文単純期の木製農具が多数出土している。大半が溝にともなうものではあるが、クヌギ節を利用した諸手鍬の広形・細形および平組式広鍬がみとめられ、受容当初から組成の確立をみる前期初頭まで下る可能性のある福岡市橋本一丁田遺跡の平組式広鍬は、雀居例に類似するが用材はカシ類に転換する。

前期を通じて農具組成の主体は諸手鍬が占めており、平組式広鍬や又鍬は比較的少ない。広鍬については、前期初頭の福岡市免遺跡で２式の特徴である曲身が出土するが、全体形を確認できるのは比恵遺跡群の前期末の未成品である。隣接する土坑や福岡市下月隈Ｃ遺跡で同じ時期の泥除も出土しており咬合Ａ式が主体と考えられる。

中期には諸手鍬の減少と反比例するように複合式平鍬・又鍬が増加し、中期後半までに出土農具の大半を占めるまでに至る。複合式の鍬身は、福岡市原遺跡の中期初頭の包含層資料群をはじめとして、今宿五郎江・雀居・山王・比恵遺跡群など市内各所で中期前半までに散発的に出土する。有明海沿岸の小城市土生遺跡や生立ヶ里遺跡では朝鮮半島との類似性が高い同時期の複合式も見つかっており、受容の過程を読み解く重要な資料と位置づけられる。このように複合式は中期前半を中心に普及が進んだとみられるが、複合式の最古例は比恵遺跡群の貯木遺構にともなう前期後半の衿材である。同じ遺構に広形諸手鍬も共伴しており、機能上の峻別という観点で注目される。また複合式広鍬Ｂ～Ｄ類も中期後半から中期末を中心に各地域で製作されている。

一方で平組式広鍬の出土数は大きく落ち込む。全体形の残る資料は少なく、福岡市那珂君休遺跡や糟屋郡粕屋町戸原鹿田遺跡において、４型隆起を備えた破片が出土している。古賀市鹿部東町遺跡では６式の要素をもつ鍬が柄をともなって出土している。外縁形態Ⅲ類で５型隆起を有するが、刃幅の点では狭鍬に近い。そうしたなかで、福岡市田村遺跡の中期後半の流路から出土した平組式広鍬は６式の標準資料とも言える貴重な事例である。型式学的には５式からの変化としても理解しうるが、隆起下端が刃部まで浅く伸び、八字形に刃部が開く外縁形態は近畿地方のⅡａ式と共通する特徴で、泥除装置を欠く点でも一致する。直接的な影響関係を推定するのは難しいが、複合式平鍬が後期の近江地域で出土した例もあり、地域間交流の可能性も示唆する資料である。

後期以降は複合式への移行が完了し、平組式の製作は横鍬を除いて途絶する。下月隈Ｃ遺跡などで平組式広鍬と思しき資料も散見するが、すでに生産の盛期を過ぎて補完的な製作・使用にとどまったとみられる。

（4）複合式広鍬の地域性

すでに述べたように、複合式広鍬にはごく短期間のみ生産される３つの類型があり、それぞれ特定の地域に分布する地域性の強い鍬である。ここではＡ類や平組式との関係に焦点を当てて整理する。

Ｂ類　御笠川流域に分布する。共伴土器に依拠すれば中期末から後期初頭に属する資料が多いが、Ａ３類に対応する外縁形態もみられることから、後期後半まで製作が続いた可能性がある。当該期の平鍬としてはＡ類の割合が圧倒的に高く、Ｂ類は２割弱を占めるにとどまる。Ｂ類は隆起を付加するほかは基本的にＡ類の展開と連動しており、形態と年代の関係もＡ類の様態と符合する。

隆起の形態は、平組式広鍬の分類に照らせば４型ないしは５型にあたるが、隆起の厚みは１cm にも満たず、本来の機能を果たすとは思われない。そもそも部材を組み合わせて強度を担保する複合式では、隆起に実用性を期待できない。

意図的な製作の可能性が低いとなれば、考えられるのは平組式からの再加工である。比恵遺跡群出

土資料（図９－４）の外縁は類例のない楕円形であるが、その柄孔の左右には方形志向の双孔をともなう。この双孔もまた類例を欠くが、咬合Ａ式の三角双孔を想起させる[7]。後述するＤ類を除けば双孔をもつ複合式はみられず、機能面でも実用的ではない。比恵例は６式とみられ、一般的には双孔を用いないが、近隣の雀居遺跡では中期前半の広形諸手鍬で双孔を採用しており、何らかの地域性を反映するものと考えられる。こうした背景をふまえれば、Ｂ類は平組式広鍬をＡ類に再加工する過程で隆起部を切除しきれなかった結果として生じたものと推断できよう。また、隆起を削り残さずにＡ類に転化した例も少なくないとみられ、平組式広鍬の使用は出土量から想定されるよりも盛んだったのかもしれない。

Ｃ類　糸島半島東部に分布する。共伴土器によれば、遅くとも中期中頃までに成立しており、後期後半まで生産が続く。外縁形態の変化に照らしてもこの見方は妥当だろう。中期まではＡ類よりもＣ類の割合が高く、後期以降も主従は逆転しながらもＣ類が３～４割ほどの割合を維持する。

Ｃ類はＡ類後面に腰段を付加した形態で、他の要素はＡ類と同様の展開をたどる。今宿五郎江遺跡では中期前半の溝から出土した複合式の大半がＣ類であり、複合式の導入期から主体となる類型である。その後Ａ類の比率が高まることを考えると機能面の使い分けが進んだものとみられるが、具体的な機能は明らかでない。腰段は肩部よりやや低い位置に設ける場合が多く、柄孔下端から10cm前後に収まるのに対して、刃縁までの長さは個体差が大きい。使い減りの影響も当然想定されるが、刃縁形態にも直線的なものから弧状、Ｕ字形まで多用であり、すべてが同一の機能とは断定できない。腰段が弱く不明瞭なものもあり、実用性を前提としない議論が求められる。なお刃部に腰段をもつ形態は古墳時代前期に全国各地の平組式広鍬でみられるが、Ｃ類が古墳時代まで継続する可能性は低いため、直接的な関連は想定しがたい。

Ｄ類　糸島半島西部を中心に分布する。共伴土器に従えば中期前半から後期初頭までの存続を確認できる。分布の中心となる糸島半島西部では当該期の複合式広鍬はすべてＤ類となるが、半島東部ではＡ類およびＣ類にごく数点が混じる程度で客体的である。

糸島市上鑵子遺跡などに代表される外縁方形のイメージが先行するが、隆起と腰段を併せ持つ鍬は中期前半の今宿五郎江遺跡を最古例とし、外縁形態は他類型と共通するものが多い[8]。隆起は４・５型を念頭に置いたと思われる例もあるが、大半は垂直方向に帯状に立ち上がり、下端は緩やかに後面へ接続するもので、平組式にはみられない形態をとる。この隆起は最大で１cmほど鍬身から張り出すが、福岡平野のＡ類と比較して著しく厚いわけではなく、むしろ隆起の周囲を薄く削るものが多い。すなわちＤ類の隆起は平組式のような着柄の安定化を意図したものではなく、軽量化などを目的として薄材化を進めた結果と考えられる。今宿五郎江遺跡周辺で成立したＣ類から派生する形でＤ類が出現し、やがて糸島半島全域へ拡散したのではないか。なおＤ類の腰段は柄孔下端から約15cmとＣ類より広く、分岐した段階から機能差が存在したものと思われる。

Ｄ類のもうひとつの特徴は上端左右に穿たれた楕円形の双孔である。外縁と双孔は必ずセットをなすことから、双孔を設けるために上部を拡張したのだろう。平組式の双孔は泥除を挟み込むために柄孔の両脇に穿孔するが、Ｄ類ではやや上方へ遊離する。複合式の場合は脊材と衿材で咬合するため緊縛固定は本来不要であるが、前後方向のスライドを防止するために補助的に緊縛した可能性は否定できない。これまでに紐ずれ痕が観察された事例は管見にないが、樹皮等の使用も視野に精査する必要がある。なお一貴山・深江平野に位置する深江城崎遺跡でも双孔のないＤ類が出土することから、外縁方形化は糸島半島西部で進んだものと考えられる。

4．森園遺跡出土資料の意義

（1）森園遺跡出土資料の形態的評価

以上をふまえて森園遺跡で出土した鍬について検討したい。森園遺跡は大野城市の北東部、乙金山西麓からのびる低丘陵上に立地する。資料は丘陵縁辺にあたる第11次調査区中央の谷部３層から、他の木製品や自然木とともに出土した。同層位では中期後半を主体とする土器を多量に包蔵しており、調査担当者によれば中期前半以前の遺物が混入する恐れは低いという。

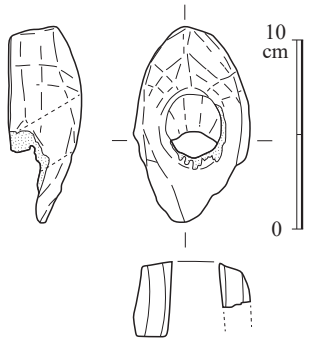


図10　森園遺跡出土資料

資料は平組式広鍬の隆起部が脱落したものである（図10）。下部を欠損するものの、上部は先端がすぼむ形状を示しており、やや丈の短い紡錘形と推測されることから３型隆起が脱落したものであろう。全体が瘤状に盛り上がり平坦面がやや不明瞭な点が特徴的といえる。外面には本整形工程の調整痕をとどめる。周辺で得られた木製品には鉄刃によるフリウチやソエアテウチも観察できるが、本例は石刃による加工である[9]。柄孔は円形で内面は磨耗のためか加工痕はみとめられない。樹種同定はおこなわれていないが、目視でアカガシ亜属の柾目材と推定している。

福岡平野における３型隆起は、中期初頭ないし中期前半に属する雀居遺跡例が最も新しい事例として知られてきた。中期後半以降は、前章で述べたように４型や５型へ変化しており、この時期まで残る３型は本例が唯一である。視野を広げてみても、遠賀川以東地域ではすでに４型への転換が完了しているし、東部九州地域でも大分市下郡桑苗遺跡にみられる中期前半までの事例が下限となる。

こうした周辺状況に鑑みると、本例は中期前半以前の混入を疑いたくなるが、この疑念は形態的観点から払拭できる。本例は隆起全体が瘤状を呈しており、前期末の比恵遺跡群にみられる３型隆起とは好対照をなす。このような特徴は中期後半の４型および５型において隆起の意匠性が薄れる過程で生じたもので、近畿地方での弓型の成立と本質的には同じ動向と言える。すなわち本例が中期前半以前に製作された可能性は低く、また谷部に包蔵された土器の時期からも、中期後半の所産と考えるのが妥当だろう。

（2）木器の再加工

本例のように鍬隆起部のみ遺存する例や、逆に隆起が脱落した鍬身は全国的にも相当量が出土している。隆起しか残らないために形式を判別し得なかった資料は、福岡平野周辺だけで十数例にのぼる。埋没後に土圧や腐朽によって破損・消失する場合も当然ふくまれると思われるものの、今回検討した複合式広鍬Ｂ類のように、他の器具に再加工する際に削ぎ落とす場合も多いことが予想される。森園遺跡でも複合式が数点出土しており、再加工にともなう切除により生じた可能性がある。

木器の再加工はこれまで個別事例でいくつか知られているが、集落における木材運用の全体像は模式的な理解にとどまる。明らかな痕跡を残さない限り、再加工を認定できないのは木器研究の高い障壁である。しかし、大阪市野崎町所在遺跡では使用済み木製品を集積する資材置場が形成され、適宜取り出して使用した状況が明らかになっている（鶴来2020b）。木材資源に乏しい同遺跡では、解体した建物の部材から小間切れに切り出して消費するという爪に火を点すような木材利用がみえる。このあり方がすべての集落に当てはまるわけではないが、使用済み木製品は器具の素材や燃料材として活用しうる貴重な資源であり、そのまま廃棄するとは考えにくい。これまで「廃棄」と解釈されてきた出土状況についても大いに再検証の余地がある。

農具の場合は板状の形態が多く、素材としての汎用性が高い。逆に板材を得るうえで隆起部などの突起物は予め除去しておくのが好都合なのだろう。こうした部材の転用先としては、古墳時代以降であるが堰や護岸などの構造材が指摘されている（山本2013）。弥生時代の那珂君休遺跡でも、堰の部材として木製品を組み込んだ例があり、弥生時代にも十分に想定できる。大型木製品の場合は長辺方向に短冊状に割り裂く場合も多く、森園遺跡の複合式又鍬も当てはまることから、本遺跡でも積極的に木製品を再利用したものと推測される。

（３）弥生時代中期後半の木器生産

福岡平野の木器生産体制については、未成品の分布密度にもとづく分業論が提起されてきた。初めてこの論点を取り上げた山口譲治は、中期後半の福岡平野では未成品が出土しないことから外部供給を想定し、複合式鍬の形態などにもとづき佐賀平野から筑後平野を供給元と推測した（山口2000）。のちに樋上昇が構造材や燃料材については自給的生産を想定したが（樋上2011）、大局的には山口の理解を継承して現在に至る。

しかしながら、未成品の出土量に立脚した分業論は今日では必ずしも成り立たないことが判明しつつあり、近畿地方ではより均質的かつ自立的な木器生産体制が想定される（鶴来2023）。未成品の有無は木材の運用体系や埋没環境、遺跡の調査状況などに左右されるものであり、木器の形態や製作技術、木工具など多面的な評価が求められる。

森園遺跡例は北部九州地域で最も新しい時期に所属する３型隆起で、周辺地域では４・５型隆起が一般化している。これは森園遺跡における木器生産単位が比恵遺跡群など福岡平野における供給主体と別個であることを示すもので、実際に森園遺跡では農具素材とみられる推定アカガシ亜属の分割材や加工屑が出土することからも、自給的な生産体制にあったと考えられる。

また前章で複合式広鍬Ｂ類の成因を平組式の再加工に求めた。Ａ類にも同様のライフヒストリーをたどった個体が少なからずふくまれるだろう。使用済み木製品の再加工は消費地でおこなわれることから、福岡平野北部の遺跡群も木材加工技術を保有していたことは明らかだ。さらに、Ｂ類の素材となった平組式広鍬は同時期の佐賀平野で出土せず、すでに途絶した形式と考えられるため、その生産主体もまた福岡平野周辺に求められる。御笠川流域のＢ類には隆起をはじめ各部位に小さな個体差があり、比較的な小規模な生産単位を見積もることができる。集落ごとの生産とまでは断定しがたいが、少なくとも一元的供給による可能性は排除できよう。

以上のように、木器の外部供給が想定されてきた中期後半の福岡平野においても特定器具の生産や再加工がおこなわれており、ある程度の生産能力を保有したことを明らかにした。段丘北端に立地する比恵遺跡群においても中期末の井戸から複合式未成品が出土し、石製・鉄製木工具の組成も充実している。たしかに資源環境は厳しく未成品の出土量も少ないが、自給生産が見込まれるだけの内容と言える。後期以降も構造材の素材を周辺の丘陵部に求めたとの指摘があり（能城・村上2016）、特定の有用木材を除けば自己完結的な木材利用を可能とする条件が整っている。カシ類などの大径木は中期までに不足あるいは枯渇した可能性もあるが、他地域のように大型材流通によって補完したのかもしれない。いずれにしても、木材調達と木器生産は別個の問題として今後議論を深めていく必要がある。

おわりに

本論では直柄鍬の基礎的研究を通じて諸形式の展開を整理して森園遺跡出土資料の位置づけをおこなうとともに、福岡平野における木工体制の見通しを提示した。北部九州地域では他地域以上に多様

な農具を使い分けたことで、地域性豊かな特色ある木工文化が育まれてきた。複合式の成立によって途絶するとされてきた平組式は、在地生産のなかで陰ながら命脈を保ち、中期末以降まで使用されたことが今回明らかになった。その再加工をめぐる木材運用から福岡平野における木工体制の一端も垣間見え、従来の地域間分業論を見直す必要性も生じている。本論では十分に議論できなかった複合式や一木鋤、また容器類や食事具といった精製品など、多角的な分析が今後の課題となる。

なお本論では言及できなかったが、森園遺跡出土木製品の加工痕には石刃と鉄刃の双方がみとめられ、製作工程による使用状況の差異が表れている。この様相は北部九州地域における木工具の鉄器化と運用体系を考えるうえできわめて重要であり、木材利用のあり方とも連動する問題であるため、別の機会にあらためて議論したい。

参考文献（紙幅の都合により、報告書については割愛する）

黒須亜希子「「広鍬Ⅰ式」の成立と展開―瀬戸内海・河内湾沿岸部における弥生時代前期の様相」（『古代学研究』第205号、古代学研究会、2015年）

佐藤浩司「北部・東部九州」（『季刊考古学』第104号、雄山閣、2008年）

田﨑博之「福岡地方における弥生時代の土地環境の利用と開発」（『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会、1998年）

鶴来航介「広鍬の編年」（『史林』第101巻第３号、史学研究会、2018年）

鶴来航介「泥除の系列」（『古代文化』第71巻第４号、古代学協会、2020年 a）

鶴来航介「弥生時代後期の木材利用」（『野崎町所在遺跡発掘調査報告』大阪文化財研究所、2020年 b）

鶴来航介『木材がつなぐ弥生社会』（京都大学学術出版会、2023年）

能城修一・村上由美子「比恵遺跡群第131次調査で出土した木製品・土木材の樹種」（『比恵71』福岡市教育委員会、2016年）

樋上昇「木工技術と地域社会」（『弥生時代（上）』講座日本の考古学５、青木書店、2011年）

山口譲治「福岡における弥生木製農具」（『考古学ジャーナル』No.292、ニュー・サイエンス社、1998年）

山口譲治「弥生文化成立期の木器」（『日本における初期弥生文化の成立―横山浩一先生退官記念論文集―』横山浩一先生退官記念事業会、1991年）

山口譲治「弥生時代の木製農具―韓国新昌洞遺跡出土農具から」（『韓國古代文化의 變遷과交涉』書景文化社、2000年）

山口譲治「第42次調査出土木製品から」（『元岡・桑原遺跡群24』福岡市教育委員会、2015年）

山口譲治・鶴来航介「板付実験水田の21年度成果報告」（『日本考古学協会第88回総会研究発表要旨』日本考古学協会、2022年）

山田昌久『考古資料大観 第８巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』（小学館、2003年）

山田昌久「日本原始・古代の木工技術」（『モノと技術の古代史 木器編』吉川弘文館、2018年）

山本靖「古墳時代における木製品出土状況の解釈」（『研究紀要』第27号、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、2013年）

---

[1] 部材による咬合で泥除を固定するのは２式のみだが、１・３式でも脊材の着柄部より手元側は断面円形となるため、平組式と同じような着装法は可能である。

[2] ３式が形式差を示す可能性も予見されるが、今宿五郎江遺跡では相当量が出土すること、古墳時代

中期以降ながら福岡市四箇遺跡群で平鍬に対応する事例のあることから、複合式全般に適用されたものと考えている。

[3] 黒須亜希子（2015）は島根県出雲市天神遺跡や石川県小松市八日市地方遺跡に広形諸手鍬の出土例をみとめるが、筆者の分類では該当資料は見当たらない。現状の東限は愛媛県今治市松木遺跡出土未成品と認識する。

[4] 同じ位置に小円孔を穿つ事例もあり、同様の機能を担った可能性がある。

[5] 咬合Ｃ式では、泥除の湾曲面を上裾とする着装法が報告以来受け入れられてきた。ところが、出土状況の不確実性や機能性の観点から、平坦面を上裾とする見方が近年提唱された（山田2018）。従来案では泥除側の柄孔と脊材が密着せず安定性を欠くことから、筆者も山田案を支持する。

[6] 貫川遺跡では終末期とされる層位で紡錘形隆起の広鍬が出土するが、外縁の長幅比や頭部および泥除装置の形態を考慮すると前期末～中期初頭ごろの資料が混入したものと思われる。

[7] 比恵遺跡群では中期後半の複合式広鍬に三角双孔をともなう事例がある。外縁形態が台形に近く刃幅23cm と大型であるうえに曲身の異質な鍬身であり、同様に平組式広鍬との関連が注意される。筑前町惣利遺跡に類例がある。

[8] 山口は頭部の小さいＤ類の成立を、佐賀平野のＡ類による影響と推定する（山口2000）。複合式の最古例を佐賀平野に求めたためと思われるが、現在ではより古い事例が福岡平野で知られることから、本文の通りＣ類の派生類型と考えたい。

[9] 本遺跡の資料群は成形工程の大半に鉄刃を用いるのに対して、製材・本整形工程の主体は石刃が占める。こうした現象は鉄器化の途上にある近畿地方でも生じるものであり、鉄器の受容と消費をめぐる一様態として興味深い。

出口遺跡出土の須恵器甕について

～肥後国荒尾窯跡群産須恵器の紹介～

山元　瞭平

1．はじめに

大野城市南部には、九州最大級の須恵器生産地として著名な牛頸窯跡群が広がっている。市域南部は文字どおり牛頸窯跡群の膝下にあたり、須恵器生産に関連する集落遺跡も多いことから出土する須恵器のほとんどは牛頸産とみられる。そのため、他地域産の須恵器が出土した場合、比較的容易に区別することができる。上記の視点に基づき、市内出土須恵器を見ていくと、非牛頸産とみられる資料がわずかながら存在する。本稿では、非牛頸産須恵器のうち、出口遺跡から出土した肥後国荒尾窯産の須恵器甕について紹介したい。

今回紹介する資料は、本市文化財調査報告書第28集（舟山・下村編1989）において、すでに報告がなされている。しかし報告書作成当時は、荒尾産須恵器の実態が不明確であったこともあり、産地に関する言及はない。その後、網田龍生氏の精力的な研究により、荒尾産須恵器の形態や製作技法の特徴が整理された。網田氏は、肥後国外で出土した荒尾産とみられる須恵器の抽出も行っており、今回報告する出口遺跡の資料も取り上げている（網田2003）。これを受け、筆者も資料を確認したところ、網田氏の見解と同じく荒尾産と判断するに至った。

1．御供田遺跡
（九州大学筑紫キャンパス遺跡群）
2．惣利北遺跡
3．向谷北遺跡
4．平田北遺跡
5．円入遺跡
6．春日平田遺跡
7．春日平田西遺跡
8．春日平田東遺跡
9．池田・池の上遺跡
10. 梅頭遺跡群
11. 本堂遺跡群
12. 野添遺跡群
13. 花無尾遺跡
14. 上園遺跡
15・19. 谷川遺跡
16. 永福遺跡
17. 末次遺跡
18. 天神田遺跡
20. 向川路遺跡
21. 唐土遺跡
22. 父子嶋遺跡
23. 水城跡
24. 矢倉遺跡
25. 出口遺跡
26. 小水城周辺遺跡
27. 上大利小水城跡
28. 野添遺跡
29. 谷蟹遺跡群
30. 島本遺跡
31. 神ノ前遺跡
32. 篠振遺跡

※アミはかつての丘陵を示す

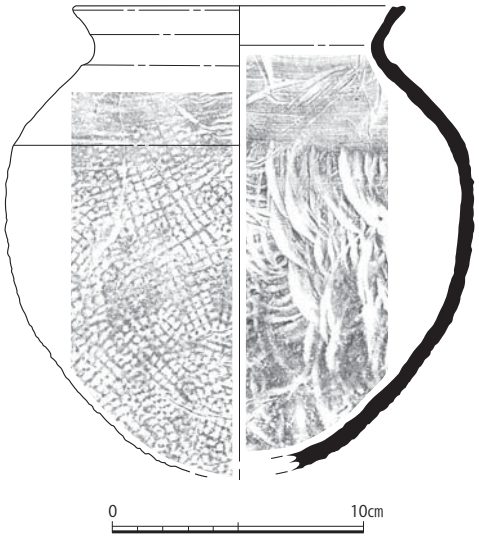
第１図　出口遺跡と周辺の遺跡（1/20,000）

２．出口遺跡の概要

出口遺跡は大野城市下大利５丁目に所在し、大野城市南部にそびえる牛頸山から派生した丘陵の先端部（標高約38～42m）に位置する（第１図）。周辺は牛頸窯跡群の北端部にあたり、本堂遺跡群をはじめとして、須恵器窯が多数営まれている。また、出口遺跡の西北部に広がる平地には、６世紀中頃から後半の須恵器工人集落である上園遺跡が展開する。また、東側には古代の防衛施設として著名な水城が築造されており、古墳時代から古代、中世にかけての遺跡が濃密に分布する地域である。

出口遺跡は、昭和63（1988）年に１度だけ発掘調査が実施されている。この調査では、弥生時代中期の土坑２基や６世紀後半の竪穴建物１棟、８世紀の土坑が２基確認されており、特に８世紀代の遺物が多く出土している。

３．資料の概要



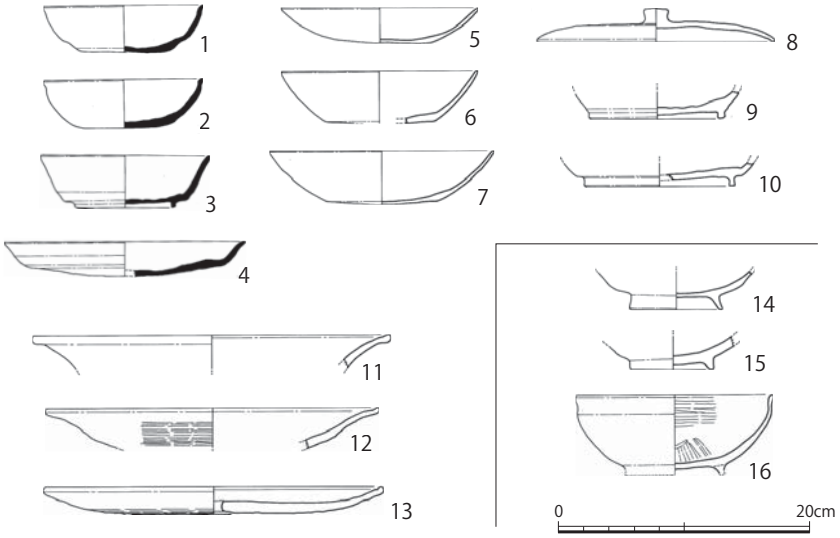
第２図　出口遺跡出土須恵器甕実測図（1/3）

今回報告する資料は、遺構に伴うものではなく調査地西側の斜面から多量の土器とともに出土した。報告書では、上部からの流れ込みか、故意に投棄したものであるか、判断できなかったと記されている（舟山・下村編1989）。

資料の特徴　荒尾産と判断した資料は、須恵器の甕である（第２図）。底部から胴部にかけてを一部欠くものの、全形をうかがうことができる。口径13.2cm、残存高18.5cm を測る。また、頸部までの容量を計測すると、約2.65ℓである。胴部は倒卵形をなし、肩部には稜がめぐるため肩が張って見える。口縁部は短く開き、端部には面を有する。外面は、口縁部から肩部にかけてヨコナデ、胴部は格子タタキである。内面は口縁部がヨコナデ、胴部は全体に円弧状の当て具痕が残るものの、上部は丁寧にナデ消されている。また、胴部上半の当て具痕は、下半部の当て具痕に切られることから、底部は最後に叩き出されたものと考えられる。色調は、外面が赤褐色・暗赤褐色・褐灰色、内面が暗赤褐色を呈する。また肩部には暗緑色の自然釉がかかり、内面の底部付近には降灰が認められることから、正位で焼成されたとみられる。そのほか、胴部には部分的にガラス化した植物質の痕跡が認められることから、焼成時の融着防止などを目的に、スサ等で覆われていた可能性が想定される。

時期的位置付け　西側斜面から出土した他の遺物とあわせて、時期的位置付けを行う（第３図）。須恵器は、供膳具が認められ、口縁部が外反した杯（第３図１・２）は牛頸窯跡群での類例に乏しく評価に苦慮するが、その他の資料については牛頸編年Ⅶ Ｂ期（８世紀後半）に位置付けられる。一方土師器は、８世紀後半のもの（第３図５～13）と10世紀後半のもの（第３図14～16）に区分できる。前者には、大宰府において杯ｄと呼ばれる下半部が丸みをおびた杯や蓋、高杯が見られ、後者には黒色土器Ａの椀が存在する。

以上を総合すると、須恵器・土師器には８世紀後半に時期の重複が認められ、当該期における定量的な土器の廃棄が想定されることから、須恵器甕についてもこの時期に比定しておきたい。なお、荒



第３図　出口遺跡西側斜面出土遺物実測図（1/6）

尾窯跡群の盛行は８世紀後半と指摘されており（網田2003）、今回の時期的位置付けと矛盾はない。

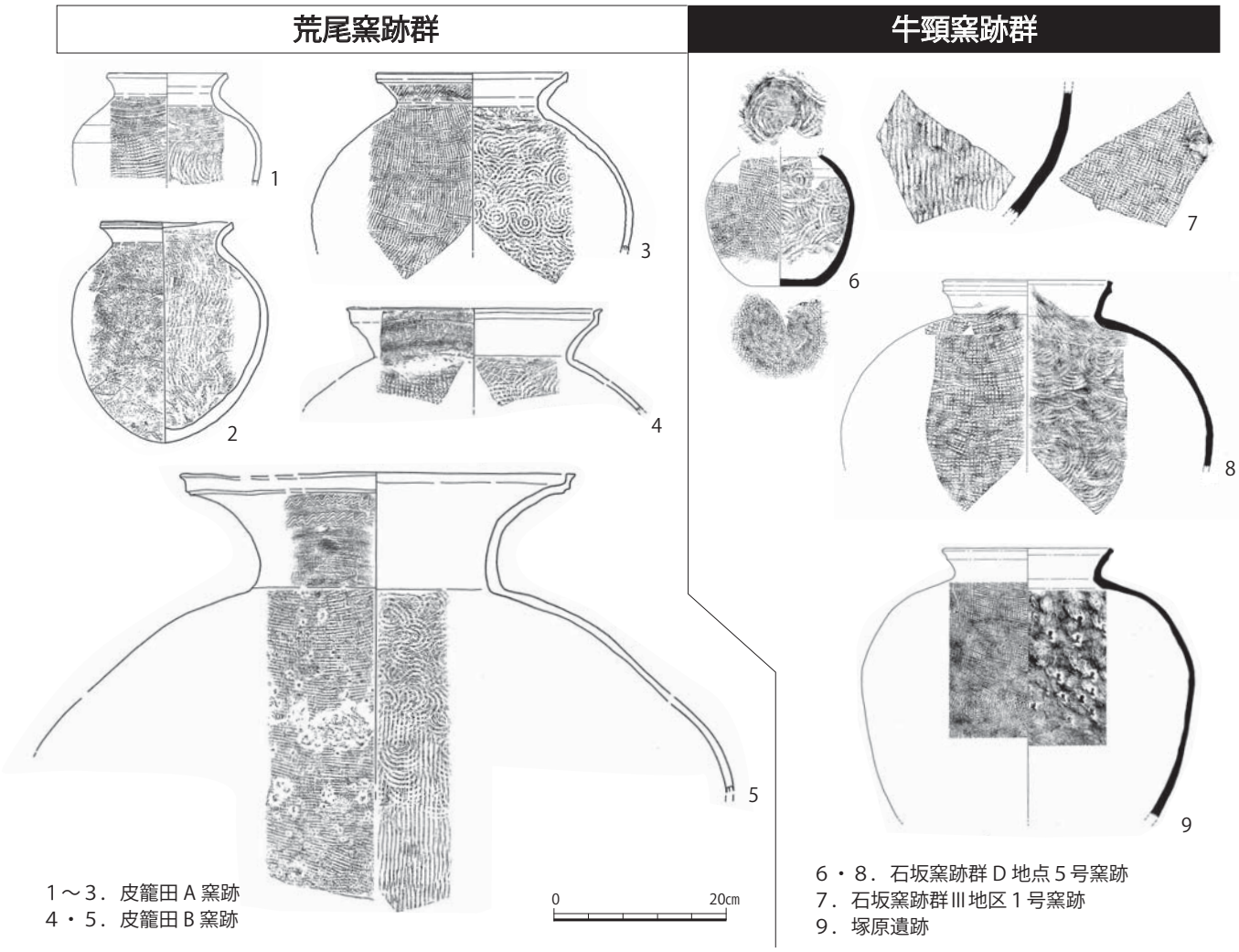
４．荒尾産とする根拠

本資料と荒尾産・牛頸産の須恵器甕を比較し、荒尾産と判断した根拠を示す。荒尾窯跡群は、肥後国北部に位置する玉名郡域に展開し、８世紀後半に生産を拡大させる。荒尾産須恵器の最大の特徴は色調であり、赤褐色や黄褐色といった特徴的なものが多く、意図的に発色させているものとみられる。また、輪状つまみを有する蓋や稜椀といった金属器模倣の製品を多く生産するほか、壺・瓶類にタタキ成形を多用するなど、技術的特徴も顕著である。須恵器甕については、大小様々な法量のものを生産している（第４図）。なかでも二重口縁の大甕は、内面の当て具を上半部は同心円文、下半部は平行文と使い分ける特異なものである。当て具痕跡の文様に着目した寺井誠氏の研究によると、上記のような異形有文当て具の出現背景として統一新羅の影響が想定されている（寺井2023）。また、９世紀中頃にはこうした特徴を有する須恵器大甕が牛頸窯跡群でも生産されており、肥後の須恵器工人の関与が指摘されている（石木2000など）。

今回報告した資料は、荒尾窯跡群の中でも小型の部類に入るもので、肩部が若干張る点や倒卵型の形態は、第４図１・２に類似する。口縁部の形態に類例は見出せないものの、格子タタキと同心円文当て具による調整や肩部のナデ調整は、第４図１とよく似ている。また、荒尾産須恵器を特徴づける赤褐色の色調を備えている点も、重要な判断材料である。

併せて、８世紀後半における牛頸窯跡群の甕にも触れておく。牛頸窯跡群では窯の小型化に伴い、甕の生産量に減少が認められる。そのため、資料は限られるものの、小型・中型品の生産が確認できる。第４図８・９のように、口縁部が直立気味にのび、外面に１条の稜がめぐるといった共通の特徴が認められる。また、胴部調整は、外面が格子タタキ、内面が同心円文当て具の資料が多いものの、平行文当て具のものも存在し、荒尾の製品と共通する。一方で、第４図９のような珍しい当て具も存在する。色調については、青灰色や灰白色を呈するものが多い。

以上を踏まえると、製作技法には荒尾産と牛頸産に共通点が認められることから、形態や色調といった複数の属性に基づき、荒尾産と判断した。



第4図　8世紀後半における窯跡出土の甕（1/8）

5．資料の意義

残念ながら本資料は遺構に伴わず、出口遺跡もどのような性格であったかは明らかにされていない。周辺を見渡すと、出口遺跡と同じような立地条件にある天神田遺跡が注目される。標高30～40mの丘陵部に位置し、8世紀後半から9世紀前半の土師器・須恵器が大量に出土しているものの、当該期の遺構は確認されていない。こうした点は、出口遺跡と同じ様相を示しており、丘陵部において土器が消費される何らかの営みがあったとみて良い。天神田遺跡の報告書では、水城西門前面部の高所に位置する点から、往来を監視するための見張り所的な役割が想定されている（澤田編2017）。

一方で、出口遺跡の場合は、水城西門からは離れており、同様の役割を想定するならば、上大利小水城がその対象となろう。いずれにしても、大宰府との境界に位置するという点は、遺跡の位置付けを考える上で重要な要素と言える。今回紹介した資料は、人々の往来や大宰府との関係の中でもたらされたものと想定しておきたい。

６．おわりに

本市をはじめ筑前国一帯は、基本的に牛頸産須恵器の供給圏であることから、出土する須恵器のほとんどは牛頸産とみて良いだろう。しかしながら、今回の事例のように一部には他国産の須恵器が存在し、特に西海道各地から貢納物がもたらされた大宰府においては、肥後産の須恵器が散見される。なかでも荒尾窯跡群の須恵器は、色調や形態が特徴的なことから、消費地での識別も比較的容易である。今後は肥後国外における荒尾産須恵器の認定を進め、流通の実態についても明らかにしていきたい。

参考文献

網田龍生　2003「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『先史学・考古学論究Ⅳ』龍田考古会
網田龍生　2008「皮籠田Ａ・Ｂ窯跡、古屋敷窯跡」『荒尾市史前近代資史料集』荒尾市史編集委員会
石木秀啓　2000『牛頸と肥後の関わりについて』九州土器研究会発表資料
澤田康夫編　2017『天神田遺跡１』大野城市文化財調査報告書第149集　大野城市教育委員会
寺井　誠　2023『有文当て具痕跡から窺える律令国家成立前後の地方の主体性と対朝鮮半島交流の研究』大阪歴史博物館
徳本洋一ほか編　1995『牛頸塚原遺跡群』大野城市文化財調査報告書第44集　大野城市教育委員会
舟山良一・下村精一編　1989『出口遺跡』大野城市文化財調査報告書第28集　大野城市教育委員会
柳本照男ほか編　2023『牛頸石坂窯跡群３』大野城市文化財調査報告書第210集　大野城市
山元瞭平編　2021『史跡牛頸須恵器窯跡１』大野城市文化財調査報告書第186集　大野城市

図出典

第１図　筆者作成
第２図　筆者実測・トレース、篠田千恵子（心のふるさと館整理作業員）採拓
第３図　舟山・下村編1989から引用、一部改編
第４図　１～５：網田2008、６・８：柳本ほか編2023、７：山元編2021、９：徳本ほか編1995から引用、作成

【ふるさとラボ通信】

『ウメ』の伝来はいつ－目加田さくを氏の著作から－

舟山　良一

1．はじめに

大野城心のふるさと館３階にはふるさとラボと呼ぶ一室がある。ここでは、中国古典文学者の故目加田誠氏、日本古典文学者の故目加田さくを氏夫妻の蔵書を、ご家族から寄贈を受けて配架している。本紀要では、前号の２号から両氏の著書を通して、両氏の人となりやふるさとラボの紹介をしている。今回は目加田さくを氏の著作の中からウメに関する話題を取り上げてみたい。

現在の元号「令和」は万葉集巻第五に収録されている大宰府権帥大伴旅人が開いた梅花の宴の序文から取られたものである。さくを氏の著書の中に『花萬葉』という１冊があって梅花の宴のことも取り上げている[註1]。『花萬葉』は万葉集で歌われている花の写真を川口小夜子氏が撮影し、解説をさくを氏が付け、春夏秋冬の順に花の歌を取り上げたものである。春から始まり、筆頭は「うめ」である。『万葉集』の中でうめの歌は119首あり、139首の萩についで二番目に多く詠まれている。そして、さくを氏は梅花の宴を催した大伴旅人について、「神亀五年、大宰帥として赴任してきた大伴宿祢旅人は、はじめて見る梅樹の豪華な梅花群に驚嘆して、蘭亭の雅遊に倣って、梅花宴を催したものでしょう。当時、日本で最高級の雅宴でした。・・・中略・・・長王詩宴で有名な左大臣長屋王すらも企てる事のできなかった梅花の宴です。」と記す[註2]。

一方、かつてはノーベル文学賞の候補者とも言われた井上靖の長編小説『額田王』の中で、大海人皇子（後の天武天皇）が白雉３年（652）に美しい歌人であった額田王を誘惑する場面がある。その舞台はみごとな梅園である[註3]。白雉３年、神亀５年とは半世紀以上のひらきがある。もちろん、虚構が許される小説の中での話であり、違っていても問題にすべきことではないが、梅がいつ日本に伝来したかは興味ある問題である。

2．文献的な検討

ふるさとラボには参考になりそうな書籍が多い。手近な所から手がかりを探してみる。まずは目加田ご夫妻の蔵書にあった『日本百科大事典』[註4]を見る。第２巻に「う」の項目があって「ウメ梅」を見る。小項目に「歴史」とあって「わが国の文献では、『懐風藻』（751年成立）のなかに、ウメをうたった葛野王の五言詩がみえるのが最初である。葛野王（慶雲２年（705）没）は奈良時代前期の人であるから、それ以前、おそらく飛鳥時代までに中国から伝わっていたと思われる。万葉集にはウメの歌がかなりある。（以下略）」とある。

『懐風藻』に収録されている葛野王の歌は10番で、『懐風藻全注釈』の著者辰巳正明氏によれば以下のとおりである[註5]。

五言。春日翫鶯梅。一首

聊乗休暇景。入苑望青陽。素梅開素靨。嬌鶯弄嬌声。

対此開懐抱。優是暢愁情。不知老将至。但事酌春觴。

（五言。春の日に鶯と梅を愛でる。一首

少しばかりの休暇の時を利用して、宮中の庭園に入って春の太陽を浴びる。庭には白梅が笑窪を開いて、可愛い鶯は美しい声で鳴いている。この春の風光に対して心を開くと鬱積した思いを解いてくれることだ。今や我が身に老いが迫っていることはどうでも良く、そんなことよりも春の酒をひたすら飲み干すことに一生懸命である。）

葛野王は壬申の乱で大海人皇子（後の天武天皇）に敗れた大友皇子の子で、天智天皇の孫にあたる。天智天皇８年（669）～慶雲２年（705）の人であるから、上記の漢詩は『日本百科大事典』のとおり、７世紀後半から８世紀初頭頃に詠われたものと推定できる。

次に、ふるさとラボの書架には『南方熊楠全集』[註6]がある。知の巨人と言われた熊楠のことだから、何らかの形で取り上げているだろうと思い、１巻から順番に目次を見ていく。期待に違わず、第３巻に「梅について」（初出は明治37年（1909）７月）、第５巻に「本邦詠梅詩人の嚆矢」（初出は明治45年（1912）３月１日）とある。前者が16行、後者が７行の短文で、執筆年代は７年ほど違っているが、どちらも梅が詠われ始めた時期について述べている。前者では、松村三任博士の説として梅は天平９年（737）ごろに伝来したものだろうとあるが、『大阪朝日新聞』に梅の歌は（柿本）人麿の（『万葉集』の）「梅の花咲ける岡辺に家居せば」が初めてで、漢詩では『懐風藻』の葛野王の「素梅、素靨を開く」の詩が初めだろうとあることを紹介し、自説を述べている。

すなわち、『続日本紀』によれば、葛野王は慶雲２年（天平９年より32年前）に45歳で亡くなっている[註7]。次に『懐風藻』に釈知蔵という僧正が詠った漢詩「花鶯を翫す」があるが、知蔵は持統帝（在位687～697）の時に僧正となった人で、その時73歳である。従って、知蔵が天平９年以後に梅を歌ったとすれば、110歳を越えて歌ったことになり、おかしい。つまり、葛野王にしろ、知蔵にしろ、天平９年より早い段階でウメの花を詠んでいるということを主張している。

熊楠の後者の論文では、梅の花を最初に詠ったのは、確証はないが年齢から考えれば葛野王より知蔵の方が早かったのではとしている。

『懐風藻』に載せられた知蔵の歌は８番で、辰巳氏によれば以下のとおりである。

五言。翫花鶯。一首。

桑文寡言晤。策杖事迎逢。以此芳春節。忽値竹林風。

求友鶯嫣樹。含香花笑叢。雖喜遨遊志。還媿乏雕虫。

（五言。花と鶯とを愛でる。一首。

僧侶たちの世界では互いに話し合うことも少なく、そこで杖を頼りに、せめて自然の美しさと出逢うことを専らとしている。このような春の素晴らしい季節に出歩いて、たちまち隠遁の人たちの好む竹林の風情に出逢った。友を求める鶯は樹の上に鳴き、香りを放つ花むらに咲いている。こうした遊び心を楽しむのだが、かえって素晴らしい詩を詠む能力の無いことを、恥ずかしいと思うばかりである）。

知蔵の歌には、花という語はあるが、梅とは明記していない。熊楠は花は梅の花と見たのだろう。しかし、辰巳氏は、この花は中国南朝梁の簡文帝晩春詩から考えて蘭の花だろうとする[註8]。ちなみに、『南方熊楠全集』の三段ほど下の棚には澤潟久孝著『萬葉集注釈』全20巻があり、澤潟氏は巻第十の1819番の歌の解説の中で「「詠鳥」の題下に収められたもの24首あるが、（中略）そのうち10首が鶯である。後世では梅と鶯とが離れられぬものとなっているが、ここでは梅と詠まれたもの２首、柳と詠まれたもの２首である。」と述べる[註9]。つまり、花が梅とは限らないことになる。

また、熊楠が『大阪朝日新聞』の記事として紹介した柿本人麿の「梅の花咲ける岡辺に家居せば」は、『万葉集』の1820番の歌がそれに当たる。澤潟氏によれば、以下のとおりである。

梅の花咲ける岡辺に家居れば乏しくもあらず鶯の声

（梅の花の咲いている岡辺に住んでいるのは稀ではないことだ　鶯の声は）

柿本人麻呂は万葉歌人として有名であるが、実は生没年が不詳である。ただ、年代の判明する最初の歌が持統天皇３年（689）で、最後の歌が文武天皇４年（700）であることから[註10]、そのころ活躍したことがわかる。

『懐風藻』に戻ると、長屋王が梅を詠った歌が67番として収録されており、辰巳氏によれば、以下のとおりである。

五言。元日宴。応詔。

年光泛仙御　月色照上春。玄圃梅已故。紫庭桃欲新。

柳糸入歌曲。蘭芳染舞巾。於焉三元節。共悦望雲仁。

（年初の日の光は天皇の住まう仙境に輝き、正月の光は新春に照り輝いあている。崑崙の庭の梅はもう色を失い、禁苑の桃はいまにも咲きだしそうとしている。柔らかな柳の枝は歌台から聞こえる歌に混じり、蘭の香りは人の頭巾に染み入る。ここに年月日が揃った目出度い日を迎え、我らはともに堯帝が雲を望むごとく天皇の仁徳を悦ぶことだ。）

長屋王は高市皇子の子である。高市皇子は天武天皇と宗像君徳善の娘である尼子娘の子であるから、天武天皇の孫にあたり、左大臣にまで就いた人物であるが、神亀６年（729）藤原氏の陰謀により妻子ともども自殺に追い込まれた悲劇の皇子である。天武天皇13年（684）の生まれとされることから、45歳で亡くなった訳だが、『懐風藻』の歌には「年は54」とある。いずれにしろ、８世紀初頭頃の歌と推定できる。

以上のことから、梅が詠まれた時期は、『懐風藻』に収録された葛野王の歌や『萬葉集』の柿本人麻呂の歌によって7世紀終わりごろ頃から８世紀始め頃の可能性が強いことがわかる。

３．考古学的検討

次に考古学的に追求できないか検討してみたい。梅などの植物の場合、残るのは花粉、種などである。また、種が発見される場所は水分の多い所で、具体的には池跡、井戸跡、水路跡、川跡などである。そして留意しなければならないことがある。発掘調査で遺構や遺物の年代を決定するには、その部分の土層が人為的に乱されていたり、地震等自然災害により乱されていないことが必要である。ところが、池、井戸、水路は機能を保持するために定期的に掃除される。また川は大雨等により洪水で底に溜まった土が流されたりして層がかき乱される場合がある。従ってこのような場所で見つかった遺物は本来どの時代のものか正確にはわからない場合が多い。また、考古学で判明する年代は文献史学で判明する年代と違い、細かな年代判定は難しい。

溝から遺物が出土する状況をみたい。大宰府史跡の発掘調査でSD2340名付けられた溝があるが、この溝は幅が５ｍを少し越え、深さが１ｍ前後で大宰府政庁（都府楼跡）の前面で発見された不丁地区の官衙群の東を区画する溝である。この溝から天平６年（734）と天平８年（736）と墨書きされた木簡とともに多くの須恵器が見つかっている。この溝の堆積層は上・中・下の３層に分かれ、木簡と多くの須恵器が出土した中層は乱されておらず、８世紀第１四半期から第２四半期（８世紀前半）の

好資料となっている[註11]。それにしても、天平６年前後とか天平８年前後などと細かな年代決定はできない。

以上のような留意点があるが、発掘調査で梅の見つかった例を探してみたい。ところが大宰府政庁周辺ではなかなか見つからない。そこで、７世紀後半頃の都城周辺を見てみたい。奈良県の飛鳥地域がその場となる。かつては飛鳥板蓋宮跡と言われていた場所は、発掘調査の結果、舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮があった場所と判明した。そして、それらの内郭と呼ばれる中心部の北西に苑池が見つかった[註12]。飛鳥京跡苑池と呼ばれている。北方には飛鳥寺、北西には甘樫丘を望む場所である。飛鳥京跡苑池は堤を挟んで北池と南池がある。中島や噴水に使用されたと考えられる石造物が見つかり、天皇が儀式や饗宴のために使用したとみられる。『日本書紀』に天武天皇が14年（戊申）10月６日に行幸したと記された「白錦後苑（しらにしきのみその）」の可能性が指摘されている。その重要性から平成15年（2003）に国史跡及び名勝に指定された。

しかし、池の造営に伴うと考えられる遺物の出土は限られていて、苑池の造営が飛鳥時代中頃に行われた可能性は指摘できるが、特定する資料に欠けている。出土した木簡には666年（丙寅、天智５年）、676年（丙子、天武５年）、678年（天武７年）、688年（戊子、持統２年）のものがある。ちなみに、当苑池は９世紀前半から有機質層の堆積が始まり、13世紀に完全に埋没したとされる。

出土した種実の同定が行われていて、センダン、モモ、ウメ、ナシ、カキ、スモモ、オニグルミ、ヒメグルミ、ナツメが見つかっている。第２次調査で北池と水路からウメの果実が１個、核が259個（種実全体の2％）が見つかっているが、モモの核は1978個（同15.29％）と、モモが圧倒的に多く、ウメは少ない。分析した金原正明氏は「南池SG9801周辺にはセンダンが植えられ、ウメ、ナシ、モモ、カキ、ブドウが植えられていた。」と述べる。ただし、その詳細な時代は不詳である。

以上のように、ウメの日本への伝来は通説通り７世後半の飛鳥時代か、８世紀前半の奈良時代の可能性が強いと思われた。しかし、九州国立博物館が令和５（2023）年１月に開催した特別展「加耶」の図録の「生駒山西麓の「牧場」」というコラムに、大阪府の四条畷市奈良井遺跡の状況が紹介されている。そこでは馬を犠牲にした祀り場があり、近接した方形板枠を用いた井戸の中からモモ種を入れた土師器の甕のほか、ウメ、マクワウリ、イヌザンショ、ヒョウタン、サクラなどの多種多量の種子が出土したとある[註13]。時代は古墳時代中期から後期（４世紀後半から６世紀頃）であるから、今まで見てきた資料よりかなり古い。このため、四条畷市の文化財担当に尋ねてみると、当該井戸は古墳時代後期初めのものとの回答を得た[註14]。実年代では６世紀前半頃となり、文献による知見から見るとかなり古い。

このことから、さらに古い時代の出土例を探すこととし、邪馬台国の所在地ともいわれる奈良県桜井市纒向遺跡ではモモが多く見つかっているので、あるいはウメも出土していないか桜井市埋蔵文化財センターに問い合わせを行った[註15]。今のところ出ていないということであったが、前述した飛鳥京跡苑池で種実同定を行った奈良教育大学の金原正明氏を紹介していただき、お尋ねしたところ、山口県下関市綾羅木郷遺跡でモモ・ウメが見つかっていることをご教示いただいた。綾羅木郷遺跡の発掘調査は昭和60年代であるから、筆者の認識不足であった。綾羅木郷遺跡の発掘調査報告書によると、分析に当たった粉川昭平氏は、東京都板橋区の弥生時代後期の前野川泥炭層出土例に次いで当時２例目という[註16]。綾羅木郷遺跡は弥生時代前期から中期初めの集落跡として知られる遺跡であるから、実年代観には異説があるが、従来の年代観で言えば紀元前３世紀頃のものとなる。そうなると、当初想定していた時期よりもかなり古くなる。

なお、金原氏によると、中国では長江（揚子江）流域の跨湖橋遺跡で7000年前の地層からモモ・ウ

メ・スモモ核が見つかっている[註17]。

4．まとめ

ウメがいつ日本に伝来したか、文字史料と発掘調査成果を概観したが、ウメは弥生時代には見られることがわかった。集成は行わなかったが、現在は出土例が増えているだろう。『漢書』に記されるように、前漢代（BC202～ AD8）から倭は中国に遣使した。３世紀には卑弥呼が魏（220～265）に遣使したし、５世紀には倭の五王が宋（420～479）に朝貢した。７世紀初めには隋（589～618）に遣隋使、唐（618～907）が成立すると遣唐使を送った。考古資料としても、前漢鏡が北部九州を中心にして出土している。その後も中国文物が多く伝えられている。それらとともに、直接か朝鮮半島経由かはわからないが、ウメが倭国にもたらされたことは十分ありうる。ただ、梅花の宴のような、花の鑑賞や詩歌に詠うようなことがいつから行われたかはわからない。目加田さくを氏が述べるように梅花の宴は王羲之の書で知られる蘭亭の宴を倣ったものだと言われている。蘭亭の宴が行われたのは中国東晋時代の永和９年（353）のことである。日本では古墳時代前期の後半頃に当たる。『万葉集』や『懐風藻』にはウメの花が詠われているが、これは日本人が漢字を使いこなせるようになったことを示すのか、文字は知らなくても、それ以前から花を楽しんでいたのかは不明である。ただ、梅花の宴のような、貴族達がいわば公式の酒宴の場を設けること自体は、律令を整備し、都城を整備し、中国の儀礼を取り入れ、日本という国号を決定していく時代と無関係ではないのではないか。

目加田さくを氏の著作から始めたウメの渡来の時期探索だったが、ふるさとラボには今回参考にしたように、ウメに関係する書籍を含め、目加田誠氏所蔵だった中国古典文学関連書籍、さくを氏所蔵だった日本古典文学関連書物、そして文化財関係書籍が多く配架されている。さまざまな問題に対処できる資料に満ち溢れている。ぜひ一度ふるさとラボを訪れていただきたい。

謝辞

小文を執筆するに当たり、奈良教育大学金原正明氏、立命館大学岡寺良氏、四条畷市教育委員会村上始氏、桜井市埋蔵文化財センター橋本輝彦氏に多大なるご教示・ご助言をいただきました。心から感謝します。

註1. 写真：川口小夜子、文：目加田さくを『花萬葉』海鳥社 1997。同書はさくを氏の後記によると、愛弟子の川口小夜子氏とさくを氏は、昭和56年（1981）を少し過ぎたころには出版する予定だったのが、さくを氏が多忙のため遅れて、川口氏が病気で平成６年（1994）に亡くなった後に出版されたことがわかる。さくを氏の川口氏への愛情と悔恨の情があふれたあとがきとなっている。

註2. 註1文献73頁。

註3. 井上靖歴史小説集第七巻『額田王』岩波書店1981 40～55頁。

註4. 『日本百科大事典２』小学館 1962。

註5. 辰巳正明『懐風藻全注釈』笠間書院 2012。

註6. 『南方熊楠全集』全12巻 平凡社 1971～1974年。ふるさとラボの全集は12巻が欠本。

註7. 35歳の間違いか

註8. 註5文献87頁。

註9. 澤潟久孝『萬葉集注釈第十』中央公論社 1962 23～24頁。なお、『萬葉集注釈』は索引を含め全

22冊であるが、ふるさとラボでは欠本がある。

註10. 『日本史広辞典』山川出版社 1997。

註11. 『大宰府史跡－昭和58年度発掘調査概報』九州歴史資料館 1984。『大宰府史跡－昭和59年度発掘調査概報』九州歴史資料館 1985。『大宰府政庁周辺官衙跡－不丁地区遺物篇２』九州歴史資料館 2014。

註12. 『史跡・名勝 飛鳥京跡苑池（一）』橿原考古学研究所 2012。種実同定は奈良教育大学の金原正明氏が行っている。

註13. 岡寺良「生駒山西麓の『牧場』」『加耶』九州国立博物館 2023　114頁。

註14. 大阪府四条畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課村上始氏にご教示いただいた。

註15. 桜井市埋蔵文化財センター橋本輝彦氏にご教示いただいた。

註16. 粉川小昭平「Ⅳ－９ 綾羅木郷台地遺跡出土の炭化種子類」『綾羅木郷遺跡－発掘調査報告第Ⅰ集』下関市教育委員会 1981。

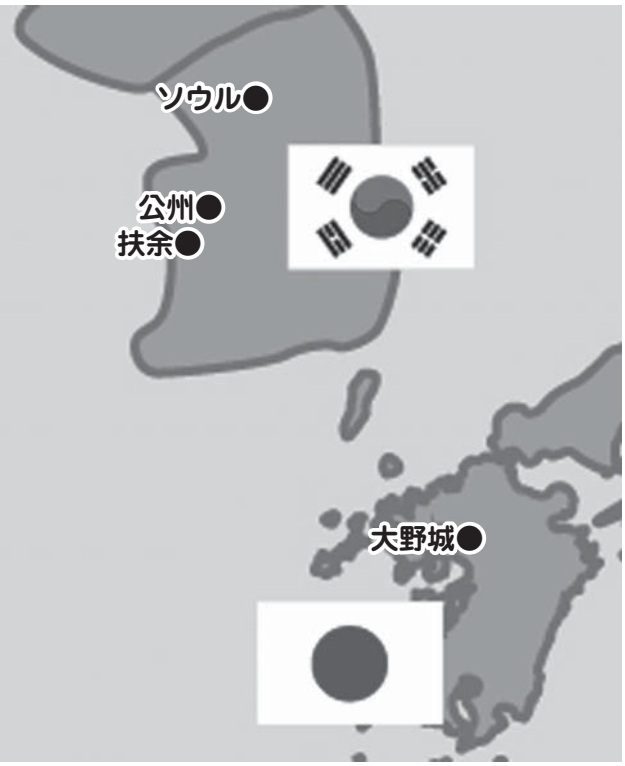
註17. インターネットで公開されている「科学研究費助成事業研究成果報告書 研究課題名 古環境の変遷と動・植物利用の諸段階 研究代表者 金原正明 令和３年６月30日現在」による。

大宰府政庁跡

飛鳥京跡苑池跡（右後方は甘樫丘）

大韓民国国立公州大学校歴史博物館との市民サポーター交流事業

大野城心のふるさと館・大韓民国国立公州大学校歴史博物館市民サポーター交流事業実行委員会



位置図

行　程

日　程	訪問先
令和５年 10月４日（水）	【韓国入国】 百済文化祭
10月５日（木）	公州大学校（協定締結） 大学歴史館 百済文化原形復元センター 公山城訪問者センター コマナル室（市民サポーター交流）
10月６日（金）	国立公州博物館 公山城 熊津百済歴史館 武寧王陵と王陵園
10月７日（土）	国立扶余博物館 定林寺址 扶蘇山城 扶余王陵園 扶余羅城
10月８日（日）	国立中央博物館 【韓国出国】

大野城心のふるさと館・大韓民国国立公州大学校歴史博物館
市民サポーター交流事業実行委員会　構成委員

役　職	氏　名	調査チーム	所　属
会　長	石橋　博	史跡・文化財	ここふるサポーター （大野城心のふるさと館ボランティア）
副会長	樫原　豊	史跡・文化財	
監　事	河野　明	博物館	
委　員	黒岩　真理子	博物館	
委　員	武元　萌子	サポーター	
委　員	宮川　晶子	サポーター	
委　員	吉本　光男	サポーター	
委　員	山内　紘	史跡・文化財	
委　員	舟山　良一	史跡・文化財	大野城心のふるさと館参与学芸員

１．はじめに

大野城心のふるさと館と大韓民国国立公州大学校歴史博物館（以下「公州大学校歴史博物館」）は、平成30（2018）年10月10日付けで、両館の学術文化交流の推進に関して両館長の名で協定書を締結した。協定の内容は、共同調査研究、共同研究発表会、展覧会等の実施、文化財及び関係資料の貸借、両館の研究者・職員等の交流など博物館活動の推進に関し必要な事項である。期間は令和５（2023）年10月10日までの５年間とした。

協定書の締結を受けて、令和２年度から両館の連携事業を実施する計画を立てた。学術交流として研究者・職員等がそれぞれ現地を訪れて調査を行い、また、市民交流も行いながら、水城・大野城と百済公山城の時代をテーマとした特別展、関連する国際シンポジウム、そして市民交流事業として大野城心のふるさと館のボランティア（以下「ここふるサポーター」）と公州市民活動団体との相互交流を実施する内容であった。

ところが、新型コロナウイルス感染症の流行により、人的な交流事業の実施が困難になったため、代替案としてリモートによる学術交流を実施することになり、令和２（2020）年度と３（2021）年度は、大野城心のふるさと館で日韓古代山城調査研究報告会を行った。

令和５（2023）年度になると、新型コロナウイルス感染症も感染症法の２類から５類へ変更となり、人的交流が実施できる環境が整った。協定締結から５年目を迎え、協定を更新する必要もあり、当初からここふるサポーターと公州大学校歴史博物館のボランティア（以下「公州大博サポーター」）との相互交流を計画していたことから、公州大学校歴史博物館での協定更新と合わせて両館の市民サポーター交流事業を実施することになった。事業実施主体は「大野城心のふるさと館・大韓民国国立公州大学校歴史博物館市民サポーター交流事業実行委員会」とし、実行委員はここふるサポーターから希望者を募り決定した。決定後は令和５（2023）年４月からおおよそ月に１回の頻度で事前研修を行った。史跡・文化財チーム、博物館チーム、サポーターチームの３班に分かれ、日韓の相違点や共通点、文化財の保存と活用の方法などについて調査し、交流の成果を今後のここふるサポーターの活動に活かすことを目指した。現地での交流では、両館サポーターが自分達の活動内容の紹介と報告を予定していたため、その資料作成や現状の事前学習、現地で知りたいことや比較したいことなどの事前協議を行い、更に質問項目を公州大学校歴史博物館に送って回答をもらうなど半年に渡り、事前の準備を進めてきた。その概要について、史跡・文化財、博物館、サポーターの各班から報告を行う。

現地調査出発直前
（大野城心のふるさと館前にて）

２．市民サポーター交流事業概要

（１）百済の史跡・文化財に関する調査研究

調査研究に関するテーマ設定

大野城市。この「大野」は読んで字のごとく広い平野を意味し、「大野村」、「大野町」と続き、そして市制施行の際「大野城市」となったのは、日本最古の山城である大野城に由来する。

大野城は、『日本書紀』に百済からの高官である達率憶礼福留・達率四比福夫に築かせたとされている朝鮮式山城である。

この百済は、４～７世紀ころの朝鮮半島で栄え、海を渡り日本（倭国）に技術や文化、仏教を伝えたとされ、日本との関係が深い古代王国である。

ここでは、史跡・文化財について、大野城市と百済の把握を行い、現地視察により知り得た相違点や共通点などの情報と活用方法などについて報告する。

大野城市の古代４史跡

調査研究にあたり、百済と最も交流を深めた時代の大野城市の４つの史跡を再認識する。

663年におきた白村江の戦いで敗戦後、唐・新羅による日本に対する侵略の危機感から664年に水城が築造され、665年に大野城が築かれることとなった。

「水城跡」は、海（博多湾側）からの侵攻を遮断するため福岡平野の最も狭い部分に築かれた土塁と濠からなる防衛施設であり、百済からの築造技術である版築工法、敷粗朶工法を採用している。

大野城跡・水城跡

「大野城跡」は、水城とともに防備を固めるため、山頂部付近に土塁・石塁をめぐらせて城壁とした日本最大級の朝鮮式山城である。城内からは現在、９ヶ所の城門、約70棟の建物跡、井戸などが確認されている。そのうち、正門とされる「太宰府口城門」からは、地面を掘って柱を立て込む掘立柱式のコウヤマキ木柱が発掘され、創建時のものと考えられている。

「善一田古墳群」は、乙金山そして大野城跡の麓にある群集墳で、全体で30ほどの古墳がある。古墳を造った人々は、古墳群の近くに住み金属器・須恵器の生産を行った開拓者集団で、特に新羅との交流でも活躍した人々であった。水城・大野城が築造される直前に造られ、これらの古墳を造った人々は、この２つの築造に関わった可能性があると考えられている。

「牛頸須恵器窯跡」は、朝鮮半島から伝えられた技術により須恵器を生産しており、600基に迫る窯が営まれていた西日本最大規模の窯跡群である。出土した甕に漢字を刻んだヘラ書き須恵器の中には３人の名前の記載があり、そのうち１人の内椋人万呂は渡来系氏族と考えられている。

百済の史跡と文化財

百済の首都は高句麗の侵略により、漢城期（ソウル：～475年）、熊津期（公州：475～538年）、泗沘期（扶余：538～660年）と移動している。

今回現地にて、熊津期（公州）、泗沘期（扶余）の史跡・文化財を調査した。

「公山城（こうさんじょう）」は、熊津期の王城で、北には錦江（きんこう）が流れ、東・西・南には稜線と渓谷に沿って総延長2.6km の城壁を築いた山城である。そして城内に王宮などがある独特な構造となっている、天然の要塞である。三国時代、百済は高句麗や新羅からの侵攻に対抗するための防衛施設として山城を構築したとされている。

現在は、城内を散策できるように道路が整備されており、対岸から公山城と錦江を望むと、大野城と御笠川を思い出すような気持ちにさせられる。

公山城と錦江
（2023年大百済典開催時に撮影）

「扶蘇山城（ふそさんじょう）」は、泗沘期の王宮の北側に位置する扶蘇山に造られた山城で普段は王宮の後殿であったが、有事には王宮を防御する施設として活用されていた。泗沘の北・西・南には錦江が流れ、自然の防衛壁として機能する。

錦江の畔に切り立つ高さ40mの絶壁「落花岩（らっかがん）」は、百済が滅亡した660年に花びらのように落ちて死ぬことで忠節を守った崇高なる百済女性の魂が今でも語り継がれている。

扶蘇山城の泗沘楼（しひろう）

落花岩

「扶余羅城（ふよらじょう）」は、東側に外郭を築造し都市を防衛できるようにしている。地形的に侵入しやすいところを人工障害物で防衛する考えは水城と同様である。発掘調査に基づき復元され、羅城に沿って歩くことができ、草刈り等もしっかりなされリアルに百済を感じることができる。

“百済の山城を歩くと水城・大野城が見える”と感じられた。

扶余羅城

「武寧王陵（ぶねいおうりょう）と王陵園（おうりょうえん）」は、熊津期の王室の墓で、横穴式石室と塼築墳（せんちくふん）がある。

武寧王とは、百済第25代の王で、百済を復興させた中興の祖として、現地では英雄視されている偉大な王である。

武寧王陵は武寧王と王妃を合葬した、トンネル型の塼築墳で、当時中国で広まった様式である。現在は埋め戻されているが、近くの展示館には同じ大きさで石室等が再現され見学することができる。

武寧王と王妃の棺の材料は、朝鮮半島では生息しないといわれている日本特産の木材であるコウヤマキが使われているほか、石獸（鎮墓獸（ちんぼじゅう））や陶磁器など中国南朝との活発な交流を示す遺物が発見されており、武寧王時代の国際性がはっきりうかがえ

武寧王陵の室内（再現）

る。武寧王は出土した墓誌に「斯麻王（しまおう）」と書かれており、『日本書紀』に出ている「嶋君（しまのきみ）」と合致することから、佐賀の加唐島（かからしま）（当時の各羅嶋）の生まれであると考えられている。

武寧王の歴史を知るうちに親近感を覚えるとともに、その偉大さを認識させられた。

塼

墓誌

「扶余王陵園」は、泗沘期の王室のお墓で、すべて百済の伝統的な横穴式石室墳である。

1993年に扶余で出土した「百済金銅大香炉」は高さ61.8cm、重さ11.8kg の大香炉で、極めて質の高い仏教文化をうかがうことができる。

３群16基の古墳群の内、７基がユネスコ世界遺産に登録されている。また、百済金銅大香炉が発見された場面も展示で見学することができ、発見時の現場を知ることができ30年前発見の緊張を感じることができる。

扶余王陵園

百済金銅大香炉

百済金銅大香炉の出土説明

「定林寺」は、日本に仏教を伝えた百済第26代聖王（せいおう）の時代に泗沘（扶余）に遷都した直後、泗沘都城の中心地に建てられた。その跡に残っている定林寺址五層石塔は現存する石塔の中で最も古く穏やかで品のある百済の美しさを感じることができる。

百済時代の講堂であった場所にある「石仏坐像」は、高麗時代に寺院を改築した際に作られた本尊仏であると推定されている。

定林寺址五層石塔

石仏坐像（宝物）

史跡と文化財の整備と活用

「百済文化祭」は、660年に滅びた百済を偲び、年に１度、９月下旬から10月上旬にかけての時期に開催される国の一大イベントである。

今回、69回目を迎える百済文化祭は、2023大百済典（世界的な歴史文化祭）として開催された。

会場は百済、熊津期の首都であった公州市と、泗沘期の首都であった扶余郡の２ヶ所で、１年毎に、メイン開場とサブ会場を入れ替えて開催されている。

2023年は、武寧王の没1500年の年で、武寧王が統治した公山城とその傍らを流れている錦江の河川敷がメイン会場で、扶余がサブ会場であった。武寧王陵から出土した鎮墓獣（想像上の動物）が、巨大なモニュメントとしてメイン会場内に鎮座していた。

「学術文化交流（公山城と水城・大野城写真展）」として、公山城の西側にある公山城訪問者センターで、公山城の紹介とともに、百済と技術交流をして築かれた水城・大野城などの写真展が開催された。

築造技術、築造目的、使用目的、規模、設計思想等の同異点があり、理解を深めることができる。

武寧王像 （公山城西門）

巨大モニュメント（鎮墓獣）

公山城と水城・大野城写真展テープカット

大野城解説パネル

「史跡の公園（観光）化」として、公山城や扶蘇山城、古墳等は世界遺産として保護されているとともに、普段は地域住民の散歩コースとして整備され、百済文化祭の時は開催会場として活用されている。

百済の歴史的意義や文化の素晴らしさを通して、地域住民が百済の誇りを持ち、地域経済の活性化を目的に、百済文化祭を通して史跡の観光利用を進めている。

ただし、史跡・文化財の活用には、日本との違いを考えさせられる場面に接する。

日本では、史跡や古墳等は、基本的に保存や管理などの現状維持が求められ、変更する場合には、法令等の定めにより文化庁の承認を得る必要がある。

公山城の散策（錦西楼（西門））

しかし、韓国で公山城や扶蘇山城、古墳群等を見ると、観光の為か遺跡の中を車が通れるくらい幅が広い通路が舗装され、遺跡の中には電線が引き込まれ、仮設舞台を作ったうえでカラオケ等の音楽会が開かれ、古墳は見た目を良くするために盛り土をして芝で覆うなど、史跡や文化財の保護や活用の考え方が日本と違うことを強く意識させられる。

大野城市にある大野城跡と水城跡は、国の特別史跡として、また、日本遺産「古代日本の「西の都」」の構成文化財として保護・活用をされている。

また、古代山城・大野城を偲んで市民団体が実施する「おおの山城大文字まつり」や地域住民の憩いの場として利用されている善一田古墳公園などを、今後も市内外を問わず、多くの方に利用していただき、史跡・文化財の魅力を感じてもらいたい。

扶蘇山城の音楽演奏

「歴史教育等の実施」としては、韓国の史跡や博物館を視察している際に小学生の団体に出会い、先生が史跡や文化財を前に説明している様子を見ることができた。

百済の史跡や文化財には漢字が使用されているため、韓国の小学生は漢字がどの程度読めるのか現地の方に確認すると、韓国の小学校では漢字を教えていないところもあり、漢字が読めない子どももいるとのことであった。

漢字の意味を知ることで、百済の歴史や文化を更に深く理解することができ、より魅力を感じることができると考えられるため、ぜひ漢字と歴史に興味を持っていただきたいところである。

大野城市でも、市内の小・中学校の子どもたちに大野城跡や水城跡の現地解説を行い、子どもたちが大野城市の歴史を理解し、郷土を愛し、大野城市を愛する心を育む取組をしているが、更に百済文化などの海外の文化や歴史にも興味・関心を持ってもらいたい。

まとめ

国立公州博物館に展示されていた武寧王の棺、その木材は日本特産のコウヤマキが使われ、当時、日本との交流があったことが示されていた。また、百済は広く外国と交流し、さまざまな文化や技術を日本にもたらしていた。

大野城市にある特別史跡「大野城跡」「水城跡」もまた、百済の技術により築城されたものであるが、百済の遺跡や遺物で、水城跡のように水を貯える人工の濠を持つ土塁が造られた記録はないとの説明を聞くと、水城跡は古代日韓の技術が融合し発展した新たな技術なのかもしれない。

文化財の整備活用にあたっては、韓国はデジタル技術が多く活かされており、保存や管理といった現状維持を基本とする日本との違いを体感することができた。しかし、違いはあれど、日本も韓国も、子どもたちへの歴史教育が行われており、国の方針として重視されていることを感じ知ることとなった。

さて、公山城や武寧王陵と王陵園では散策コースをつくり、公山城の食文化通りやロードトレインなど、地域と連携した観光活動を行っていた。大野城市でも、「連携による「地域の宝」（文化財）を活かしたまちづくり ～全ての市民が文化財を愛するまちの創出～」を基本理念に文化財保存整備活用基本計画が策定され、大野城トレイルや日本遺産「古代日本の「西の都」」の関係機関との連携による事業展開を行っている。

私たちここふるサポーターは、大野城心のふるさと館での活動において、この交流事業、そして現地研修において知り得たものを活かし、「地域の宝」である大野城跡や水城跡などを持つ「ふるさと大野城」の素晴らしさを伝えることなどで地域や学校と連携していき、大野城心のふるさと館の来館者に知識や経験を還元することができると確信している。

（２）博物館に関する調査研究

調査研究に関するテーマ設定

「大野城心のふるさと館」は「歴史と、まちと、人と、想いと「つなぐ、つながる。」市民ミュージアム」のキャッチフレーズのもと、「ふるさと大野城」をまるごと体感でき、歴史・こども・にぎわいをキーワードとして世代を超えた交流を深めることができる施設である。大野城市の貴重な歴史資産を活かし、次世代につなぎ、まちのにぎわいや人の交流を生み出すための施設となっていくことを目的としている。

大野城心のふるさと館と公州大学校歴史博物館、その他百済文化に関連した資料館などがどのような役割や設置目的の違いなどがあるかを現地視察を含めて調査を行った。

事前調査

今回の交流事業に基づく韓国公州市訪問に先立ち、調査対象とする博物館施設等のリストアップを行った。

まず、公州大学校歴史博物館、そして同市内にある国立公州博物館、この２つの博物館に対して、どのように調査するのか意見を出し合い、事前質問を行い、現地調査前に回答を得た。

最初に質問をしたのは、この２つの博物館の役割の違いについてである。

＜公州大学校歴史博物館＞
地域の国立大学に所属している博物館で、地域社会文化遺跡の調査や研究と学術的に価値のある遺物や学校史資料を収集、保管、展示して大学のメンバーや一般人の観覧を誘導し、教育資料を提供することで、社会教育を通じて地域文化の発展に貢献する。

＜国立公州博物館＞
忠清南道の中央に位置する博物館であり、熊津百済文化を中心に周辺地域の豊かな歴史と文化を保存・研究・展示するための国立博物館として、西暦475年から538年まで百済王国の首都であった熊津地域の輝かしい文化に焦点を合わせて展示されている。さまざまな記念事業、文化イベントや教育プログラムを運営するなど、歴史と文化を体験できる開かれた文化空間となっている。
この文化空間というものは、心のふるさと館の目的と共通と言える。なお、発掘調査は公州大学校が発掘主体として実施している。

その他、事前質問から得られた回答を以下のとおり抜粋して紹介する。

○観覧料の割引や展覧会の情報発信を行う会員制度のようなものはあるか。

＜公州大学校歴史博物館＞
観覧料は無料。博物館会員制度はないが、博物館大学や高度育成アカデミーなどの教育修了生を中心に博物館行事日程などを共有し、広報するネットワークが形成されている。

＜国立公州博物館＞
博物館を支援する団体として「国立公州博物館会」がある。この団体は、博物館の金銭的スポンサーではなく、博物館を愛する人たちの集まりで博物館の展示についての情報を提供している。また、博物館情報の提供を希望する人を別途募集し、博物館展示、教育、イベントに関する情報を提供。

○外国人への対応はどのような手段で行っているか。

＜公州大学校歴史博物館＞
外国語での対話が可能な大学校内の学生、大学院生などで対応している。

＜国立公州博物館＞
コロナ以前は、外国人観覧客の訪問が事前に予約されている場合、展示解説など行っていたが、コロナ以降は別途展示解説サービスを提供していない。展示解説ロボットや展示解説アプリで外国語によるサポートを行っている。

○発掘調査を行う場合、どのような機関から委託を受けているか。
公州大学校歴史博物館は、文化財庁に登録された埋蔵文化財調査機関として発掘調査を直接実施している。また、発掘調査は大学校が位置する地域の世界遺産である公州の公山城の発掘調査に特化している。

○昨年と今年では、どこを発掘調査したか。
　公山城の推定王宮地の発掘調査を実施中。百済の王城と王宮の政策研究調査を実施した。

○その他質問事項（抜粋）
　その他、来館者数等の統計数字、大学校博物館建替えの目的、小中学校等との連携事業、博物館の広報媒体等の回答を得た。
　他にも、百済文化に関連した施設に関して、それぞれの館のコンセプトや地域性を活かした展示やその展示方法、見せ方、キャプション等に違いがあるかどうか、外国語表記、障がい者対応等、現地に行って調査したことを次項のとおり報告する。

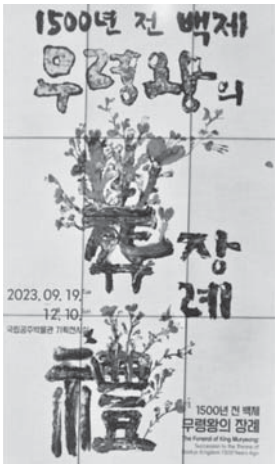
現地調査

①公州大学校
　公州大学校では、公州大学校歴史博物館は行程及び時間の都合上見ることが叶わなかったが、大学校敷地内の「大学歴史館」「百済文化原形復元センター」を視察することができた。
　「大学歴史館」はその名の通り国立公州大学校の創立からの歴史や第１期生の卒業証書といった記念品が展示されており、１つのテーマにのみ焦点を絞りつつも見ごたえのある内容となっていた。
　「百済文化原形復元センター」では３Ｄ再現モデルでの復元品が多数展示してあり、その復元品に実際に触ることもできた。また、発掘された当時の遺跡状況が土を含めて精細に復元されており、教育研究保存の役割を果たしている。現場がそのまま複製されているのには驚かされた。

大学歴史館

百済文化原形復元センター

②国立公州博物館
（併設こども博物館及び付設収蔵庫）
　館内にはシアタールームが設置されており、そこでは武寧王のお墓の中を再現するプロジェクショ



特別展「葬禮」入口モニター

花の道を歩くシアターコーナー

国立公州博物館モニュメント（鎮墓獣）

ンマッピングが投影され、デジタルコンテンツならではの幻想的な演出を体験することができる。

１階の特別展は、武寧王の没後1500年の節目として「葬禮」がテーマであった。入場者は武寧王の葬礼に列席しているという設定のもと、光や映像により花や蝶が舞い、展内は明るい雰囲気で武寧王を盛大に弔う演出がなされていた。

２階は常設展が観覧でき、考古・歴史の貴重な資料が市民に開放されていた。ここでも、AR や VR といったデジタル技術の活用が見られた。

こども博物館内

鎮墓獣をモチーフにしたキャラクター

併設のこども博物館は観覧する子どもたちへの配慮からか、13歳以下の子どもと保護者だけが入館できる。今回は視察のため、特別に入館を許可していただいた。多くのデジタル技術を採用しており、そのコンテンツは１年に１回変えていて利用者を飽きさせない工夫をしているとのこと。武寧王の偉業を中心とした構成であり、展示の最後には武寧王に関する〇（まるばつ）×クイズが設置されていた。答えはすべて“〇”が正解になっており、「問題文が正しい内容である方が記憶に残るから。」という理由の説明に利用者への優しさを感じた。

忠清北道と忠清南道の遺物を収蔵している国立公州博物館付設の忠清圏収蔵庫は、2020年に建てら

収蔵展示

屋外に展示された石造文化財

案内ロボット

れた、高さ12mもある施設で、２階建て表記ではあるものの、地下１階、１階、中１階、２階、中２階の多層階の現代的収蔵庫であり、来館者に収蔵品を見せることを前提に建設してあった。最大150万点の文化財を収蔵可能とされており、温度湿度だけでなく収蔵棚もコンピュータ制御、案内ロボットまで配置されている最新鋭の施設であった。

忠清圏収蔵庫　外観

館内のみならず、屋外に展示品が設置されている。施設に入らなくても観ることができ、展示方法の多様性も感じることができた。公州や洪城などで発見された三国時代から朝鮮時代の石造文化財が展示されており、当時の石造美術の水準の高さを物語っている。

③国立扶余博物館

調査時に開催されていた特別展は、1993年に扶余で発見された国宝『百済金銅大香炉』の発見30周年記念展示であった。発見時の写真や発掘の様子、香炉の製作技法や装飾の１つ１つの動物や人物について説明されており、「目線にあわせた展示」として少し高めの展示台を用いており、肉眼で展示品の細部まで見やすく配置されていた。

国立扶余博物館

紫を基調とした空間と、室内のお香の香りにより品位と優雅さを表現した独創的で美しい展示であり、百済王室の人々が癒されたと思われる香りに包まれることができた。一点とはいえ緻密な構成と知名度を利用した国宝『百済大金銅香炉』ならではの展示であった。

目線にあわせた展示台

また、映像技術を使ったストーリー仕立ての展示解説やタッチパネルを使って展示品を細部まで拡大確認ができるなど、ここでもデジタル技術を活用した展示が見られた。

常設展は、泗沘百済時代の遺物や百済の仏教文化関連の彫刻など４つテーマで構成されていて、それぞれが別の部屋で展示されていた。「金銅弥勒菩薩立像」といった百済の代表的な遺物も展示されている。展示ケースのガラス面に直接キャプションが貼りつけられており、展示物と解説を同時に見せる工夫がされていることも特徴的だった。

お香のコーナー

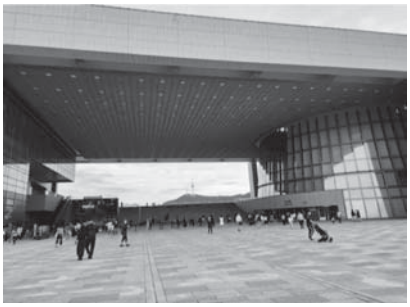
④国立中央博物館

ソウルにて見学の機会を得た。地下１階、地上３階建て常設展の西館だけでも40以上のブースで構成されている韓国内最大級の博物館である。

展示ケースのキャプションとして遺物の形をした小さなキャラクターたちが展示ケースのガラス面

に現れてそれぞれの遺物を説明する一種のシアターのような見せ方をしており、ここでもデジタル技術の活用を体験することができる。

各ブースの一角には遺物に触(さわ)れるコーナーがあり、複製品ではあるものの物の形や重さ、触(さわ)り心地を確認することができ、また、点字の図録も販売されているなど、視覚だけでなく、さまざまな感覚で楽しめる工夫や配慮がなされていた。



国立中央博物館　外観

タッチパネルで学ぶ

点字の図録

触れるコーナー

⑤熊津百済歴史館、公州武寧王陵と王陵園の展示館

熊津百済歴史館は、武寧王陵と王陵園の入り口に位置する歴史館で、2013年に開館した比較的新しい建物である。また、武寧王陵内は以前は開放されていたが、世界遺産として管理・保護のため、現在は一般開放されていない。代わりに隣接の展示館に王陵内部の墓室が復元されており、各古墳の構造の違いを実際に内部に入って体験することで、資料より更に分かりやすく、記憶にも残りやすい構成がなされていた。

王陵周辺の立体模型

復元された王陵内部の墓室

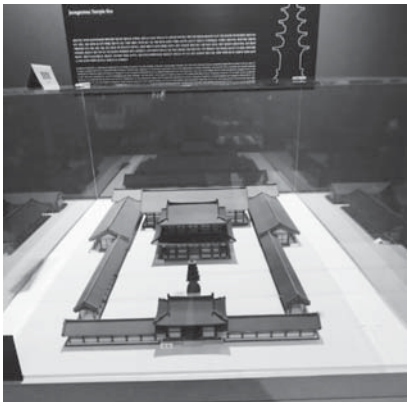
⑥定林寺址博物館

定林寺址横に作られており、デジタル技術を駆使した展示構成であり、音と光で展示物を魅せる方法は韓国ならではのセンスの良さを感じるものであった。

また、360度シアターでは史実に基づいたアニメーションが放映されており、映画を見るようにわかりやすく歴史を知ることができる。

展示物には音声解説が設置されているものも多く、英中韓日の４ヶ国語が選択でき、他国からの来場者を意識した設計がなされていた。

定林寺址博物館



定林寺模型

360度シアター上映

⑦その他屋外施設

百済文化祭の会場である公山城公園には、錦江の河川敷の駐車場に20数台で２列ほどの障がい者用と妊産婦用駐車場がそれぞれ設置されていた。

百済文化に関連した数々の施設の中でも障がい者駐車場等が特に多いことに驚くとともに障がい者や妊産婦への配慮を感じられた。

まとめ

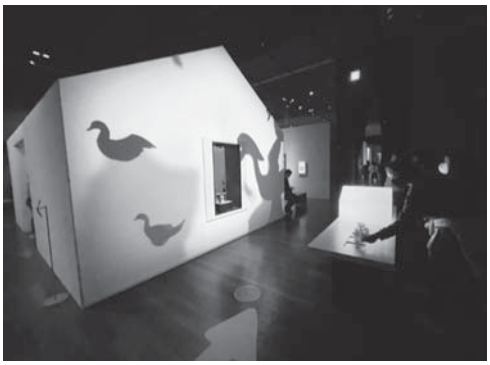
韓国の国立博物館は入場料が無料であるため、何度も気軽に行くことができ、子ども連れなども利用しやすい環境であった。国の歴史を知りたいという意欲が感じられ、興味を持つきっかけになっている。そのためか、韓国の方は歴史に興味や関心がある方が多いと感じた。

施設の利用者には子ども連れが多いように感じた。自分の国の歴史を知りたいのが「普通」だから子どもたちに興味を持って教えていくという考え方を持っていると聞き、意識の高さを感じるとともに、子どもたちのグループが施設見学に取り組む姿勢も熱心と感じた。

360度シネマ

説明しているキャラクター達

また、展示ケースの高さが子ども目線で内容もわかりやすく、IT 技術、デジタル機器、バーチャル等で子どもから大人まで楽しめる環境を作っていて子どものことまで考えられていることがうかがえる。



スクリーンに投影された展示品

韓国の世界遺産にかける国の威信やデジタル技術の進歩については、ただただ感嘆するばかりである。本調査を通して、公州大博サポーターの方々と交流する機会を得て、百済文化と大野城に関する興味も更に深まった。心のふるさと館の地域社会への役割も再認識するとともに、今後のサポーター活

動に注力したい。

公州市はソウルから南へ約120km。ソウル南部バスターミナルから、公州総合バスターミナルまで高速バスで１時間半余りの位置にある。ソウルや釜山と違って観光地化はされていないが日本との交流という歴史的な背景があり過去の遺物が大野城とのつながりを物語ってくれるのである。武寧王の偉業、そして日本との交流の軌跡をこの紀要を手に取った皆さんが知り、ぜひ現地に足を運んでもらいたいと切に願う。

祖先が築いてくれたもの、自然・文化・産業などの沿線上に、今の社会があるということを感じさせてくれる博物館。先人たち祖先たちの息吹を感じ、時空を越えて、交流や通信ふれあい交信しているような気持ちになるために。そして未来につないでいくために。

『そうだ！博物館へ行こう！！』

（３）両館市民サポーターに関する調査研究

調査研究に関するテーマ設定

大野城心のふるさと館では「ここふるサポーター」として学校連携事業やイベントなどの館事業をサポートする博物館ボランティアが活動している。今回、学術文化交流の相手方である公州大学校歴史博物館にも同じような博物館ボランティア団体があり、公州市内で、武寧王や古代百済に関連した歴史の学習や史跡・施設での解説などを行っているとのことであった。

今回、市民サポーター交流事業を通じて、公州大博サポーターの活動実態や、日本とのサポーター活動の相違点などを学ぶとともに、体験交流を通じ、そこから知り得た知識や経験をここふるサポーターと共有し、今後のサポーター活動に活かすため、韓国公州市の地に向かい、対面交流を行った。

両館サポーターの活動内容について紹介

ここふるサポーターの活動については、訪韓した８人でテーマごとに発表者を分け、印象に残っているエピソード等を交えながら紹介を行った。両館サポーターの活動内容紹介の概要は、以下に記すとおりである。

①大野城心のふるさと館「ここふるサポーター」

まず、活動内容を紹介する前に、ここふるサポーターの活動拠点である市民ミュージアム「大野城心のふるさと館」について紹介を行った。大野城心のふるさと館は多彩な利用目的で世代を超えた交流を深めることができ、「ふるさと大野城」をまるごと体験できる施設として、「ふるさと意識」の醸成を目的に「歴史」「こども」「にぎわい」をキーワードとした、さまざまな事業を展開している。特別展・企画展をはじめ、学校連携事業で小学生は昔のくらしや道具を学び、韓国の博物館を参考に造られた「こども体験ギャラリー」で、子どもから大人ま

活動報告の様子（ここふるサポーター）

で楽しめるワークショップやミュージアムコンサートなどのイベントでにぎわいを創出している。

ここふるサポーターは、大野城心のふるさと館で実施するさまざまな事業を運営・補助する活動を行っている。活動を紹介する中で、例えば、学校授業の一環として実施している学校連携事業では、実際の展示物を見ながら小学生に説明をする際に、今の子どもたちは畳での生活を知らない子がほとんどで説明に苦心したことや、未就学児が自由に遊べる「こども体験ギャラリー」では、いろんな親子が遊びに来られ家族の憩いの場になっており、週末に実施している「ここふるワークショップ」と合わせて、来館した親子と一緒に遊ぶことが自分自身の活力にもつながっているといった経験やエピソード等を紹介し、大野城心のふるさと館の魅力について発信した。

また、ここふるサポーターは、博物館ボランティアの経験者や元教育者、現役会社員や主婦などで構成されており、登録者は90名以上、平均年齢67歳で、令和４年度の累計活動回数は1,451回であったことなどを紹介すると、会場から驚きの声もあがっていた。

②公州大学校歴史博物館「公州大博サポーター」

公州大博サポーターからは、代表者１名が自ら調査・撮影し写真をもとに公州の歴史や史跡の移り変わりなどを含め、団体の活動や歴史について紹介された。

公州大博サポーターの中には、「博物館大学」という歴史文化教養プログラムを受講修了された方が多く、公州地域社会で、文化観光解説士等の歴史や文化を伝える立場として、活動を持続・拡張している。

活動報告の様子（公州大博サポーター）

「博物館大学」は、1994年から2014年まで、約20年間運営された教育プログラムであり、当時の受講生は歴史や文化を学ぶ立場から地域の歴史文化教育を担当する進行者の役割に変わってきた。

公州大博サポーターは、博物館大学の受講者や公州大学校歴史博物館で日本語学習のクラスに所属している方、武寧王を中心とした調査・研究を行う団体に所属している方などが集まって組織化され、２年後に公州大学校歴史博物館が建て替えられる時に合わせて活動を開始できるよう準備を進めているところである。

今後、３ヶ月ごとにサポーターを募集する予定で、サポーターに対する研修は、公州の歴史文化に関する教育、博物館展示案内に関する教育等を実施する。

サポーターには、公職者、教育者、会社員、主婦、実業家など多様な方が登録されていて、今回の交流事業にとても期待しており、今後も日韓それぞれの土地で交流を深めていきたいとの前向きな意見が多くあった。

相互の博物館の体験展示

大野城心のふるさと館からは、大野城市で発掘された須恵器をモチーフにした立体パズルを持ち込み、ハンズオン体験を実施した。これは、大野城心のふるさと館に設置しているもので、翻訳機や身振りでアドバイスし、共働でパズルを完成させた。組み立てた須恵器を基に、現地での須恵器との共通点や色合いを公州大学校歴史博物館の学芸室長が解説し、皆で手触りや色合い、縁の凹凸や底の模様等を観察した。

公州大学校歴史博物館からは、「塼（せん）」の拓本体験を提供された。「塼（せん）」とは、粘土を固めて焼いたレンガやタイルのことで、仏教建築の建立に伴い、基壇側面の化粧積みや床面に瓦とともに利用され、

須恵器立体パズル体験

拓本体験

表面には、蓮華文や鳳凰・珍獣等の特徴的な紋様がある。

また、拓本とは石や石碑、土器等に描かれている文字や紋様を映したい時に使う手法で、写したい文化財の上に薄い和紙をのせて、霧吹きで和紙を湿らせて上からブラシで優しく叩き和紙に凹凸をつけて、目視で確認できるようになったら、墨で上から色をつけていくもので、公州大博サポーターの方々からレクチャーを受けながら体験した。

実際に出土した「塼（せん）」の紋様で、体験してみると水や墨をつける際に水分量や墨を叩きつける力加減で、紙が破れたり色の濃淡等、拓本の大変さを体験できた。

拓本が完成した時は、拍手が起こり、体験中は言葉が通じずとも笑顔で一緒に作業し、歓声が起こる場面もあった。

サポーター交流

今回のサポーター交流事業では、先述した両館サポーターの活動報告に加えて、百済文化に関連した史跡や施設の調査にも、公州大博サポーターに同行いただいた。同行中にも交流を深め、さまざまな質問にも快く回答を得ることができた。その内容は次に記すとおりである。

①２年後に建て替え予定の公州大学校歴史博物館にどのような期待を持っているか。

５階建ての施設で、今の何倍にも大きくなり、公州大学校歴史博物館所蔵の公州地域で、発掘された遺物や百済時代の貴重な遺物などを展示できるようになり、大学校に来られた方が必ず見ていくような博物館になることが楽しみであるとの意見があった。

②サポーターを始めた動機は？

自分たちの地域や国が好きで、その歴史を知りたいという気持ちと次世代の子どもたちに伝えて、この地域の歴史を広めていきたいという理由と自分自身もサポーター活動によって知識見聞を広めたい、日常生活の中で同じ趣味の人と交流したいなどさまざまな動機があった。

扶蘇山城での交流の様子

③やりがいを感じることや楽しさを感じることは？

来館した人が喜んでいるときや感謝を述べられるときという意見が多く、ともに行動していく中でも、来館者をとてもよく気遣ってくれており、満足しているかなどとても

気にかけていた。

④展示の解説をする際にはキャプションをどのように活用しているか？

文字キャプションの掲示はあったが、来館者が自分で操作し、３Ｄ画像で、360度見られるモニターや、触れる展示、イメージ PV などの視覚的ツールが多く、解説の際は遺物自体や、実際に出土した再現模型などを見せながらの解説が多い。また、子どもは博物館内で調査したいケースの前で座学で話し合う姿も見られた。

史跡・施設見学の際のサポーターの対応

今回、対応していただいた公州大博サポーターは、皆、明るく元気に話をされ、忙しい中でも自身の仕事を調整されたりと、丁寧に対応していだいた。また、日本語でコミュケーションを図ろうとされる方もおられ、日本語学習への意欲も高く、私たちを歓迎する気持ちや思いやる気持ちが強く感じられ、今回、そして今後の交流事業の発展を強く期待されていた。

公州大博サポーターによる解説の様子

まとめ

今回の交流において、私たちが刺激を受けたこととしては、サポーターの方々の明るく元気で、話しやすかった態度や行動、説明・解説できないことをサポーター間で、援助・協力できる体制、韓国語を喋れない人にすすんで声をかけコミュニケーションを取ろうとする積極性、日本語や史跡案内等に関する自己学習、歴史への興味・関心が、子どもまで伝わっているという文化などがあった。

また、ここふるサポーターが公州大博サポーターに影響を与えたこととしては、歴史に関する知識の豊富さや、文化財や史跡を調査する姿勢、幅広い活動への取り組み等に対して評価をうけた。また、交流事業に対する積極的行動についても好評であった。

今回の交流事業で得られた知識や経験を踏まえて、今後の「ふるサポの会」の活動については、サポーター同士の交流会等の実施や、サポーター個人が自分の態度・行動を来館者が話しかけやすいものするなど

公山城での記念撮影

の変革することを考えていくことが重要と感じた。

３．おわりに

大野城心のふるさと館は平成30（2018）年７月に開館し、「日本国大野城心のふるさと館及び大韓民国国立公州大学校歴史博物館における学術文化交流の推進に関する協定書」の締結から５年が経過した。

この協定書の更新のための協定式から始まったこの市民サポーター交流事業は計画どおりに着実に実施することができた。

また、調査・研究は３班（史跡・文化財、博物館、サポーター）に分かれ事前調査・現地視察を行い、質と量ともに相応な成果を上げたところである。

開館とともに発足したふるサポの会（ここふるサポーター）の代表者が、百済文化等の知識の向上を図り、その活動の増幅につなげる目的とし、公州大博サポーターとの交流を深めることで相互の発展をめざした。

令和５（2023）年４月の実行委員会発足以後、事前準備、事前調査（研修）等を行い、５月には公州大博サポーターの一部の方が佐賀・加唐島で開催される第22回武寧王誕生祭への参加を目的に来日、大野城心のふるさと館にも来館され初顔合わせ、そして開館５周年記念特別展などを楽しく見学された。

この百済中興の祖である第25代の武寧王は、日韓交流の懸け橋であり、日本と通じるものが数多くある。また、その時代の史跡である公山城や錦江を見ると、この地はまさに大野城市を感ずるところであった。

今回の市民サポーター交流事業により得た知識と経験は、お互いの所属する公州大学校歴史博物館、大野城心のふるさと館にて必ずや生かされ、その地域に貢献し還元されるものと確信している。

今後も、公州大学校歴史博物館と大野城心のふるさと館が更に末永く発展していくよう祈念するとともに、ここふるサポーターとして大野城心のふるさと館と一緒に進んでいくことを強く期待するものである。

市民ミュージアム　大野城心のふるさと館紀要第３号

発行日　令和６年３月７日
編集発行　市民ミュージアム　大野城心のふるさと館
〒816-0934
福岡県大野城市曙町３丁目８-３
TEL　092-558-5000
印刷　㈲九州コンピュータ印刷
〒815-0035
福岡市南区向野１-19-１
TEL　092-553-6161

OCCM